

---

# 学園精霊 勇者の時間

ウラノス

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

学園精霊 勇者の時間

### 【Nコード】

N8097D

### 【作者名】

ウラノス

### 【あらすじ】

精霊の世界へ門を開き、その力を使役する魔道精霊士。しかしそれには生まれながらの素質が必要だった。無いものが、有るものに勝つための方法。その一つが錬金術。学園都市オリオン。そこは錬金術を教える、世界で唯一の教育機関。少年は、有るものから無いものへと転落する。過去に傷を負う少年が、行き着いた先。・・・そこは女子高だった。一打逆転！勇者なります！これは、一人の少年と、女の子が多めに出てくる、割とシリアスで、コメディの、熱血なお話です。

## プレリユード

関東方面行の電車は、もうすぐこのプラットホームに飛び込んでくる。

俺はカバンを片手に目の前の少女、というにはすこし年を重ねている彼女・・・アリアと、その後ろでうつむく、長い金色の髪（ハーフだ）を後ろに下ろした、カトレアさまに前髪で隠れた視線を向けた。

「もう、行くから」

MASTER・Knightの彼女なら絶対に見せない涙で、その洋菓子のように甘く奇麗な顔をぐしゃぐしゃにしながら強気に見つめる彼女の顔を、俺は久しぶりに見た気がした。

さっきおれの頬を張り飛ばしたその右手で、今度は左手を添えて自分の顔を覆っていた。

カトレアさまは少し視線を俺に向けた跡、すぐにまたうつむいてしまった。

よく見るとポタツと、彼女の精霊属性でもある水の粒が地面に落ちていた。かすかな鳴咽も聞こえる。

その二人の顔に罪悪感と寂寥感を感じながら、俺は何も言えなくな

った。

ああ、また泣かせてしまった。

発車の案内が遠くに聞こえる。このまま別れるのか。最後まで情けないまま。

頬に残る真つ赤な手の跡に沁みる何かを感じながら、彼女に背中を向けながら、俺は自分の席へと向かった。

転入する学校のパンフレットを開けたけれども、しばらく目を開けられなかった。

思い出すのは自分のしてしまったことと、それを許してくれた彼女たちの温かさ、それから逃げ出した自分の情けなさ。

まだ目を開けられない。

開けたらそれが目に見えてしまうから。

学園都市オリオンは、生徒数1万人の巨大大学オリオン大学系列の学校が密集する超巨大都市らしい。

全世界で唯一、錬金術師の養成科があることでも有名な場所だ。

そんな学園都市の中にある高校、私立オリオン大学付属学院高等部は30人12クラス（A〜L）の生徒数1020人の結構大きな学

校に、俺は通うことになる。

一つの敷地の中に様々な学校が存在し、また商店街やレストランなどが購買代わりとして生徒たちの間では御用達である。一般の人も使用できるらしい。

年に一回の学園都市内全てを巻き込んだ対抗の体育大会と協力の学園祭があるんだとか。

以上、新幹線の中で三回は読んだパンフレットの中身である。

「着いたら制服に着替えとかなきゃな。準備しとこ」

・・・バッグの一番下に入ってた。

気分を入れ替えようとしたとたんこれだよ。

「ここが、学園都市オリオン？ここ本当に群馬県某所？」

新幹線を降りてから学園都市オリオン行きの電車に乗り、そのまま学園都市内へ。

その後、西地区を通りすぎ中央駅で降車。前髪を払って顔をあげてみたときに浮かんだ最初のイメージだ。

「ヨーロッパなんじゃないのか？ここはヨーロッパなんじゃないのか？」

高等部地区は学園都市の南側にあり、校舎と寮がヨーロッパ風の作りになっているのが特徴だ。

ちなみに中央に大学の巨大な塔の形をした校舎群があり、北に中等部、西に初等部、南が高等部で東が研究所となっている。

商店街はその間を縫うように伸びており複雑かつ広大で・・・確実に迷う。

地図を広げてもここがどこだかがまったくわからない。

「約束の時間は・・・とうに過ぎちゃってるしな」

人っ子ひとりいない。まあ授業中だからしょうがないけど、しょうがないけど誰かいてほしい状況である。

暖かい暖色系で統一された石畳の上をとぼとぼと歩く。

にしてもきれいな街並みだ。向こうに見える白い建造物は、たぶん学生寮なのだとは思うのだが、もうホテルのようにしか見えないし、さらに言うならヨーロッパの洋館にしか見えない。

「シリウスとはえらい違いだな。まあ世界からして違っただけだ」

昔自分がいた場所が、とても冷たい場所だったことを思い出す。それを思い出せばアリアとカトレアさまも思い出してしまうわけで・・・。

「今頃訓練かな。それとも教授たちのねむい授業でも真面目に受けてるのかな」

思い出しても戻れないことは分かっている。彼女達に会いたいのなら、せめてこの学校を卒業し、一人前として会いに行くしかないのだろう。

魔導精霊に見放された自分は、もうどうしようもないのだろうけど。

「すみません、陽乃 紅姫さんですか？」

・・・いつも下の名前を呼ばれるのは苦痛だ。

紅姫と書いて【べにひめ】ではなく【こうき】と呼ぶ。

なぜ姫の字を男に使うんだよ・・・と思うのだが、母親の頭はお花畑だから親父がせめて読みだけでも男っぽくしてくれたらしい。精一杯の抵抗だったのだろう。

その両親もだいぶ前に死んでいるから、詳しいことは分からない。

うんざりしながら、

「はい、俺ですけど・・・」

と、振り返った俺はその女性のあまりの美しさに2度見をしてしまった。

黒く長い髪を風に揺らし表情があまり出ないお人形のような美しさを持った、この街並みとは正反対の、背の高い純日本の美人だった。

前髪越しに天使を見た気がした。って言うのは言い過ぎなのだろう

か？

「ようやく見つけました。学園はこっちです。ついてきてください」

そう言われてようやく、その女性が来ている制服が自分の持っているパンフレットに乗っているものと同じものだ気づいた。着る人が違くと服も変わって見えてしまう。まあ言っちゃ悪いがこのパンフの人ブチャイクだしな。

「？ はやく来てください。授業はもう始まっています」

冷たい声だったが、どこか感情のこもっていきそうな声だった。

なんとなく、今の声にガッコーはさばれてラッキーって感じの声だった気がした。具体的だな、俺。

「ああ、すいません！」

俺は慌ててついていった。

途中ではぐれて、二回くらい迷子になった。

俺は方向音痴だったらしい。ショック。



駅からしばらく歩いた先に、その学校はあった。

なんというか、もうそこは

「お城じゃん」

お城だった。

「なにをなさっているんですか？」

今の声には、さっさとしろよ的な感じがした。

「いや、お城だなあと思って」

素直に答える。と言うよりこういう場合は、門から学校までが遠いのだと思っていたが、ここは門までもが長いらしい。

「さっきも言いましたけど、授業中ですよ？」

あ、今度は怒っている。この人は感情を顔には出さなくても、かなり豊からしい。

ふと、俺はこの人の名前も知らないままついてきていたことを思い出した。

「そういえば、お名前は何と言っんですか？」

「・・・大地　八雲です。」

「そうなんですか・・・」

・・・

無音地帯。少しの春の匂いが辺りを包む。シリウスでは感じなかった季節がここにはある気がした。

のも最初だけ。後はひたすら沈黙沈黙沈黙

「や、八雲さんは何年生なんですか？」

・・・沈黙に押しつぶされるヘタレ紅姫。

そんな声が聞こえる。

ふつと感情の見えない黒の瞳を紅姫にむけ、その赤い唇から冷たい口調で言葉を出す。

「二年C組特務科所属です。出席番号入りますか？」

「いえ、いいんですけど・・・特務科？」

というより今のは冗談なのだろうか。声色がすこし弾んでいた気が・・・。

「特務科と言うのは・・・向こうで聞いてください。この学院は、少し特殊なんです」

再び沈黙

「というより、すいません」

「なにがですか？」

「いや、すごく怒ってらっしゃるから、なにか聞いてはいけないことだったのではないかと」

すると彼女・・・じゃなくて八雲さんは、ひどく驚いた顔・・・ではなく声で聞き返してきた。

「どうして分かったのですか？私が怒っているだなんて」

「いや、声にすごく感情がこもっているんで・・・」

「信じられない・・・親にさえ気づかれたことなんてなかったのに・・・」

「あの？八雲さん？」

「私とあなたは同学年です。敬語は不要です」

すこし寂しさを感じさせる声で彼女はそう言った。場面は少しずつ変わってゆく。なんだか大学の方はすごく近代テクノロジーな感じのする高層ビルが乱立しているようなのだが・・・気のせい気のせい。

「なら八雲？」

「初対面ですよ？私たちは」

「ほらやつぱり八雲さんじゃないですか」

「・・・敬語をやめろと言ったのですが・・・」

そんな呆れと疲れを感じさせる声でいわないでえ

「それより校門が見えてきましたよ。あれが私立オリオン大学付属学院高等部です」

なにげなく校門を通り過ぎる時に目をやった。

【私立オリオン大学付属女学院高等部】

俺の世界が止まった気がした。

「えええ！？女、女子高！？」

慌てて八雲を見る。

「大丈夫、共学です」

「でもこのプレートが」

何回見ても大学付属『女』学院の文字が。

「今年から共学化したんです」

声からして嘘はついてないだろう。

「というより共学でなくては試験受けられないでしょう」

それもそうだ。

「でもおかしいですね。この学院の女子目当ての男子学生が多いせいで、編入も新入生も全員落とされたと聞いていたんですが・・・」

「え？もしかして男子は・・・」

「はい。おそらくあなた一人だあることが確実です。ご愁傷様・・・いや、この場合はおめでとう、でしょうね」

こんどこそ世界が止まり、そして崩れた。

「ここが生徒会室です。一度顔を出しておいた方がよいでしょう」  
学院はすでに昼休みだった。というより、中の構造も洋館そのものと言った感じだった。

パニック防止とかで隠されてここまで来たのだが・・・職員室よりも先に生徒会？

「この学院は、教師と生徒会が同じくらいの権力をもっていますし、生徒間のことは生徒同士で片付けることも大事なことです」

特に大きなドアの前でそう説明されるが、

「き、緊張するな」

そう言うとき彼女はすこし笑った声で

「まあ生徒会のメンバーは全員あなたと同じクラスの2・Cの生徒です。そんなに硬くならなくても大丈夫ですよ」

「え？二年生なんですか？」

「はい。二年生で構成されています。それより早く入りましょう」

というより後ろの校庭から破壊音が聞こえてくるのだが。これが錬金術？

「失礼します」

「あ、ちょっと危ないかもおおおお」

その大きなドアをあけた瞬間、目の前にはまっ黄色のバレーボール。よけるか夢の旅に出るかの選択肢が見えた。

俺は旅立つほうを選んだ。

「だいじょうぶう？転校生君」

「飛んできたボールに当たっちゃうなんてさ、反射神経が鈍いんじゃないの？」

「だよねえ？あたしなら避けるもん」

ひどい言われようだな。

というよりも頭に感じるこの柔らかさは・・・すつと薄目を開けると、無表情の美女が俺を膝枕していた。

あー。どうりで・・・って膝枕！？

「おおおう！」

ガバツと跳ね起きる。あ、焦った

「あら、おきましたか」

相変わらずの無表情美人・・・じゃなかった八雲さんは、気だるげにこっちに顔を向けた。

「ど、どうーして！っすか？」

何言っただよこいつ・・・みたいな顔はしないでいただきたいなーなんて。

「気絶した思春期男子は膝枕が一番効くんだヨ　・・・だそうです」  
ここは深くは聞くまい。たぶん　の存在に気づけたのは俺くらいだろうし。

「はぁ・・・。どうもありがとうございました。」

「どういたしまして」

あら？

「さっきの二人は？」

さっき俺にバリーボーをぶつけたあの二人の少女だ。

「あの二人は生徒会補佐の熊田　小橋と大橋姉妹です。室内での不適切な行動のため、罰として【大学からお越しくださった錬金術科特別講師と行く都市　周全力マラソン】に行っています」

この広大な都市を一周するのも大変そうなのに、　というところに恐怖を感じざるを得ない。

「き、厳しいですね」

「というより最近のあの二人の素行は目を見張るものがありました」  
声からざまあ見るへへん　って感じがもろ受ける。

って、今気づいたけれども・・・





予算も、とまではいかないんだね。安心安心

「あと予算も」

独裁ジャン！

「それはまた・・・うれしい機能がいつばいな生徒会長ですね」

「それほどでもありません」

でも声がへへん　って言ってる。

「あの、それで・・・話は変わるんですけど、俺は明日から登校でいいんですか？」

準備するものだとかあるのだろうか。

「いえ、明日は動きやすい服と筆記用具だけで十分です。現在の学力と運動能力の測定をします」

「さらりと大変なと言いますね」

明日って・・・まだ寝る場所も決まっていってのに

「その前に、寝る場所とか・・・？」

「わが校は完全寮制になっています。ほかの高校との共同寮があるのでそこに入ってください。場所は後で案内いたします。あとバイトは許可されていますが、この都市の中のみでお願いします。申請その他は私ではなく、担任にお願いします」

「いや、その担任をまだ知らないんですが」

「明日お願いします」

大変だったな。

というよりも八雲さん、無表情なのに感情豊かでSっ気全開だったな。

でも俺の前髪を見て顔色・・・もとい声色一つ変えなかったのは、あの人が初めてかもしれない。

まあまだクラスの人とも会ってないし・・・ってそう言えばここ男子俺だけやん!!!!!!!!!!

俺だけだったんだ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

どうなる？俺！

つづーく

## プレリユード（後書き）

どうでしたか？長かったですよか・・・。

次がすぐ出せるように、がんばります！応援よろしくお願いします！

## プレリユード第二番

俺は今、体育服一枚で広大なグラウンド（しかも地下）に一人途方に暮れている。

連れてきてくれたはずの八雲さんも担任の先生もいない。

・・・新手の虐めなのだろうか。虐めなんだろうなー。

身に覚えがなさすぎるんだけどさ。

一時間前の話。

朝から連続三教科の学力テストを受けた俺は、もう身も心もくたびれきっていた。

「つーか全部の強化のテストに明確な悪意を感じざるを得ないんですが」

「気のせいです」

ちなみに俺はまだ生徒会室から一步も出ていない。

まだ編入生の俺を迎える準備ができていないとか。ちなみに今日は金曜日。八雲さんは今日も編入生指導の名目で授業をサボッ……いえ、公欠している。

朝の6時に呼び出されたのだから眠くてしょうがないのだが、それ以上にテストに疲れた。

「いや、あんな問題始めてみましたよ」

どんな問題かと言うと、

国語……全編にわたってひたすら感想を述べよ。それも解答用紙がひたすら作文用紙。ひたすら手抜きな問題だった。

数学……全編にわたってどう見ても難関私立の入試最終問題詰め合わせ。手抜き以前にいろんなところに引っ掛かっている。と言うか問題の最後についている（〳〵年度〳〵大学）の文字くらいは消しとけよ。

英語……突然私はボブだと名乗る中国人が入ってきて50分間ひたすら英語で漫談。意味不明なのに加えて途中で故郷は富山だと言っていた。どこらへんがおかしいのかももう説明が付けられない。

といった内容だ。

気付いてほしい。英語はもう問題ではないことを。

「私は特に何も感じませんでした」

嘘つけ！声が笑ってんぞ！

「というより俺本当にこの学校に入るしかないんですか？」

となりのオリオン大学付属学院高等部【水無月】はたしか男子も半数はいたはずだ。

「残念ながら、一度入学手続きが完了したらもうこの学園都市内での転校は不可です」

「なんで！」

「・・・隣の方が綺麗どころが多いとかで転校手続きを出した方々が大勢いるからです」

・・・とばつちり？ねえ俺ってばとばつちり？

「そんなことはどうでもいいですから、さっさと昼食を済ませてください」

まだ買った弁当（充実した商店街にて購入）のパックを開けてすらない俺をせかす八雲さん。この状況を見てから言おうね。

「八雲さんは食べないんですか？」

さっきからずっと座っている【副会長】の机の隣、【書記】の机の上に置いてあるバッグからようやく弁当を取り出し開く俺。

訪ねた先の八雲さんは、その豪華な【生徒会長】の執務机の椅子にもたれかかるように（体が椅子に包まれているように見える）しながら気だるげに（表情は変わらない）こっちを見ている。



「私はこれで」

とサンドイッチのお弁当・・・しかも手作りのそれを取り出す。

うゝうまそう！

「ゴクッ」

「あげません」

「ゴクゴクッ」

「あげません」

「ゴクゴクゴクッ」

「あげませーん」

・  
・  
・

・  
・  
・

「あなたのせいで約束の時間に間に合いません」

二人して学校の廊下を走りながら（洋館作りだからもちろんフロアリング？いや、木張り？）怒った声で俺を責める八雲さん。

二時から俺の担任と会う約束があったらしい。言えよ。言っところよ八雲さん。

「いや、ムキになった八雲さんも悪いでしょう？」

あのあとサンドイッチの取り合いを1時間もしてしまった。アホだ。俺もアホだが八雲さんも相当頑固と言うか・・・ノリがいいのか？

「私はあなたがしつこく言い寄ってくるからそれを・・・」

「ああ！いくら授業中で人がいないからってそんな誤解を招くような危険な表現は「つきました。ここです」・・・って俺が先に走ってるんですから止めてくださいよ！」

くそ！二教室分くらい先走ってしまった！

「失礼します。ミナコ先生に用事があつて来ました。入ってもいいですか」

その抑揚のない声でパーフェクトな職員室に入るときの決まり文句（違うか？）を話す八雲さん。

というか生徒会室に比べて相当質素・・・というよりも普通の職員室だった。生徒会ずりー。

「ああ、水原先生ならさっき【野戦場】に準備しに先に行かれたよ。」

中年くらいの女性の先生が教えてくれた。・・・というか、この学校の教師は全員女性か定年過ぎたおっちゃんしかいないようだ。まあ元女子高なら仕方がないのだらうけども。

「わかりました。ありがとうございます」

結局おれは一言も言葉を発しなかったんだが。入ってよかったのかな？

「【野戦場】？そんなもんがあるんですか？」

そんな・・・ここは軍か？軍演習場だったっけか？

「ちがいます。【野戦場】とは第十四グラウンドの通称です。・・・ばかですね」

ああ。もうこの人、言葉でバカって言っちゃってるよ・・・。

「第一四グラウンドって、この学校十四個もグラウンド持ってるんですか？」

見たところ、校庭は大きいのが一つと小さいのが一つの計二つしかない。体育館も一つだ。

「いえ、この学園都市全体の公共グラウンドのことです。この学園都市にはグラウンドは大小合わせて三十個あります。まあ高等部地区にその三分の一があります」

八雲さんによると、その公共グラウンドは各学校の生徒なら自由に使用して良いグラウンドとそうじゃないグラウンドとがあるらしい。今回行く第一四グラウンドは、その中でも教員の許可と引率の必要な特別グラウンド。なにがあるのかな？

それにどうやらここは学園都市を一つの学校として考えているようだ。だって今普通に校門出ちゃったし。

まあ広大と言っても一つの街に高校が3つも4つもあるんだから文句は言えない。

そうこうしているうちに、そこそこ大きなグラウンドに出た。

## 【第二七グラウンド】

「八雲さん？間違えてませんか？」

どうみても一四には見えない。数字にしても無理ですよ。

「いえ、間違えていません」

きつぱりと言い切る八雲さんだが、ここはどう見ても・・・

「二七ですよね？」

すると八雲さんはやりとした声で

「地下、です」

そう言った。

確かに階段があった。厳重な門がその先にあるんだけど。

「はやく着替えてください」

体育服は、白地にブルー。

そして冒頭に戻る。というわけだ。

だが今俺の目の前にはスーツを着こなしたナイスバディーの若い女性  
性が立っている。

八雲さんは階段に座っている。

名前聞いてねー年聞いてねー

「さっそく運動力を測定しようか。まず君は霊力を使えると聞いている  
のだが」

「あ、はい。この学校の入学条件でしたんで一応は・・・」

この学園都市オリオンは精霊魔導士こそいないが、全員に錬金術を  
教えるというのが方針だ。だから新入生じゃない限り霊力は必須条  
件となってしまう。

そもそも霊力とは体の内側から発生する、生きる力の余分な部分である【陰の霊気】と、空気とは別のものですべての生き物から放出される陰の霊気の変わった姿である【陽の霊気】を混ぜ合わせ、組み合わせることで発生する力だ。

訓練すれば誰もが手に入れられるが、一般に【霊力の才能】と呼ばれる霊力変換効率は一それぞれに差があり、これが高いほど少ない霊力で大きな力（馬力）を出すことができる。

だがただ霊力を出していてもなんの役に立たない。ただ陽の霊気に変化してそこら辺に漂うだけだ。

だから精霊魔導や錬金術を身につけ、形を整えて力を出す。

世界の基本だ。

「ふむ。ならばその手に持っている錬金核を作動させてくれ」

錬金核って・・・この片手に持っている小刀のことだろうか。

「あの、わかんない・・・」

「ああ、その錬金核に霊力を注ぎ込む感覚だ。もっと砕けて言うと・・・そうだな、全感覚を錬金核に集中させるんだ。血を通わせる感覚だな。いや、難しいか・・・」

少し頭をひねりながら考え込む仕草をする若くてナイスバディーの女性。いや、長いから担任（仮）でいつか。

「ああ、だいたいわかります」

精霊魔導は鍊金核の代わりに【コントラクト】を使う。

コントラクトとは生まれながらに利き腕に刻まれた紋章で、それがあるかないかで精霊魔導士になるか供給者（精霊魔導士が使った言葉で、陽の霊気を出すだけのためこう呼ばれる）になるかが決定すること。ちなみにこれがないと魔導門を開けない。そしてこれが消えることも……ないはずだった。

「ならやってくれ」

すこしずつ神経を鍊金核に向けて行く。

「おわあっ」

いきなり鍊金核が光った！？

そのまま鍊金核は刀の形に落ち着いていた。

「ほお！いきなりできるなんて！」

感嘆の声をあげる担任（仮）。いや、八雲さんも少し驚いた声を上げた。

「これが……鍊金核？」

緑色の光を上げる刀。いや木刀のようなものなのかもしれない。

「そうだ。まあたくさんの形があるが、一番使いやすい刀型にした。それを中心にして靈力をからだの外に纏うことができる。たとえばなら体で練った靈力をからだの外に出す感覚だ」

やってみるが・・・なかなか難しいぞ？

「そう簡単にできるものじゃないさ。それじゃあテストに入る」

そう言っただけ担任（仮）は俺の持っていたものと同じよう小刀を取り出した。

「この状態は【Initial state（初期状態）】略して【Is】だ。そしてこれが・・・」

そのままきゅつと鍊金核を握り、

「Release（解除）00」

一言つぶやくともうそれは俺のおなじ刀型になっていた。

「【Arms form（武器形態）】まあここからはそれぞれの型番やら名称やらだな。ちなみに私のと陽乃のは【TBP-a01】通称ボクトー。きちんと受けなきゃケガじゃすまないかも」

そのままボクトーを振りかぶり俺のほうに振り下ろした。

尋常ならざる速度で。



「よ！八雲」

私は階段を降りてきた日焼けした褐色肌でショートカットの少女に顔を向けた。

「あいつが男子転校生？ずいぶんとちいさいのな」

彼女の名前は火崎 薫。私と同じ学年、クラス、特務科だ。

「つーか前髪なっが！あれじゃ顔見えねーんじゃねーか？」

「・・・彼、他人と目を合わせてしゃべるの苦手なようですし、ようがないのでは？」

そう、私とおなじ。人との関わりを最低限捨てている人間のような気がする。

「ふーん。にしてもなんでまた特務科用の編入メニューやってんの？男子だから？いくら人手不足でも使えねー奴はいらねーし」

「このテストの結果を見ればわかるのでは？」

そう言っつて私は午前中のテストの結果を見せた。

ちなみにあのテスト事態には全く意味はない。肝心なのは疲れやストレスなどで発生する特殊な霊力の余波を測定するものだ。

「こいつはすごいな。今の私と変わらないくらいあるじゃねーか！」

「ちなみに彼、シリウス学苑からの編入生です」

シリウス学苑・・・秋田にある精霊魔導の超名門校。別に精霊魔導が使えるなくても入学は可能だが、一定の供給者足る霊力は必要だ。

「まあ必要最低基準の霊力は軽く満たしてるけど・・・運動能力の方がないうときついんじゃないのか？」

「それを今テストしようとしているんですけど？」

野戦場のほうに目を向けると、陽乃 紅姫は【Is】の錬金核を作動させようとしていた。

「まあ、そう簡単にいくような物でもないんだよなー。私らの代で一番早くリリース出来た奴でも一時間かかったしな」

「ちなみにあなたでしたが。」

「そうだったわけ？」

「私が一時間10分でした。まあ気にしちやいませんけど」

まあ、あと二、三時間は覚悟しておこう。

「おいおい！八雲！ありや決めちまうんじゃないか？」

いくら霊力が高くて・・・

「うそ・・・」

彼は、陽乃 紅姫は、完全なリリースを成功させていた。

唸るボクトーをとにかく避ける。

んなもん受けたら腕砕けるって！

「躲すだけか？つまらんぞ！」

そう言つてさらにボクトーを振り回す手を加速させる担任（仮）。

いや、あんた楽しませるためにやってませんから！

命、かけてますから！

「はん！動きが単調な攻撃に対してそんなに間の抜けた躲し方じゃ・  
・・」

ガツと背中に道がなくなる。やばい！障害物か？

「こんな風に追い詰められてしまふ。躲せるか？」

担任（仮）の右手とその手に握るボクトーが輝きを増す。

何か来るのは本能的にわかっている。

だが悲しいかな逃げ場が全て封鎖されている。

「当たっても気絶程度だ。まあ、受けるなり躲すなりしろよ?」

グツと空気・・・いや、靈氣が吸い付けられる。

「突破!」

くっ!こいつは确实だ!确实に死ぬんだ!

一気に振りぬかれるボクトー。多分靈力を付加させて衝撃を飛ばす技だろう。ならそれをかわす!

なぜなら受けたら痛いから!

まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、まだ、今?うお!今だよ!

体を目一杯反らす。鼻かすった。

皮ムケタ。

「なに?躲したか!」

一気に下まで振り下ろされたボクトーだ。

すぐに第二波は打てまい。

チャンス!ここで俺は・・・

距離をとった。

乱れた前髪を直す。

だってー！あのオネーサン一瞬眼がマジになった！

ポニーテールに結われた茶系の長い髪を風になびかせ猛禽類のような眼でこっちを見る担任（仮）

「陽乃・・・何かやっていたか？」

言葉は堅いが口調はとても楽しんでいるようすだった。

「護身術を、嗜む程度に」

「成る程。ならその護身術とやらのレベル、見せてもらえるかな？」

鋭かった眼が、さらに細くなった。

いや、瞬きか。ゴメン。

「お手柔らかに・・・」

ミナコ先生の唸るボクトーをかわす・・・って言ったらさっきと一緒かもしれないけれど、少しずつ陽乃 紅姫は受け始めている。

もちろんそこには止めるという動きはない。だが少なくともさっきのように逃げ回ってはいない。

「ありや・・・すげえな。私らにはまだただただ他の連中じゃ歯

が立たたねー動きだ」

薫が感嘆する。無理はない。

「・・・でも、避けの動きに無駄がなさすぎます」

「確かに。あれじゃ攻撃なんてできやしねえ。あとあんだけ動いているのにそこまで乱れていないあいつの前髪は脅威だね」

普通いくら避けると言っても相手との間合いを取りあったり、それ  
ができなくても正面を向くはずだ。

前髪は・・・知りません

「背中でも何でも平気で取られやがる。まあそれでも全部紙一重で  
かわしてんだけどな」

彼はもしかして・・・

「・・・攻撃の動きを必要としないのならば、たしかにあれで完成  
なのかもしれません」

わたしの言葉は薫には伝わらなかった。

背中の方からひどく痛そうな音と悲鳴（男の）がしたからだ。

「うおう・・・ありや気絶もんだ」

かわしながら攻撃を流す。

相手の獲物の側面を滑らせ、すれすれの部分をからだをひねってかわしていく。

前髪が乱れるが我慢するしかない。

んー。アリアに感謝だね。叩き込まれた（文字通り）甲斐があるってもんだ。

「やるな。端から攻撃をすることを捨てた動きだ」

「むこうで叩き込まれたもので」

横薙ぎを縦に変えて振り下ろされるボクトー。

そのまま横にスライドして距離を取ろうとする。

だがそこからさらに軌道が・・・変わったあ!?

「連蛇!甘いつてことだよ!」

こうなりや!

そのままこっちに突きをするボクトーに直接俺のボクトーの先を当てて軌道を滑らせ・・・ようとしたがあまりの衝撃に俺のボクトーが弾かれてしまった。

「くっ!」

間一髪のところまでターンを入れながらしゃがみこむ。そのままスデ  
ップ。前髪が持つて行かれちゃってるが・・・ってまたボクトーの  
軌道が変わった！？

「いったる？連蛇。軌道を無理やり捻じ曲げるれっきとした鍊金技  
だ。そしてこうするとどうなる？」

まさか！

「突破！」

さっきのバカパワーがねじ曲がって来た。こいつはもう・・・いい  
夢旅気分だ。



気がついたら空の上だった。

なんていう夢を見た。

## プレリユード第二番（後書き）

今回も長過ぎた・・・かもしれません。

次こそは！もっと読みやすく！

## プレリユード第三番

ベットの上で目を覚ます。

「あー・・・まだ頭ががんがる」

最後にボクトー（鍊金強化）で脳天にクリーンヒットを食らって気絶。俺の頭がい骨に感謝。

こんな気絶の仕方をしたのはまだ小学校に入る前にしていた護身術講座の時にアリアが前の日の喧嘩を根に持って繰り出した幻の左を食らって以来だ。

アリアに殴られたのはあれが最後だが、あまりに痛かった。

「・・・編入生相手のテストだからって、ここまでする必要があったか？」

「すまん。ここまでするつもりはなかった。」

「まったく。ミナコ先生もいい大人何ですから、加減と言うものを覚えてください」

「まあいいじゃねーか八雲。それで？センサーはあの編入生をどうするつもりだい？」

「・・・まだ鍊金術と言うものを知らないからしょうがないだろう

が、いずれは特務科に入れようと思う。八雲はどう思う？」

「私はそれより・・・」

ベットのまわりに掛けられた白いカーテンの向こうで声が聞こえる。

以外にも担任（仮）は、生徒に叱られているようだ。

そのまえに、頭に乗ってる氷が完全に溶けてしまっている。気持ち悪いのに加えて顔中びしょぬれだ。

うつとうしい前髪を払いのける。

久しぶりの視界クリーンだ。外気が冷たい。

「あー」

その声にカーテンの向こう側の人達は焦ったようだ。シャツとカーテンが開く。

「大丈夫ですか、けがの具合は・・・って失礼ですが誰ですか？」

「いや、陽乃 紅姫ですけど」

え？なんか違う人にでもなっちゃってる？何々？一大事？

「おまえ、前髪上げてんのか？」

褐色肌のいかにもスポーツ系の女の人が聞いてくる。

「はあ。髪に張り付いて気持ち悪いので……の前にどなたですか？あと先生の名前も聞いてないんですけど……」

驚かれてもこっちが困る。あんた誰だよ。

「ああ、すまない。私の名前は水原 美奈子だ。美奈子先生でも先生でも水原先生でもなんとも呼んでくれ。そしてこっちにいるのがそこにいる八雲と同じクラスで特務科、そして昨日副会長になった火崎 薫だ」

先生はポニーを翻しながらニコツと笑った。ん、美人。すんげー美人。

「そういうことでよろしくな！転入生君？」

こっちのスポーツできそうな女の人……薫さんだっけ？も、お人形みたいな八雲さんやキリリとした先生とはまた違う、人懐っこさのなかにある頼れる姉貴って感じの美しさがある気がした。

「あ、陽乃 紅姫です。よ、よ、よろしくお願いしますね？」

きちんとアリアに言われたとおり、相手の顔を見てにっこり笑って頭を下げる。うん。完璧だっずえ！

「あ？あーうん。よろしく」

「お？おう。よろしくな！」

二人して顔を赤くしているのだが……俺は成長した自分を必死に

褒めちぎるのに忙しく、見逃しちゃっていた。

それから一時間の休養を八雲さんから言い渡された。

ん？八雲さんも顔赤かったな。俺に恋でもしたか……ってのはないな。悲しいけど。

「というか編入していきなり保健室。二日目なのに……。まだ授業にすら出てないのに……」

時間はもう6時。つーか八雲さん生徒会室来いって言ってたけど、どこだっつー話……

まあ仕方がないからとりあえずシーツをたたんで保健室を出る。

薬品の香りは、いろいろと思い出すから好きじゃない。

あの日々を。

夕日差し込む廊下をとぼとぼ歩く。たぶん生徒会室は一番上の階だ。

「ああ、気分も黄昏」

つというよりこの校舎、かなり作りがシンプルなようだ。

一つの大きな縦長の校舎がデーンと一つあり、そのとなりにコの字になるように小さな校舎が渡り廊下で繋がっている。

まあ全部洋式の造りになっているんだけど。

そして正面玄関入ってすぐの場所に巨大な階段がある。貴族の屋敷のような奴だ。

「たしか西の方の階段を下ってきた気がしなくてもないから・・・  
こっちに・・・んであっちに・・・」

・・・

・・・

・・・

・・・

・・・

「迷った」

完全に迷った。ここどこだ？今何階だ？

「やっべ！気分が倍速で黄昏・・・」

ああ、憎きかな方向音痴！

「んー誰かに聞こうにもそもそも今日学校休みだし・・・」

部活生もまったくない。そういえばほとんどの部活動は他の高校や大学なんかと共同してるんだっけ。

「んつと・・・よいしょ」

階段を上がってくる人影。夕暮れの日差しが逆光で、よく見えないが・・・シルエットと声からして女の子だ。まあ女子高だし。

その少女は、何冊もの本を抱えて、ふらふらになりながら階段を上ってきていたようだ。

危なっかしいことこの上ない。

「あつ・・・きやあ」

それは一瞬の出来事。顔までつみあがった本のせいで階段を踏み外し、そのまま本の重みで急速落下。

階段最上段からの落下。落ちれば怪我じゃすまされないことは確か  
な高さだ。

「間に合え！リリース！」

ポケットからIsを取り出しボクトーへ解除。

下へ下へと重力にひっぱられながら階段を落下していく女の子。

間に合わない？くそつたれがああああ！

のばされた手を追いかけて自分も落下する。



ボクトーを軸にして靈力を足に付加。そのまま跳んで彼女の手をつかみ……

迫る地面。コンクリートに恋をするほど俺はドMじゃない。ドMじゃないんだ！

彼女を上にし抱きとめながら落下の重力を流す、いわゆる空中回転をかます。

ボクトーによる靈力供給の賜物だ。そのままバランスよく着地。足にもものすごい衝撃と、なれない靈力の使用での疲労が一気に流れ込んでくるがそこは男の子の気合いでカバー！。

呆然とするその少女に笑いかけるだけの余裕はないのだが、そこも男の子の気合いでカバー！。

舞い上がるうざったい前髪を払いのけ、まるでお姫様だつこのような状態にも気付かないまま、軽く話しかける。

「生徒会室ってどこ？」

……彼女は、気絶した。

「……まったくもって迷惑な話です」

気絶した少女を抱えたままどうしようもなくパニックになっていたところに、大きな音を聞きつけ隣の部屋から八雲さんが現れ……  
って俺けっこう近くまで行けてたんだね。やったネ！

そのままその少女を抱いたまま再び保健室へ。

ベッドに寝かせ、怪我がないかのチェックが済んだ後、お説教が始まった。

ちなみに彼女は木葉 円と言う名前で、これまた俺と八雲さんとおなじクラスらしい。

んー、顔だけ見るとすごく頭よさそうな美人さんだ。なんとうか、インテリ？的なオーラが出てる。髪は短めにバッチリ切りそろえられてる。

「聞いているのですか？だいたいあなたは編入生としての・・・」

無表情に冷たい口調で説教食らうのは、精神的に病んでくるな。

八雲さん、怖いっす。

「失礼なこと考えてませんか？」

「イイエ。マッタク」

私はこの日、王子様を見た。

優しく、力強く、かつこいい人を見た。

甘く女性のように整った顔だった。

私を助けるために必死になってくれた。

私はこの日、恋に落ちた……。

「ん……」

「あ。目、覚めた？」

私はこれを夢だと思っていた。

でも目を開けたその先には……前髪の長い見るからにヘタレそうな感じの、でも声色や背丈からさっきの彼だと思われる、男・子・学・生が心配そうにこっちを見ていた。

「？なんで男子学生がここにいるの？」

すると彼の後ろから、盛大な溜息が聞こえてきた。

「……厄介なことになりましたね」

生徒会長がなんでここに！？

「彼は、こんどここに……」

「へ、編入生！？こ、ここに！？」

「そ。なんかおなじクラスだそうだから、その、よろしく」

同じクラス、そしてこの出会い……。

そしてこれを週明けまで私と生徒会長と特務科のミナコ先生と薫と補佐役の双子しか知らない……。

「運命の人」

「？なんか言ったか？」

「いいえ？なんでもないわ。こちらこそよろしくね？紅姫くん！」

絶対にものにしてやるわ。彼を。この手で。

そのためには誰よりも彼と近くならなくては。だから下の名前で呼ぶ。一歩リードする。

私は始めてこの学年トップの頭脳を、勉強以外のことに回し始めた。

とても楽しくなってきた。

今日は、たくさんの人と知り合うことができた。

俺としては、かなり頑張った一日だ。

明日は早速錬金術の補習だ。

勉強の方は、むしろシリウスのほうが早いくらいだが、錬金術はそもそもそんな教科がないんだからしょうがない。

ミナコ先生張り切ってたな。

死ななきゃいいんだけど。

あとバイトも決めておかないとな。

仕送りなんて全くないし。貯金はかなりあるが、手をつけるには気が引ける。まあ特務科に入れば奨学金で授業料免除だそうだから、それまでは努力していくしかないだろう。

とにかく、死ななきゃいいか。ね？アリア、カトレアさま。

俺は何もない部屋で窓から見える星を見ながら、そんなことを考えていた。

## 第一話：ワルツ

朝。

寝汗をかいた髪を掻きあげ、自然と目が覚める自分に驚く。

・・・が、睡魔が俺を優しく誘惑する。

いやーんもつと寝て行つてーん

わかってるさ睡魔よ。俺はお前を置いていくようなことはしないさ。

さあもう一度行こうじゃないか！夢の国へ！

「・・・それは二度寝と言つのです」

そつすね。

昨日は星が輝く窓も、今は鮮やかな青が眩しい。

晴れた日の朝は、なんか興奮するよな。

「・・・今何時だと思つていらっしやるんですか？」

「ん？朝の8時・・・って！朝の連続テレビ小説始まつてんじゃん  
！」

やっべ！見逃したら付いていけなくなっちゃう！

テレビのチャンネルを探す。（リモコンなのに、チャンネルと言っちゃうの。秋田は田舎なの）

「違います。今朝はあなたの登校初日の日です。ちなみにすでに遅刻してるんですが」

・・・登校初日？

遅刻？

「おいおい坊主ー朝礼もう終わっちまうぞ？」

キッチンで勝手に食パン焼いて食ってる薫さん発見。

ん？ちよつと待て？

「なんで勝手に人の部屋に入ってるんすか！？」

「いや、今気付いたのかよ・・・」

「あなたが約束の時間になっても現れないため電話をしたんですが出ず、仕方がないので寮まで来たらなんと不用心にドアが開いていたため、一抹の不安と寝坊の確定したあなたへの制裁に対するワクワク感を胸に入ってみました。」

無表情かつ冷めた声でこんなことを言われても、反応できない。

まあ声が笑っているから冗談だろうけど

「まあでも起こそうとしたら、寝顔にノックアウトされたってか？

ケラケラケラケラ」

わ、笑い方豪快だな。

「薫・・・余計なこと言わないことを強くお勧めします」

「ん？私はノックアウトされたけど？」

「私は至ってそうだったことはありません。勘違いしないように」

「またまたそんなこと言っちゃって！頭から水蒸気噴き出したの誰だっけ？」

「薫？私の話を聞いてました？」

いや、その前に何の話？

「あの、遅刻じゃないんですか」

「ああ、いいんだって！遅刻の原因は編入生君の寝坊ってことになってるし？ケラケラケラケラ」

冗談じゃない！なんて恐ろしい女の子だ！

「急ぎましょうよ！」

「急ぐのはあなたです。」

「坊主、朝飯食わないともたねーぞ？」



ベットからはね起き服に手をかけ・・・

の前に、

「着替えますから部屋から出ていって下さい！」

あ、昨日の補習の筋肉痛がつああ

「ここがおまえの新しいクラスだ。初めが肝心だと聞く。外さないようにな」

こつちを振り返って美奈子先生がニヤリと笑う。

「ハードルあげないください」

教室の上には【2・C】の文字が。ここが俺の新しい出発点。

昨日買ったメガネをクイツと上げて、しっかり前髪を梳かしておく。

気合い入れて、行きましょう。

ガラガラガラ

「はやく席に着くんだ。はい、起立！」

気をつけー礼ーおはようございますのときに行ってもおんなじのあいさつ黄金律を決め、みんなが席に着く音を聞く。

「いよいよだぞ、俺！はずすなよ」

手に何度も精神安定剤を出す。いや、これはだめだ、でも飲まなきゃやってらんねえ……っ。

「えー今日から、編入生が来ることは言ってたよな。入ってくれ！」

かっちこっちのまま、教室に入る。うう……みんなの目が痛い……

「こんにちは、陽乃 紅姫です。ベニヒメって書いてコウキって呼びます。よろしくお願いします」

黒板にチョークで名前を書きながら決めた、自虐この上ない掴みを発動する。

「……………」

あら？反応が……

笑ってたよね？俺。

「……………」

アリア、どうやら俺は編入初日から外したようです。

「せ、先生……編入生って、男の子？」

「そうだ。仲良くな」

「ちょっとヨシ！あんた地味目の娘って嘘じゃないのよ！」

「違うわよナナア！あんの双子がああ！」

「でもなんか超前髪長くね？」

「ついメガネと前髪で顔見えねーし」

「なんかすっごい地味目なことは当たってるよね、ヨシ」

「なんか男の子って新鮮ー」

以上、俺の知らない所で行われていたガールズネットワークでした。

「フツ、やっぱりあのままっていう私の考えは当たったようね。ここで一気に私がアプローチをかけることで彼に大きな印象を与えると共に、他のクラスの連中が話しかけるきっかけを作ることと潜在的な部分での仲間を作りやすくしておけば・・・クッククク」

「こ、この前はありがとう」

「ん？ああ、確か木葉さんだっけ？」

HRになってアヤノ先生と薫さんと八雲さんが出て行ってから一人寂しく机にポツンしていた俺に、背中から声がかかった。

うーむ、こうやって見るとなんかすっごいかわいいな、この人。

「うん、コウキくんは前はどこにいたの？」

長めのボブのゆらしながらさりげなく俺の前に座る。

うん、女の子万歳。

「秋田の方から来たんだ。木葉さんはもともとからこの人？」

まあ群馬出身つてのも都会と言って良いものかは知らないが。

「ううん。東京なんだ」

「そうなんだ、俺修学旅行でいったことあるんだ」

「修学旅行ね・・・」

「楽しかったんだよねー建物おつきくてさ、焦った焦った」

思い出を熱く語る俺。東京はでかい。なんせ首都だ。

「くっアッハハハハ」

「なんだよー！笑わなくなっっていいじゃないか」

「だって、建物つて・・・アッハッハハハ」

むっとしてる俺だが、笑っている木葉さんはかわいいから、まいっか。

「なにになに？木葉もうなかよくなったの？あたし白鳥奈々子。よろしく？」

「あ、ナナずるい！よろしくね？陽乃くん。あたし喜子って言つての。漢字ダッセーからヨシでヨロ」

うおう！なんか元気よさげな女の子達だな・・・

「あ、よろしく」

「ちよつとちよつと！ナナ、ヨシマジ邪魔なんすけど」

「うちはカヨコ！よろしく！」

「えつとえつと水瓶です。よろ・・・」ちよつとミキそなんじゃだめだって！あ、私キヨウコです！」そんなあ、かぶせないでよお！」

おお？なんか人だかりが・・・

「つーか秋田から来たんだ！」

「メガネとつて！後前髪も！」

「なんでこの学校にきたん？」

ん？ん？ん？ん？んー？

「ちよつと他のクラスの奴来てんじゃねーかよ」

「まあいいんじゃない？というより陽乃クン！ここだけの話、彼女  
いんの？」

「いや、いいんですけど・・・」

アリアは幼名馴染みだろうし、カトレアさまもそうだ。

あ、ちなみにカトレアさまって言うのはシリウスの・・・まあ絶対  
的トップの四天空の一角、ネプトウーネス家の一人娘で俺とアリア  
の姉代わりでご近所さんだった人だ。ちなみに一歳しか変わらない  
が、俺より背が高い。ちなみに特務科の皆さんも全員高い。

まあ詳しくは、機会があれば。

「いないですけどぉ？いないけど、そう言った対象の女の子はいた  
んだねえ？」

なんか木葉さんがピクツとした気がするが・・・

「いません！生まれてから一人もいません！」

「まあいないだろうな」

「ハウッ」

ナナさん、刺さります。

「はいはいはい質問しつもん！」

「わたしもっつていうかメガネ外してっ！」

「ちょっとおさないでよ！」

「うるせえな！やんのか？」

こゝ、怖いよお・・・誰か助けちゃくれませんかあ

ってか女の子ってこんなに怖かったか？んゝ怖かったな。

ってなんか人おおすぎるよ！

どうにかしてーーー

ここで私がやんわりとやばくない？みたいな雰囲気を作りながら彼を助けるようなしぐさを見せる！完璧よ。

いま私には二人の幸せが見えるわ・・・

「ねえ、みんな？ちょっとこれは ガラガラガラ 「おいおい！さつさと席に着かんか！一時間目のチャイムは鳴ったぞ！」 チツ・・・」

「やべ！死にかけだ！」

「ゾンビ足速やいからな」

「撤収！撤収！」

さっきまであんなにたくさんいた人ばかりが一気に散っていく。

こう言った所はむしろ感服する。

にしても失敗しちゃったじゃないの！　たくあの歩く寿命の神秘め！　まあいいわ。策はまだある。

フッフッフ

机上の理論は完璧よ。

「・・・すいません遅れました」

「遅れまっしたーさーせん」

フッフッフッフッフ

八雲はイライラしていた。顔には出さないが。

編入生の彼を迎えてから一週間。

まあ一応やじうまの方は減ったのだが、問題は彼のほうにあった。

バイトは寮の下の階で営む定食屋らしい。何回か行っている・・・  
というか常連の場所なので気にはならないし、毎日きちんと錬金術



の補習を受けている。

だが行く先々でちやほや&特別扱いされてなんとなくいい気になっているような気がするのだ。

なんとなく同じクラスの木葉さんといつも一緒にいるし。

それが一番気になった。

なんでこんなにもイライラするのはわからなかった。

ただ漠然といやなのだ。

「これが・・・恋というやつでしょうか。なんてね」

ただ、そうなる可能性は自分でもあるのかもしれないと思っている。なんせまともに話した男の人は父と使用人を除いて彼が初めてだ。

「おい八雲！次は錬金術の日だろ？さっさと行こうぜ！。遅くなったらまーた遅刻扱いされちまうぞ」

「わかっています」

まあとりあえずこのイライラを彼にぶつけるとしましょう。

ぼっこぼこにしてやります

毎週金曜日は午後いっぱいを使って錬金術の授業だ。まあ実は二回目なんだけど。

この前は木葉さんと組んだから、今日もそうなのかな？

「コウキくん！また私「陽乃紅姫クン、私と組みましょう」と・・・なんでもない」

ん？今日は生徒会長と？

「いいですよ。でも相手になりますか？薫さんじゃないと大けがするってこの前言ってた気が・・・」

「いいんです。今回は私が陽乃紅姫クンの成長をチェックさせてもらいます」

そついうと生徒会長はボクトーをリリースした。

なんかいつにも増してオーラが禍々しいような・・・

それにチェックってあの時の痛い記憶が・・・

「あの、フルネームはちょっと勘弁してもらえませんか？」

ボクトーどうして軽く組みながら話す。

「なら何と呼びましょうか。コウキくんは既に使用済みですし陽乃くんでは新鮮味に欠けます」

「いや、なんでもいいですよ？」

「なら紅ちゃん？」

「バブー・・・って違うでしょう！」

「いい反応です。そうですね、では姫は？」

「いやです。それにどう考えても俺男でしょう？」

姫つて・・・変態じゃん俺。

せめて向こうでもお姫様くらいの悪口だった。

「嫌がる姿勢が気に入りました。私は姫と呼ぶことにしましょう」

「えええ！？」

「いい反応です。ますます気に入りました」

えええ？決定？ちよつと待ってくれ！恥ずかしすぎる！

「それでは姫。さつそく模擬戦に入りましょう。チェック開始です」

なんか口調が怖い。

嫌な予感しかないが・・・

「突破衝対貫！」





## 第一話：ワルツ（後書き）

女子高生R：「というわけで、紅姫クンが元女子高のオリオン大学  
付属学院高等部【きさらぎ】に編入いたしましたー！」

女子高生P：「ところであんた誰よ？」

女子学生R：「作者さんからこの作品の人物の調査と紹介を頼まれ  
た2・Cの良心、ナナさね！」

女子学生P：「ナナかよ！この部屋暗くて顔わかんないって！ちな  
みにヨシだかね？」

ナナ：「しょうがないじゃない？身内を調べる仕事なんだし。面割  
れたら次の錬金授業で公開処刑だよ？」

ヨシ：「怖！そんなリアルな単語使わないでよ！・・・っていうか  
その調査って仕事は私のキャラを立てるために用意された仕事だと思  
ってたんですけど」

ナナ：「邪魔だけはしないでよ！？失敗したらたぶん作者から出番  
減らされんよ？」

ヨシ：「ええ！？今後チヨイ役が予想されてるのにさらに減っちゃ  
うの！？勘弁してよ！一話毎の読了時間平均一分未満なんて悲し  
ぎるよ！」

ナナ：「その数字のほうがリアルで怖いわ！ヨシ！次からばっち

紹介できるように調べ上げておくわよ！」

ヨシ：「了解！っていうか紹介できなきゃ消されて、調査バレても消されるんだね・・・私たち」

ナナ：「カヨコ達よりマシよ！まあ失敗したらあの子らに回るんでしょうけど・・・」

ヨシ：「世界一いやな引き継ぎ作業ね・・・」

ナナ・ヨシ：「次回からさっそく紹介を始めます！お楽しみに・・・みなさんどうぞ、どうぞこひいきに！・・・」

作者：「なんかこう言うのって書いてて少し寂しくなってくるような・・・ハッ！何でもないぞ！なんでも・・・」

次回〓紅姫の毎日？お楽しみに！

## 第二話：ワルツ第二章

それからさらに一週間が立った。

錬金術の応用に入ってから生傷は増えるしなんか八雲さんはピリピリしてるし薫さんは俺のバイト先の定食屋「オタメ」でバカ食いしてつけを溜めていくし、木葉さんはたまに俺を危ない目で見てくるし何回もヨシさんとナナさんにメガネ取られそうになるし・・・はあー。

そして今日の補習は第七グラウンドに召集。しかも特務科との正式な配属訓練だ。

つか特務科って何かをまだ聞いていない。

そんでもって、なんでも第七グラウンドはこの学校の地下にあるそうなのな。

しかも今日はいきなり実戦訓練。楽しみで楽しみで涙が出てきたよ。

でも・・・

「・・・迷った」

ここどこだ？

たしからせん階段をひたすら下って来たからここは地下のはずだ。

でも目の前にはどう考えても相当長い間使われていない雰囲気の時



びついた扉。

「まあでも入ってみたいとわっかんないよね」

ノブを回そうとするが開かない。

パスワード・・・ド・・・ヲ、ニユ・・・ニユウリヨクシテク・・・ク  
ダサイ

明らかにもうここはグラウンドではない。それはわかっている。だけれども気になるお年頃ってやつだ。

「それにパスワードって響きは男を狂わせるのさ」

自分でも意味のわからない言い訳をしながらドアの隣についてるパスワード照合機に手を伸ばす。

たぶんボイスが出たんだからこっちも動いるはずだ。

「それに22桁のパスワードが合うわけがないしね」

多すぎだろ数字。

まあ適当に入力する。

「適当適当。えっと、09121521051324182118  
っと！」

んゝ我ながら適当だ。会うわけないな。

パスワード照合完了。ドアが、開キマス。ゴ注意クダサイ

「うお！当たった！それになんか声も元気になってる！」

ドアからカチリとドアの開く音。

ガチャ

「失礼しまーす・・・って汚い！」

部屋の中は、なんとなく研究所だった場所のようだ。

だった、と過去形なのはあまりに時間が立って錆びついてしまっているからだ。

それにほとんどの物という物が壊れていたり倒れていたり。かつて火事でもあったのか焦げてしまっているものもある。

そんな研究所だった場所・・・お化け屋敷っぽくてわくわくすんゾ！（悟空風）

「探検探検また探検」

そうとう広い場所のようだ。どんどん奥に広がっている。

開かない扉はボクトーでふっ飛ばしながら進む。

まっ暗闇だけど体外錬金のおかげで十分に見える。

まあ体外錬金とは、体に霊力を纏うことです。二話参照。

何個かまだ生きている機械があるようで、どうやらそれらの機械があの入り口のロックシステムを動かしているようだ。

電源来てるのお驚きだけどね。

どんどん進むと、開けた場所に出た。

さっきまでは歩く場所がないほど機械でびっしりだったのに、この部屋にはまったくくない。

その代りにひとときわ大きな真っ赤な扉がそびえ立っていた。

パ・・・パスワード・・・ワードヲニユウリヨクシ・・・シテクダサ・  
・イ

おおう覚えてねえ！読了時間2、3分程度戻って見てこなきゃ！

口に出しててよかったあゝ

「ええつとなになに？」「パスワードって響きは男を狂わせるのさ」・  
・「ってここじゃねえ！んつと」そもそも22桁」・・・ってそこ  
でもねえ！んつとあったあった！」「09121521051324  
182118」つと」

パスワード入力完了です。アリガトウゴザイマシタマタオコシク  
ダシマセー

もう来ねえよ

その部屋は、明らかにほかとは違った。

空気が違う。造りがちがう。そしてなにより

「なんだ？なんで俺はこんなにも・・・」

胸の奥でなにかが震えている。なんだこれは？なんで俺はこんなにも・・・

「こんなにも霊力が共鳴してる？いったい何があるんだ？」

その先には、たしかにそれがあった。

丸い台座の上に大事に置かれ、さらにその上からガラス・・・いや、霊力強化ガラスをかぶせられたケースに何重にも包まれ、それでも光と闇をその身に載せながら放つ深紅の輝き。

「籠手？・・・いや、手甲？」

幾筋もの飾り彫りと窪みにルーンの文字。間違いなく魔導具だ。

その輝きから目を外すと、ケースの側面は古代ルーン文字で埋め尽くされていた。

「なにになに？えっと・・・ああ、これは動詞活用か！そうすると・・・【この宝戒に触ることなかれ、求めることなかれ。触りし者求めし者、その身をもって禁忌となし、無限の苦痛に囚わるであろう。この宝戒、選ばれし者を選びし物。その身に女神の祝福あらんことを。その身の全てを解き放たんことを・・・】だって？」

あいかわらずルーンは言いたいことがわからない。もっと単刀直入にいけよ。」

「でもどうしてこんなところに魔導のルーンが？」

「それはかつてそれがこの場所で研究されていたからです」

ビクウウウウウウウウウウ

「ヒヤウツ！や、八雲さん！？」

そこには確かに八雲さんが立っていた。

「・・・そんなに驚くことですか？姫の錬金の余波を辿ってきただけですよ」

ああ、なーんだ。この前の頭殴られたショックで幻覚見えたかと思っただ。

「その・・・さっきの研究って？」

「そもそもその赤鐵甲は、コントラクトのない供給者にコントラクトを付加させることができる物だそうです」

「ええええ！！？そんなことが可能なんですか！？」

コントラクトとは、そもそもそれ自体がいまだに解明されていない不確かなものなのだ。解明されていないから、俺は苦しんだ。付加させるなんて不可能もいいところだ。

「私はその場面を知りませんし、そもそもこの研究中にも1度も成功していないようです」

「まあ、幾人もの犠牲者を生んでしまった、歴史に消えた悲しい兵器ですが」

犠牲？まさかそれって・・・

「姫は天精戦争って知っていますか？」

「ええ。」

天精戦争・・・5百年前に起こった、今よりも数百年先の技術を有する天宙種族と名乗る者たちと、今の精霊魔導士の原型となった精霊騎士団と供給者達の、十年間続いた歴史上最大の戦争だ。

確か勝者は精霊騎士団だった気がする。歴史は苦手なんだ。これ以上解説できない。

「その戦争のいわゆる末期、天宙軍は精霊騎士による圧倒的な魔導攻撃により壊滅の危機に立っていました。そこで天宙軍はその技術の全てをかけてコントラクトを開発することを決意します」

そこから先はだいたいこうだ。

一人の協力者から取れるだけのデータを取り、それをもとに急ピッチで開発を進める。

そして一年の歳月をかけて遂に完成。もうほとんど壊滅寸前の天宙軍にとっては正に救世主だった。

しかしここで予期せぬ事態が発生する。

天宙の技術者たちは、焦りすぎて人体実験をすっぱり抜かしてしまっていた。

しかしもう時間がない天宙軍は強制的に実戦投入するが誰一人としてまともに使えなかった。

それどころか次々とその激痛と浸食で人格崩壊していつてしまった。そしてそうこうしているうちに天宙軍の首都が陥落し、戦争は終結。研究所はその兵器と共に土の下深くに埋められてしまった・・・そうだ。

「まさかその兵器がこの紅鐵甲で研究所っていうのが・・・」

「姫は勘がいいですね。そう、ここです。そもそもオリオン都市とはこの研究所を悪しきことに使わないように監視・保管するために作られたものですし」

そんなものがあつたのか。

「でもなんで八雲さんは知っているんですか？」

「生徒会長にでもなれば、知ってて当然のことです。まあこの秘密は私を除いて学院長と一部の教職員だけしか知りませんでした。が、姫も知ってしまいましたね」

「まさか、秘密を知ったものは・・・」

そんな、まさか！

「消されます・・・なんてそんなことがあるわけないでしょう？バ力を言っていないで第七グラウンドへ行きますよ。迷子さん」

ああ、からかわれてばっか。

知っているんならさっさと連れていけばいいのに！

第七グラウンドに到着。野戦場よりは狭いし障害物も少ないが、確かに実戦訓練には向いている場所だった。

八雲さん曰く、つい昨日補修工事が終わったそう。キレイだ。

「遅すぎるぞ陽乃！昼休み終了と同時に始めると言っているだろう！今何時間目だ？6時間目だ！今日はさらにしごいてやる！」

「いや、迷子になっていたんですって！」

「バカか！ここは校庭から階段降りてすぐの場所だぞ！迷うわけがないだろう！」

いやでも・・・

「先生、姫は方向音痴です」

「だーから言っただろ？マジなんだって」



アリガトウ八雲さん！薫さん！涙が……涙が止まらないよ！

「まあ今回はどうも故意だったようですが」

うおおい！何言っちゃってんだよ！

「やはりな。許せん」

「おえ？先生！それボクトーじゃなくね？ねえ！」

「今回は私の実戦用の鍊金核を見せてやろう。リリース！」

片手に持っていた明らかにボクトーのそれよりも長いISが発光する。

「その名も【金剛剣】だ！」

ブワアアアつと波動を飛ばしながら現れたその鍊金核は、その丈俺と同じくらいはありそうな長さ、そして悠然と光る金色の両刃。

「普通なら振り回すことなんてできないが、体外錬金の力でこの通

そのままぶんぶん振りまわす。なるほど、これなら十分集団戦にも一対一にも使える。

[illegible]

できるか！死ぬわ！

ポニーテールを照明に照らしながら振りかぶるミナコ先生。

ああ、もう・・・なんと云うか・・・

夢でありますように！

「ケラケラケラケラ！んなもん使っちゃダメだろセンサー！リリーズと！」

ガキイイイイン

「む！薰か！邪魔をするな！」

うつすら閉じていた目を開くと、目の前には薰さんの流れるような体が。

その手に握られた二本のトンファーで先生の一撃を食い止めてくれたようだった。

「んなこと言っただって・・・そんなもんでいきなりぶっ叩いたらいくら坊主が体外錬金をマスターしてもたんこぶじゃ済まないって」

ガキンッ

そのまま間合いを取る二人。

「ばかだな、薫は。戦闘とは常に急を要するもの。咄嗟の判断がその身を守るのだぞ！」

そのままとりあえず金剛剣を戻してくれる先生。よかった・・・

「んなこと言っただけで・・・坊主がほんとに実戦に立つのはまだまだ先なんだから。ゆっくりやってかねーとマジで死んじゃうぞ？」

「ぐっ・・・まあ、それもそうだな」

ああ、なんだかんだで薫さんは俺に優しいんだよな。気にかけてくれるというか。

それに先生もなんか薫さんの言うことを聞くって言っただけ。というか八雲さんも茶化していたよな、薫さん・・・つ、強い・・・

「あ、ありがとうございます」

「いいっていいって。まあ坊主も坊主だぞ？あのくらいならすぐリリースして避けるなり受けるなりしねーと。いくら霊力や才能があっても意味がねーぞ」

「すみません・・・」

あのくらいって・・・マジで死ぬかと思ったんだが。

しょぼーん

「ケラケラケラ！坊主は本当にかわいいなあ！だっこしてやるから泣くなっ！」

そういつてひょいつと持ち上げられる。

「うおう！ちよつと薫さん！おろしてください！」

は、恥ずかしいやら何やら・・・イヤアアアアアアア

そんなに小さくないのに！平均よりもすこーっし小さいくらいなのに！

「ちよつと薫！？なにをしているんですか！？」

「おい薫！そう言うおまえがそんな態度ではないか！」

「ケラケラケラ！長身の特権つてやつだな。逃げんぞ坊主！」

そのまま俺を・・・今度はお、お姫様抱っこしたまま走り出す薫さん。

「ちよつと！恥ずかしいですって！おろしてください！」

暴れようにも薫さんの掛けた加重鍊金のせいで体が動かない。

まあでもなんか落ち着く・・・ってそんなのだめだろ！流されるな俺！

「文字どおりお姫様というわけですか薫・・・リリース」

うわあ！八雲さんがリリースした！





## 第二話：ワルツ第二章（後書き）

パンパカパーン

ナナ・ヨシ「オリオン調査レポート報告会略してオリレポ！始まるよ？始まるよ！」

ナナ「さあ始まりましたねオリレポ！このコーナーは後書きを利用してこの物語の補完・・・もとい紹介をしていく・・・」

ヨシ「私たちの存在意義をかけたコーナーです！」

ナナ「あんた・・・間違ってはいないけど重いわよ」

ヨシ「だってほんとに出番無くなっちゃうかもだよ？」

ナナ「そうならないように調べてきたんでしょ？さあヨシ？栄えある第一回のテーマは！？」

ヨシ「今が旬！越中かに道楽食べつくしの旅パート4です！」

ナナ「スルーします。もう一回どうぞ」

ヨシ「す、すみません・・・はい！今回のテーマは！」

ヨシ、フリップを取り出す。

ヨシ「ドン！オリオン学園都市案内パート1！です」

ナナ「なるほどね。まあフリップの意味はまったくないんだけど」

ヨシ「気分の問題よ！さあ始めるわよ！」

ナナ「OK！そもそもオリオン学園都市は、大学を中心として四つのブロックに分けられています」

ヨシ「真中に大学の巨大ビル群。工学部系から専門学まで、全てがここで学べます。まあアメリカの摩天楼を切り取ったような感じですよ」

ナナ「そこから北に見た場所が、中部ブロック。山沿いに加えて狭い場所のため、長崎風の坂の多い街になってます。オランダ坂ならぬオリオン坂や、路面電車の走る、日本と異国の混ざった街並みです」

ヨシ「西に行くと初等部ブロック。駅と寮棟のある広めのブロックで、駅デパートや外部系のショップが並ぶ参道もあります。下手な町よりもよっぽど充実してるんだって」

ナナ「まあ高いんだけどね。グロス一本ここで買うならオリヨシ（デイスカウントショップね）で3本は買えるし・・・」

ヨシ「えっと、寮棟はかなりたくさんあって、学校別なのが基本なんだけど、グレードによって入れる寮もあるんだとか。一応完全寮制だからお嬢様とかが入る前部屋スイートとかもあるんだよね・・・ちなみに私とナナは【きさらぎそう】で、まあ平均的な家賃（食費こみ）かなあ」

八雲「ちなみに姫は共同寮【オリオンハイツ12号館】の40・・・



」

ナナ「わーーーーーーー！わーーーーーーー！けっこういろんな人見てるんだから言っちゃダメだって！」

ヨシ「っていつかなんでカイチョーがいんの？」

八雲「さあ・・・？」

ナナ「さては尺の問題で作者に召喚されたな・・・」

ヨシ「ナナ、リアルだね」

カンペ『終わらせます。かつこよく締めてください』

ナナ「無茶ぶりだな・・・ヨシ！昨日徹夜で考え奴行くよ」

ヨシ「OK！」

ナナヨシ「次回は・・・」

八雲「次回はオリオン学園案内パート2です。またお会いしましょう」

ナナヨシ「！！そこで取るか普通！」

作者「次回は少し遅くなるかもしれませんが。根性出して更新がんばります！お楽しみに！」

### 第三話：ワルツ第三楽章

それからさらに一週間

というかこの小説なんか一週間刻みに物語進んでる気がする。

まあ一か月がたちました。

言ってなかったけど俺が転校してきたのが四月の中頃だから今五月です。

アリアには、まだ一回しかメールを送っていない。

メールって、意外と難しい物だ。電話よりは簡単だけど。

生活にも、だいぶ慣れてきた。

部屋には、物が増えた。なによりバイト先からもらう惣菜で冷蔵庫の中身が増えるのが、うれしかった。

けっこう自分の中で、整理がつき始めているのかもしれない。

バイトはついに薫さんがつけを払ってくれた。(半分)

勉強は相変わらず学年トップの木葉さんが教えてくれて助かってる。

その他の私生活は八雲さんのサポートでどうにかなってるし

錬金術のほうは・・・先生の指導のお陰で？まあついに基本的応用

の最終段階にまで来ている。今度俺用の鍊金核が渡されるんだとか。特務科色に染まってきた。木葉さん曰く普通は自分用の鍊金核は3年の卒業式の時に渡されるそう。一段飛ばしどころじゃないな。

そんな毎日だった。

何事もないことを、何事もなくこなせるようになることが、なににより難しいことなんだと勉強になった。

自分は変わってきている。そう思った。

この世は、精霊の住むと言われる精霊界と人間界で構成されている。人は精霊界への門をその霊力と奇跡の紋章コントラクトで開き、精霊を呼び出す。

そうすることで力を引き出し、創造し、破壊してきた。

精霊と人は親子のようなもの。そしてその構造がまったく違うもの。精霊は親である人へ触れられず、人は構造のまったく違う精霊には触れられない。

それが千年前、いやそれよりもさらに前から定められたロジック。概念。

では、コントラクトのない者には精霊は呼び出せないのか？

答えはノーだ。

人はその全てが霊力を持っている。

そしてその霊力がある限り、精霊は出てきてしまう。

それが例えば一人の強い欲望、憎しみであつたり大勢の人間の一つに絞られた願いが重なったときなどだ。

それが野生精霊。前者の場合はそこまでの力はないが、後者の場合はそのものが神として現れる。

野生種はこの世界にあふれていることを忘れてはいけない。

野生種に世界のロジックが通用するとは考えてはいけない。

その日はよく晴れた木曜日だった。

何の変哲もない日常。

だがこの一週間、どうもミナコ先生達が忙しそうな気がした。

あんなに毎日あつたはずの補習も休みになってるし、定食屋に薫さんが来なくなつた。

八雲さんも生徒会室に籠ってるし。

なにがあつたか聞こうにも、遂には授業にすら来なくなっていた。

マドカ（木葉さん。名前で呼ぶようになりました）は特務科は特別だからと言っていたけど・・・

「こらこら陽乃くん、授業中に外を見てるなんて余裕ねえ？」

やばっ

「ならこの問題余裕で解けるわよねえ？」

席替えて隣になったマドカに、アイコンタクトで救いを求める。

「ごめん、あの先生教えたりすると後が怖いから・・・」

申し訳なさそうに目を伏せる。

孤立無援とはこのことだ。

どうりでこの授業のときはヨシもナナも大人しいはずだ。

「ええっと・・・その・・・」

クスクス笑いがそこかしこから聞こえる。

「さあ早く答えて？」

くそ！この女ゼツテードSだ！

ビーーーーー

ーーーーー

そのブザーがスピーカーから聞こえた瞬間、教室の空気が凍りついた。

みなさんに報告します。大学の施設部隊が野生種の討伐に失敗しました。最終防衛ラインギリギリまで接近して来ています。ただちに3年、2年生の選抜者は所定の位置に付き、その他は地下グラウンドに避難してください。繰り返します……

こんな時でも淡々と放送する八雲さん。

でもクラスの中、いやこの学園都市全体は大パニックに包まれた。

「いそいでコウキくん！地下グラウンドに早く逃げて！」

マドカに手をひかれながら地下グラウンドまで引つ張られる。まわりはもう騒然だ。泣きだしてる生徒も一人や二人じゃない。

「マドカは！？マドカは地下グラウンドへの避難なの！？ナナは？ヨシは？」

「私らは地下グラウンド警護だよ！それより急げ！編入生のコウキは所属無しだろ？」

ナナの怒声にも似た声が聞こえる。

そのまま地下グラウンドに放り込まれた。

俺のほかには1年生と2年生が半数くらい。最後の一人が来て全員が集まったことを、たぶん担当の職員であろう中年の女性が、青い顔で点呼を取りどこかへ連絡をしているところで、門を閉めにきたヨシ達と目があつた。

「野生種つて！ここはこういうことはよくあることなの！？」

ヨシの顔は真っ青で、いつもの元気さは欠片も感じる事ができなかった。

それでも彼女は片手に鍊金核をぎゅっと握っていた。

「うっん。たぶん、この学園ができて以来、はじめてのことだともう」

「そんな！無茶だ！いますぐ逃げた方がいい！」

「うん……。でも、みんなを守るためには私たちが戦わないと！大丈夫。コウキは私が護つてあげるって！」

その一言を最後に扉は閉じられた。

俺は、その瞬間のヨシとナナ、マドカに、アリアを思い出した。重  
なった。

静寂。静まり返った空間。でも冷静さとは無縁の場所。

みんなまだこの状況を、整理しきれていないのだ。茫然自失。恐怖  
はまだ彼女たちにとっては先の感情だ。

「無理だ！・・・俺が？そんなのもつと無理だ！できない！おれに  
は・・・できない、だろ？」

問う相手を探しながら問うてみる

「でもしょうがないじゃないか。力がないんだから。力なき者は力  
がある者に守られる義務があるんだから。」

答えるべき相手を求め答えてみる。

そのまま床に座り込んだ。

まわりは誰一人として唯一の男子学生に注目をしなかった。

みんなその身を寄せ合って震えていた。

それを見て俺に何ができる？

頭には言い訳ばかりが浮かんでは消えていた。



生徒会室は一時軍事基地の本部のようになっていた。

もちろん長官が据わるような場所には校長ではなく生徒会長である私が座っている。

「会長、全員が避難を終えました」

さきほど防犯カメラでチェック済みだ。姫も逃げたようだし・・・

「大学側からの連絡です。最重要の西ブロック防衛のためこちらに手は回せない、野生種を全滅させ次第南へ向う、耐えてくれ・・・だそうです」

初等部があると同時に中枢部に連なる重要なブロックである西地区を力のある大学が護る。一見当然のようだが、事態はそこまで深刻化しているということだ。

「仕方がありません・・・山に面している北と東の人員を全てこちらに回すよう要請してください」

なぜなら普通大学が全てを防衛するようにシステムされているからだ。マニュアルもそれを前提に定められている。

「まだ防衛システムは作動しませんか？」

「いま行っています！ですがもう少しかかるかと・・・」

それはさつきも聞いた。ため息しか出てこない

野生種は加減を知らない。人を殺せないこと以外はその全てを破壊のために行動する。

「発生源はここより北に約5キロのあたり。下の村はもう不幸だったと言いがたい。まああいつらだって獣。精霊魔導士や錬金術師の多い都心や街を避けて山奥の方へ来たのだろう・・・」

何の抵抗もできない人々はいったいどんな気分で破壊されるじぶんの村をシェルターから見ていただろうか。

想像を絶する世界だろう。

「まあ八雲くん。いくら避難がはやく済んだとしても、私らは初めてに近い野生種との接触だ。こればかりはどうにもならんよ」

「防衛ラインの人員、全員所定の位置についてます」

「全ての教職員、並びに特務科2名に連絡をいれてください。ミナコ先生によりますとあと5分で臨戦態勢に入ります。」

時間がなさすぎる。こんなにも野生種とは賢いのだろうか？野生種のトラップがそこらじゅうに仕掛けられているというのに！

「わしらだけで防げるのだろうか・・・。こんなこと、ここで教師をしているが一回もなかったぞ」

「それは大学が賢かったからでしょうね。・・・出来なくてもも死

にはしないでしょうがこの学園都市が壊滅するのは確かですね」

その一言で部屋の中はさらに重い空気になったが、本当のことだ。

「今わしらにできるのは、生徒と教員を信じるだけじゃの」

どうしようもないのだ。多分、私の予測が正しければ・・・

野生種は、現れた。

その圧倒的な存在感を滲ませながら。

それも一匹ではない。何匹いるのかもわからない狼型の群れだ。

第一防衛システムの防御結界はやすやすと破られ、第二防衛システムの対精霊用の鍊金防護壁が破られるのも時間の問題だろう。

まあ十年に一度でるかでないかの野生種のためにそこまで充実した装備は望めない。

最終防衛ラインを覆いつくすように集まった鍊金術師たちをまとめ上げながら、私はもう一度探索を始めた。

敵の数は・・・200。まだまだ増えている。

それに対して私たちは1000人。

数的には遙かにこっちが上だが・・・私と薫、今は指揮官をしてい

る八雲を除いたらほとんどが後方支援程度しかできないくらいの実力だ。

「大学に任せっきりにしていた罰だな。薫！リリースだ！後の者は銃タイプの錬金核で一斉に攻撃しろ！お前らが最終ラインだ！後ろをしっかりと守れよ！」

私より年上の先生方もいるが、まあこの際無視だ。

「リリース！さあ、いつでもいいぞ？化け物ども」

「センサー！私すこし緊張してるかしんねー」

「たたく・・・」

「来るぞ！」

「来た！」

ついに戦闘が始まった

野生種はいくらロジックに外れていたとしても人を殺すことはできない。

なぜなら自分を生み出す人を殺すことは自己の生まれを否定することになってしまうからだ。

だが一端中に入れたら街は壊滅するだろうし、怪我では済まない人も出てくる。

そんな状況の中、俺は安全な場所でただ座っているだけった。

徐々にこっちにまで響く破壊音と野生種の咆哮。

だれも騒ぎはしない。ただもう皆震えることしかできないのだ。

そんな中、俺は昔を思い出していた。

俺は昔、魔導精霊士だった。

え？そんなの聞いてない？

いや、それらしい描写はいっぱいあったはずなんだけど・・・。

まあいつか。

俺は昔、魔導精霊士だった。

まあ魔導精霊士の中でも一番下の階級、準騎士だった。下には騎士見習いしかない。そんな階級だったんだけど。

ま、才能がなかったのだ。これが本当に。洒落にならないレベルで。

アリアとは隣の家に暮らす幼馴染と言った感覚で、家族ぐるみです

ごく仲が良かった。

そんな関係が変わったのは、俺の両親が6歳？位のときに死んだ時からだ。

貿易商を営むアリアの家は、俺の家なんかよりも数倍大きい。その家の主であるアリアのお父さんは、すごくいい人で、身寄りのない、他人の俺を引き取ってくれた。一緒に暮らしていた。

もちろん向かいの超大豪邸に住んでるカトレアさまにもお世話になっていた。

その後、アリアとカトレアさまとは同じ小学校、中学校に進みシリウス学苑に入学した。

アリアには人を引き付けるその圧倒的な美貌と凄まじい才能、なにごとにも物怖じしない強気な性格で、絶大な人気があった。いつも周りには人がいた。

カトレアさまにはアリアよりもやわらかな美貌と気品、そして四天空家にしか現れない強力なコントラクトの紋章（普通は利き腕に現れるが、四天空家の場合は背中に見れるらしい。見たことはないけど）があった。でもそれよりその身を包む優しくあつたかい雰囲気は、心地の良いものだった。

俺はいつもその陰で隠れて生きていた。それが悔しいのか、嫉妬したのか・・・俺はなにか自分なりの誇れるものが欲しくなった。

そのころから俺は裏の世界にその身を染めて行った。

今思えば馬鹿な行為だが、その時の俺はそれがすべてだと思い込んでいた。

中学3年進学と同時にアリアの家を飛び出し友人（そのころはそう信じ込んでいた）のアパートに住みつき、バイトと称して裏の精舞闘連（戦闘に特化した精霊魔導集団）に入り浸った。

異常な訓練を繰り返しその身を鍛え、禁忌の技を身につけ、遂には固有精霊とのコントラクトまで可能にしていた。

アリアの倍努力しても、アリアの半分も・・・いや、そのまた半分にも追い付くことができなかった俺にとって、それはとてもうれしかった。

固有精霊・・・普通の精霊魔導士は四元素であるイフリート、ノーム、シルフ。ウンディーネと契約することで力を引き出し使うのだが、さらに力を身につければ精霊界に存在する固有の精霊と契約することが可能になる。

固有精霊の力はそのすべてを凌駕する。まさに精霊魔道なのだ。

だがそれに伴い、少しずつ。体も心も壊れて行った。

仲のよかったアリアやカトレアさまとも、表面上は一緒に弁当を食べてりしていたが上辺だけのものになっていっていた。

そんな日が長く、たが短く過ぎて行った。

そして遂に16歳の時にある裏の大きな大会で優勝した。

そのときにある大物に、数億円もの金額を稼がせた。裏では試合の結果での賭博が主流なのだ。

目をつけられた俺はさらに有頂天になった。

それから的一年間、あらゆる裏御殿目試合で挑戦者を打ち破り無敵を気取っていた。

全てを取った気でいた。怖いものなんて何もない、失ったものを、埋め尽くした。おもちゃばこ、いやゴミ箱みたいな心の中。

でもよかった。俺が、俺が一番だ。固有精霊の力は絶大。勝ち組。俺は勝ち組だった。

だがその日は突然やってくる。

それはいつもと同じ決勝戦という名の暇つぶし。軽く捻り潰せるはずだった。

いつものようにコントラクトに力をこめ、いつものようにゲートを開きいつものように固有精霊を呼び出す・・・はずだった。

だが俺の手からはコントラクトがなくなっていた。

なくなっていたのだ。

その日俺は半殺しにされ、裏の世界から捨てられた。

ああ、おそのとき自分の人生が死んでしまっていたことに、はじめ



て気づいた。

病院に入院し、治療を受ける。検査を受ける。  
でも俺のコントラクトは戻ってこない。

離れて行った人々は戻ってこない。

久しぶりのオモテは、俺にはあまりに眩しく、綺麗過ぎた。

なのにアリアとカトレアさまだけは俺から離れなかった。

ひどく悲しく、うれしかった。

それから俺は目線が怖くて前髪を伸ばし、周りの人が怖くて入院生活  
を延長させ、最後には二人が怖くてシリウスから逃げ出した。

逃げて逃げて逃げて。

一番近くにいた二人にさえ恐怖し。

でもしょうがない。俺には何もないのだから。弱者になり下がった  
のだから。

なにもかもを失くした俺はただの空気。

どんなに頑張ったってダメ。血を吐く努力もした。体を壊すまで練習  
した。それで駄目だった。でもあきらめられなかった。だから裏  
へ挑戦した。アリアを、カトレア様を超えたかった。

勝ちたかった。必要とされる、自分じゃなければだめなんだ！というものが、どうしても、どうしても欲しかった。

それがこの結果だ。

「ただの供給者・・・守られる・・・他人のために何ができる？何もできないじゃないか」

全てが俺を捨てた。だから俺だって捨てたんだ。

知らないうちに俺はアリアのお守りを握っていた。

「まだ未練があるのかな。逃げだした分際で」

『オマモリ』と縫われたそれは、アリアの手作りだった。

「アリアは縫物も・・・得意だったから・・・クッ！」

クシャ　　とお守りを握りつぶす。

「クソ！クソ！クソ！俺は・・・俺は・・・って　クシャ　？」

布からする音じゃない。

お守りをを開けてみた。

「手紙？アリアの字だ」

それは手紙だった

全てを許す、手紙だった。

全てを変える手紙だった

### 第三話：ワルツ第三楽章（後書き）

ナナ「おっひるやすみは」

ヨシ「うっきうっきウォッチン」

ナナ「あっちこっち」

ヨシ「そっちこっち」

ナナヨシ「オリレツポ」

ナナ「・・・微妙だな」

ヨシ「・・・そうだね」

ナナ「まあはじめましょう」

ヨシ「髪切った？今年の風邪はひどいらしいよ？東京は今日雨だったさー」

ナナ「スルー。さて今回は？」

ヨシ「オリオン学園都市案内パート2！ー東地区オンリーバーズヨーン！ー」

ナナ「まあ東地区はカオスな場所だしな」

ヨシ「でしょあ？んじゃ行ってみよー！ー」

ナナ「えーっと、東地区はズバリ近代科学都市＋ヨーロッパな雰囲気作りです」

ヨシ「すんごく分かりにくいけどこれしか言いようがないんだよね」

ナナ「もう白い研究所が立ち並んで・・・」

ヨシ「その間を石畳が伸びるんだよねー」

ナナ「夜になると青や緑やら赤やらの光でチカチカしてるし」

ヨシ「たまに爆発起きてるよね？あと蒸気が噴き出すんだけどあれ危ないんだよねー」

ナナ「まあでも大学を出た後の一つの就職先？つーか大学院の代わり見たいな場所だしね」

ヨシ「現代の十年先に行く科学力なんでしょ？」

ナナ「そうそう！ここにある物はほとんどがテスターを兼ねてるらしいし」

ヨシ「え！？じゃあ携帯から立体映像とかでないの？」

ナナ「出ないらしいぞ？怖えーよな」

ヨシ「じゃあテレビが折りたためないの？丸めたりも？」

ナナ「できないんだってば！ここでの常識は世間の非常識なんだって！」

ヨシ「ふーん。なんかこっつて割とすごい場所なんだねえ」

ナナ「まーね。それに錬金核だつてここでしたら作られてないらしいし」

ヨシ「すごいんだねー！というか私らも三年になったら固有錬金核もらえるんだよね？」

ナナ「まあ特務科はもうもらってるけどね」

ヨシ「すごいよねー！ボクトーなんか一撃でおれちゃうし」

ナナ「タイプもいろいろあるし。あたし銃とかがいいな」

ヨシ「ナナ。黒いよ」

ナナ「う、うるさいわね！もう締めるわよ！」

ヨシ「ごまかせてないんだけど・・・」

ナナヨシ「次回は私たちの学校がある南地区です！おっ楽しみに」

作者「少しまた遅くなっちゃうかもです・・・ハア・・・。あ、アクセス数が五千を超えました！これも一重に皆さんのおかげです・・・これからよろしく願います！」

#### 第四話：ワルツ第四楽章

折りたたまれた小さな汚い紙に走り書きされた、綺麗な癖のないアリアの文字。

そう言えば昔習字習ってたっけな。俺途中でそろばんに浮気したけどあいつきっちり両方こなしたんだよな！。

おいといて。

『親愛なるコーちゃんへ

コーちゃんがよく読んでた本のページが何枚か破れてたでしょ？

あれずっと前になるんだけど、実は片づけしたときに出てきたんだ。

どこにあったかは秘密。

お守り代わりに入れました。

ページの裏に書きちゃったけど・・・ごめんね？

カトレアとアリアより』

裏をめくるとそこには、確かに昔俺が毎朝毎晩読んでいたお気に入りの本の、そのなかでも特にお気に入りページがあった。

見なくなったと思ったら・・・破れてたのか。

『まおうは ゆうしゃに いいました。

「あかのゆうしゃよ。 おお ゆうしゃよ。 おまえはどうしてわれとたたかう？ このきたなきせかいを どうして まもる？」

ゆうしゃは こたえました。

「きめた せいぎに いきると きめた。 だから わたしは つらぬく やりになろう。 わたしは まもる たてになろう。 まおうよ わたしは おまえを ゆるさぬ ゆるさないから たおすのだ」

ゆうしゃは ボロボロになった けんをもちあげ まおうにむかって はしりだしました。

「あかのゆうしゃよ おお ゆうしゃよ。 われを たおせば おまえはしぬぞ。 われのちからで おまえはしぬぞ。」

ゆうしゃは そのけんを ふりあげ まおうにむかって ふりおろしました。

「かまわぬ わたしは きめたのだ いのちをかけて せいぎにい



きると。さらばまおうよ　さらばひめよ。　さらばともよ　さらばせかいよ」

あかいひかりが　あたりをつつみ　まおうのおしろは　くずれました。

せかいをおおう　くもはちぎれ　あたりはあかるい　あおぞらになりました。

そうです。

せかいをこわす　まおうは　たおされたのです。

しかしひめは　おしろで　なきました。

まおうから　たすけてくれた　ゆうしゃは　いません。

もうどこにも　いないのです。

それから　いくつき　たったでしょう。

せかい　へいわになり　ひとびとは　げんきにくらしていました。

ひめはひとり　おしろに　とじこもっていました。

まいにちまいにち　なきました。

なみだがかかるまで　なきました。

そしてひめは　きめました。

せかいをへいわに おさめると。

それから ひめははたらきました。

まいにちまいにち はたらきました。

コンコンコン

とびらが あかく かがやきます。

ひめは ふしぎに おもいながら とびらをひらきました。

「ひめよ われは かえってきたぞ。 ゆうしやは ここに かえ  
ってきたぞ」

あかのゆうしやは いきていたのです。

それから ふたりは しあわせに くらしました。

ずっとずっと くらしました』

本の名前は紅の勇者。

よくある、少年が一度は夢見るヒーローが活躍するお話だ。

俺はこの勇者にあこがれて、アリアといっしょに精霊魔導の訓練を受け始めたのだった。

「勇者・・・」

目からは涙があふれていた。こっちを見るまわりの目なんて気にならない。

俺はいつたい何をしてるんだ？

遠くから声が聞こえた気がした。

何もできなかったのか？

何かしたのか？

いつまで逃げてるんだ？

・・・あの日の俺は、紅の勇者だった俺は、今の俺を見てどう思う？

逃げるのか？

目を逸らすのか？

「そんなこと！俺は！」

グシャア

メガネをはずし、握りつぶす。

前髪を払いのけ、前を見る。

もう逃げない。

逃げる訳にはいかない。

あの場所に行かなきゃ。あの場所に行けば何かができる。

扉の前まで歩く道が、十戒のように割れて行く。

コンコン

「少し開けてくださいませんか？」

「驚いた・・・超イケメンじゃん！」

「ヤバイよねあの顔！かつこよすぎ」

きやあきやあハシヤグ馬鹿が二人・・・。

「私はそれよりあの言葉が気になる・・・」

勇者？ヒーロー？見なきゃ損なのは確かだ。

私は戦場にむかって走り出した。

後ろで止める声が聞こえたけれど、そんなものは・・・無視つてこ  
とで。

#### 第四話：ワルツ第四楽章（後書き）

ナナ「うゝたおうゝ」

ヨシ「おゝどろろゝ」

ナナ「今夜はゝ」

ヨシ「夢ゝのゝ」

ナナヨシ「ラ・ラ・ラ オゝりゝレツポゝ」

ナナ「なかなか決まっ たな？」

ヨシ「だね！ やっぱミュージック フェアーは伊達じゃないね！」

ナナ「ヨシ？ それギリギリアウトだわ」

ヨシ「んもゝ！ ならいつぞやのフリップを繰り出します！」

ナナ「だから、見えないんだって・・・」

ヨシ「今日は東地区の説明で つす」

ナナ「もうつつこまんぞ。 東地区はみなさんご存じの通り、高等部地区となっております」

ヨシ「高校の数は・・・なんと3つ！ いや4つ？」

ナナ「はつきりしないんだな」

ヨシ「っというより、この学園都市はどんどん開発がすすんでいくからねー」

ナナ「いや、そんな高校が何個かわかんないような速さはないだろう」

ヨシ「ぐっ……と、とりあえず、今わかつてるのは！私らの大学付属学院高等部、【如月】に、お隣の【睦月】、そこから離れたところにある【水無月】ええ……と……まだある？」

ナナ「通称なんかつかわないでさ、鍊金に力を入れてるとか、勉強に……とか工業系の……とか言っとかないとわっかんないでしょ？」

ヨシ「まあいいじゃん。いろんな趣旨にそった学校が乱立してる。それがここのいいところ！でーしょ？」

ナナ「そーだね。っとまあこれで学園都市の各ブロックの説明はわかりだよな？」

ヨシ「そだね。どうする？この先、何紹介していくの？」

ナナ「私に、任せなさい！次回からは登場人物、マル秘リポートよ！」

ヨシ「うそ！まじで！？っていつか会長とか調べんの？」

ナナ「あたんまえてしょーが！さあ次回へ向かって走り出すわよ！」

ヨシ「ああ！夕日に向かって走れない！」



## 第五話：ワルツ第五楽章

戦局はまさに泥沼と化していた。

もう疲れも何も感じない。ただ目の前の敵をひたすら切り捨てる。そして殴り飛ばす。

後ろから来る銃弾なんか、とうの昔に当てにしていなかった。

隣にいる薫も既に限界を超えていることだろう。訓練だって、ここまでは想定していない。

だがそれでもケラケラと笑いながら相手につっこんで行く薫を見ると・・・なんというか・・・

「負けてられん！うおおおおお連蛇！突破第弐式！」

燃えてくる。

次々来る狼型野生種のおごを砕きその身を消し飛ばす。

突破の改良型はその攻撃範囲と威力を増すところがポイントだが、疲労も増す・・・。

だがこの場面を開けない限りどうしようもないのだ。

八雲、この場面をどうにかできるのはおまえだけだ！

だからはやくどうにかしてくれ・・・！！！！

そこからさらに何時間が過ぎただろうか。果たして何体の敵にダメージを当てられているだろうか。

野生種が恐ろしく強いことは確かだ。一体一体が下手をすれば自分と同等クラス。それでも持っているのはやっぱり気合いの問題だと思う。

「恐るべし気合いだな」

「先生！大学の方から加増錬金弾が届きました！一斉射撃を開始します！下がってください！」

ようやく一息つける・・・

「薫！下がるんだ！」

未だ最前線で激闘している薫に声をかける。

「ええ？なんでまた！？」

「ハチの巣になるぞ」

「んーそいつはいやだな」

自陣の後方に戻る。

さあ、その錬金増弾ってのはどんな代物なのか？

[illegible]

見せてもらおうか。

銃型の鍊金核を通して、弾を込めると同じようにどんどん靈力を注ぎ込むのが普通の鍊金弾だが、その名の通りそれ自体にブースターのような靈力を加速させるシステムが組み込まれているのが加増鍊金弾だ。

[illegible]

轟音とともに放たれる鍊金弾。

敵の野生種に一気に襲い掛かり……

•  
•  
•  
•

- 
- 
- 
- 
- 

•  
•  
•  
•  
•  
•

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

「全然効かないじゃねーかよ！ハチの巣になるわきゃねーって！」

ええ！？そんな！

「くっ！薫！行くぞ！」

「休めるなんて言うから期待したんだけどな・・・ま、しょうがないか」

また切り込んでいく。

「申し訳ありません！まったく効きませんでしたー！」

「んなことでかい声で言ってるじゃねーっての！」

くっそ！もうだめなのか！？

学園都市の壊滅・・・最悪の事態が、音を立てて迫ってくる。

夕日をバックに、野生種たちの群れはさらに膨らんでいく。

「センサー！いったん下がって！このままじゃあたしらが持たない！」

「そんなこと言ったって！ここで下がることは・・・」

クラッ

「なっ！」

錬金核が明らかに色を失ってきている。

力が切れてきた！？

「センサー後ろ！」

「薰！後ろに敵が！」

「え？」

目の前に、野生種の赤い目があった。

時間が、一秒が長く感じた。

走る走る走る。

生徒会室以外は無人となった学校校舎内をひたすら駆け抜ける。

角を曲がり、生徒が倒したのであろうロッカーを飛び越え、ドアを  
け破り、窓を潜りぬける。

地下へと延びるらせん階段を四段、五段と飛ばしながら、跳ねるよ  
うに下る。

パスワード・・・ドを・・・

「生体パターン認証！ヒラケゴマ！」

音声パスワード確認。イラッシャイマセーゴユックリー

荒れ果てた研究所を駆ける。

そこは平坦な道のように。

そこには邪魔などないかのように。

ついに赤い門の前までくる。

生体パターン確認。ヒラキマッサーヒラキマッサー

ゆっくりと開く赤い門を無理やりこじ開けながら、中に侵入する。

中には見慣れた誰かさんが立っていた。

「さすが生徒会長。仕事が早い」

冷たい目で俺を見ながら黙って立っている八雲さん。

「あなたの経歴・・・失礼ながら調べさせていただきました」

そうだろうとは思っていたし、だからこそ生徒会室ではなくこちらに直接来たのだ。

【錬金術師】としての俺は無力な一男子学生だが、

「その紅鉄甲さえあれば・・・ですかねえ」

その一言に八雲さんはキュッと一層目を細めた（ように見えた）

「シリウス学園にいらしたあなたなら対精霊にかけては少なくともこの学園都市内一です。なにか行動を起こすとするなら・・・と思いいあなたの霊力を追わせていただきました」

「俺の向こうでの成績はご存知ですか？」

「・・・【見習騎士】です」

「それではそれがどういう意味かは・・・ご存知ですか？」

「それは・・・」

見習騎士とは魔道精霊士の階級である騎士の中でも最下層の準騎士。最も低い階級から二番目である。

ちなみにアリアは騎士総長【マスターナイト】で階級的には第五位。

ちなみに階級は17段階あるから凄いよね〜アリアって。

17歳でマスターナイトって！長い歴史の上でいても、そうはいない。

「なのになぜですか？俺の実力ならあんな数の敵相手にできない・・・っというか八雲さんの遙かに下の霊力しかないんですよ？」

八雲さんはグツと黙り込んだ。

「それとも・・・俺の経歴知ってるんですか？」

「だと・・・したら？」

だとしたら随分と芸達者な人だな。

なんて言葉は飲み込んでおく。

「俺は昔、それで全てを失いました」

「・・・」

「だからですかね。その辛さを、苦しみを、痛みを知っているから」

この学園の生徒はおそらく自分らの地元に戻るのだろう。でもこの学園の生活は二度と戻ることはない。

それは、人から聞けばそれだけのことだと考えるかもしれない。

でもその真ん中にいる今を生きる者たちにとって、どれほど悲しいことなのだろうか。

死なないからいいとか、そういったことじゃない。

そこにある思い出とか、記憶とかがあって初めて人は生きているのだと思うから。



「何気にまた全部失いそうになっている今を、見逃すことができなかった・・・」

「・・・」

「逃げたいのは山々なんですよ。でも、それでも、見逃す、ことはできなかった・・・」

八雲さんは俺の目をみて一言一言を紡いでいく。

「私だって、この学園都市のことを愛しています。私に居場所をくれたこの学園を。そして初めて友達になってくれた人を。馬鹿みたいにつきつきりになってくれる先生を守りたいです。でも、それでもあなたを危険な目に合わせたくないんです・・・」

泣きそうな声でこっちを無表情に見つめてくる。

「やっぱり行かなきゃ。大丈夫ですって。うまくいきます。絶対に」

「どうして？どうしてそう言いきれるんですか！」

たしかに馬鹿げてるかもしれない。

「昔、ある人が言ってくれたんです」

たしかに他の人には訳が分らないのかもしれない。

それでも俺は約束をしたから。向こうじゃだめだったけど、こっち

でその約束を嘘にしたくはないから。

「俺が勇者様で私がお姫様なんだって。勇者は無敵が最重要ですからね。たぶん無敵なんだと思います。なにせそのお姫様・・・あ、二人いるんですけどね？めっちゃくちゃ強いんせすから。あの二人助けるには、もはや無敵じゃないと・・・っていまさらガキの頃に突っ込んでもしようがないんですけど」

「無敵に、なつて守りたいんですよね」

紅い鉄甲が光を放つ。

その光を覆うようにルーンの金色が部屋を包む。

「・・・」。ここまで来て、緊張感のない人ですね。まあ、私は知っていました」

「何をです？俺が実は裏男だったことを？」

八雲さんは銀色のトライデントを振りかぶりながらこっちを見る。無表情なはずだが、どこか呆れたというか、笑っているような感じがある顔で。

「いいえ。あなたがバカなんだってことを」

「んなこと今頃いわないでください。」

一気に振り下ろされるトライデント。赤い光に銀の輝きが鋭く突き

刺さる。

グシャアアアアアアア

飛び散る破片に紅の光が乱反射する。

まるで血の流れのような、繊細な黒の彫刻と紅のコントラスト。

ケースの真ん中に鎮座するそれは、俺を導く奇跡の道しるべ。

これが・・・俺の勇者なのかもしれない。

「!・・・よいしょと」

カポッ

さっそくはめる。

「ちょっと!そんな簡単に」

・・・

「グウウアアアアアアアアアアア」

これが・・・苦痛?選別者の試練!?

死ぬって!想像以上だって!

左手がまるで千切れるかのように激痛を放つ。

肘のあたりまである紅い鉄甲が、輝きを増していく。

それに伴い痛みがぐんぐん上がっていく。

「ギヤアアアアアアアアア死ぬ！死ぬ！死ぬつてー！」

「なんだか滑稽に見えてきましたね。本当に痛いんですか？」

こんの女！ツツウウウウ！

「あ、でも少しずつ引いてきたかも」

じつくりと痛みが引いていく。

ッと思ったら

ブッシャアアアアア

肘から血が噴き出してきた。

「ぬおお！ファアア！」

一難去つて、また一難とはこのことだ。

「じつとしてください！あなたの霊力が散らばりすぎて調整ができていないんです。私が外部から調整します」

そう言つて片手を俺の紅鉄甲にかざす。すると仄かな蒼い光と共に痛みと出血が収ま「じつとみるこ」っていく。

八雲さんの制服が俺の血でべっとりだが・・・

「あ、すいません。シャツが真っ赤になっちゃいましたね」

俺の右手に手を添えて、うつむく八雲さんの黒髪は紅鉄甲の光に照らされ、艶やかに輝いていた。

「時間があれば治療をしたいのですが・・・」

「大丈夫ですって。怪我は慣れっこですし」

この学園に来てから四分の一は保健室通いだし。

「心配をかけないでください・・・」

目に涙を溜めて俺を見つめる八雲さん。え？なんで？

「そんなに心配しなくても。大丈夫ですって」

「なんだかいらいらしてきました。こんなにも心配をかけておいて飄々としているあなたにとってもいらいらしてきました」

「いや、その」

「問答無用です」

右手に伸ばした手が今度はグーで戻ってくる。

八雲さんは緊急事態のと真ん中に俺を気絶させるのか！？

「ちよい！泣いてるんですか？」

拳が唸る前に尋ねる。

「え．．．？」

俺の顔面クラッシュ寸前で止められる必殺の右。

握った拳を伸ばして頬に当てる。自分で泣いていることに気付いていなかったようだ。

「そんな．．．私が泣いている！？そんなに私は．．．なぜ．．．心配したから？」

「ん？何をぶつぶつ言ってるんですか」

すると彼女はキッとこっちを睨みつけて．．．

俺のすねを思いっきり蹴っ飛ばした。

「心配させないでいただきたいですと言ったんです」

ける前に言おうね。蹴る前に。

そのまま八雲さんを連れて走る。走る。元来た道を走る走る。

「俺はこのまま前線に向かいます。八雲さんはさっき言ったことを

放送してください！」

「わかりました。姫、ちょっといいですか？」

急に俺のシャツをつかんで止める八雲さん。なんだよ！急いでんのに！

「絶対に無事に帰ってきてください。怪我したらその数だけペナルティーです」

そう言つて小指を差し出す。

まさかね・・・まさか・・・

「ん。早くしてください。姫は知らないんですか？それとも秋田にはないんですか？指きりです」

この年になつて・・・ま、いいかな。

「ゆーびきーりげんまん・・・ほら、次は姫の番ですよ」

ワンフレーズ交代制かよ

「うつそつーいたら「拷問術入門」上級編」をページ目から順にたぐめす」・・・指切りたくないな」

「ほら、ゆーびきつた・・・絶対に帰ってきてください」

結局あの涙からまた無表情に戻ったけども・・・こうして分かった一つ一つの八雲さんを、もう少し見て行きたい気がする。

「はいはい。ゆーびきーった！絶対帰ってきますよ」

そう言つて俺は八雲さんから離れようとして、

ブツシユウウウウウ

アメリカ大統領みたいな音を立ててまた腕から血が噴き出した。

「痛い！？」

え！？なんで？なんでっすか？！

八雲さんと離れるたび痛みと出血が増していく。

そしてこっちに気づいて戻ってくる。

すると痛みと出血が止まるのだ。

「・・・どうやら私の霊力支配下フィールドの外に出られないようですね」

つてことは

「俺はこの紅鉄甲をはめてる限り八雲さんと離れられないってこと！？」

「そのようですね。こうなってはしょうがありません。まずは簡易放送機器を取って来ましょう。そうすれば移動しながらの放送が可能です」



へー！ってそんな簡単に！？結構衝撃的なもんだと思いますが！？

「時間が本当になくなってきました。・・・最終防衛ラインが破られたようです」

八雲さんの片手に握られたトライデントが、警告音とともに防衛ラインのデータを出していた。

「そんな！急ぎましょう！とりあえずどこへ行けばいいんですか？」

「放送室へ。それからはあなたにまかせます」

そのまま全力でダッシュをする八雲さん。

え？消えた！？

俺を置いて体外錬金使いやがった！

八雲さん！血が！激痛が！

「ギヤアアアアアアアア」

薫の後ろを私が、そして私の後ろを薫が護る。

別に前もって相談していたわけではないが、戦士としての感覚と互いの信頼がそうさせたのだ。

再びお互い距離を置きながら敵を弾き飛ばしていく。

だが敵が多すぎる。いくら両脇を結界でせき止め、流れを細くすることでも一回で相手をする数を減らしているとは言ってもいかにせん数が数だ。

「くっそ！数が多すぎんぞ！手が回らなくなってきたー！」

薫はトンファーで直で戦う戦い方。その速さに頼った相当無茶な戦い方だが、一体一体確実に仕留めている。

だが相手が多すぎるときには多いように戦えばいいのだ。

「空気を屠るこの一撃！かかったな！スウウウウウウウウウウウウウウウウウウ」

息を吸うようにして腹にためるように霊気を集め・・・

そのままいつきに剣に乗せて放つ。

ドゴッオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

一直線に延びる剣撃。そのまま野生種の塊につっこんでいく。

体外錬金の中でも強化錬金術、拳に霊力を被せ、空気を放つように撃つ技、【空屠】

拡散させないよう一点に絞るため、使い勝手が悪くなったり溜めに時間がかかったりするが数を相手にするならこれが一番だ。

巻きあがる砂埃。

「おいおいセンサー！その技を合図なしに使うか普通！？」

今の私の霊力じゃ、おまえならかわせる程度の威力しか出せんさ。

「・・・決まったか？」

だがこの言葉が出たということは・・・

砂埃の向こうに光るたくさんの瞳。

これすら効かないか？

「先生！もう結界が・・・結界が持ちません！」

何！

時間にして2時間。もうそろそろ限界が来るころだったか・・・！！

「どうするセンサー！あの結界が破れたらもう私らじゃもたねぞー！」

「カウントダウン入ります！30・・・29・・・」

ミシツという音を立てながら、結界にひびが入っていく。

まるでこの空間にひびが入っていくかのように亀裂が伸びて行く。

「薫！霊力供給を始めるぞ！私達でカバーするんだ！」

結界に手を伸ばし霊力を供給する。ひびがまるで消しゴムで消すように消えていく。

しかし目の前の敵を切るために手を放した瞬間に結界は崩れていく。

「もう無理だ！こんな風に道を作って結界自体にかかる圧力を減らしてんのに崩れちまってんだ！この開いた穴を守ってる私らがいくら力込めたって・・・」

くっ！もう無理なのか！？そんはことはない！あつてはならないんだ！

「4・・・3・・・2・・・1・・・結界が！」

「結界が決壊した！？」

薫の言葉が冗談になってるなんて気づく奴がどこにいただろうか。

横に広がるようにしてこっちにじりしりと迫る

私と薫を警戒してるのだろう。

だが山の裾に広がるようにしてこっちを見つめるその瞳は数数えきれない。

どうやら私たちはほとんど倒すことができなかったようだ。

一陣の風が頬をなでる。

目の前の絶望に目を逸らすこともできないまま、ただ目からあふれる涙を拭うこともできずに。

「悔しいもんだ・・・こんなところで・・・私らの街が・・・」

震える薫の声に聞かぬふりをする。

握力が出ない。

剣を捨てる。

かくも・・・私たちは・・・

「無力だ」



ピーーーーーガッガ……ガガ……ザーーーー

プチッ……ガガッ……前線の生徒、並びに教員に連絡します。  
只今より対野生種用最終決戦兵器を使用します。巻き込まれる危険  
が非常に高いため、全員最重要防衛ラインY-KKまで下がって  
ください繰り返します……

「や、八雲？……だが遅すぎた……これほどまでに侵入されて

は、どんな錬金術でも間に合わない・・・」

その瞬間だった。空が紅く染まった。

そこに浮かぶ魔法陣の中心に、よく知る二人の男女が立っていた。





## 第五話：ワルツ第五楽章（後書き）

ナナ「今回はオリレポはお休みです」

ヨシ「なんで？ねーなんで？」

ナナ「お休みしないとならない理由があんのよ」

ヨシ「とくにないくせにー」

ナナ・ヨシ「評価、感想、お待ちしています。読んでくださり、  
ありがとうございます！ぜひ、またのお越しをお待ちしております」

## 第六話：ワルツ第六楽章

その瞬間だった。空が紅く染まった。

そこに浮かぶ魔法陣の中心に、よく知る二人の男女が立っていた。

片っぼの男はヨロヨロとしながらだが。

遠目でも霊力供給のおかげでよく見える。

二人とも妙に血まみれだ。

敵は間近だが・・・え？なんかあつたの？学校内で？

「おお。靈力を体外固定して足場を作って一時的に浮力を作り出すとは・・・これが魔導精靈の力ですか」

「あんまりうごかないでくださいよ！この足場安定させるだけでも靈力が持たないんすから！」

あ、ちなみにこれは風の精靈源シルフの力で浮き場を作る『フロー』（俺らの通称。本当はもつと横文字で長い）とよばれる技で、羽を作って飛ぶ方法や空気を固定して空を走る技なんかもあるんですね。

この技のいいところは靈力を足に集中させるだけで発生させることができる所だ。

これを『簡易精靈魔導』っていうんだけど・・・まあ初歩中の初歩

だ。

俺は確か中等部に入って一番最初の実技試験で習った記憶がある。

あんどきや痛かった・・・

「薄いというよりもなんでしょう・・・体外錬金の局部体外発動を応用させていますね。なるほど、私たちがまず体内から始めるのに対して体外から・・・いやしかし・・・キャツキャツ」

つか人が回想シーン入ろうとしているときに無表情で無邪気に動くんじゃねー！

「また靈力にノイズが入ってます。気が散りすぎですよ」

くっ！いきなり真面目に・・・

「この速度ならあと15秒で敵軍勢の中心部に入ります。ですがもうすでに敵の先頭は学園内に侵入しようとしていますよ？」

下を見ると膨大な量の狼型野生種が、単細胞生物のように分裂を続けながら学園内に侵入しようとしていた。

津波と一緒に。

浜辺から見れば先っぽの小さな波しぶきしか見えないが、その裏には膨大な量の水の塊が待ち構えている。

飲み込まれるのは一瞬だ。

「大丈夫ですよ。八雲さん、今から魔力供給を分岐させます。手伝ってください」

魔力を足から全身に切り替える。

流れは歪ながらも、なるほど。そんなに大差はないようだ。

「・・・開門」

その瞬間、鉄甲の紅が空に灯る。

黒の道が金色の羅線へと変わり、空をかたどっていく。

「精霊よわが名のもとにその力を示せ！我、紅の皇姫なり！」

「あ、姫いま自分のこと姫って言った」

「黙っててください！今この話の中でもかなり盛り上がってる所なんですから！」

そのまま空の線の一つなぎにして力を集中させる。

コントラクトを失ってからでは連絡すら取れなかった俺の固有精霊。

見つけ出せるだろうか・・・。

限りなく深く浅く広く狭い精霊界だ。

個を持たぬ者に個を。

時と空間の間の、影と光の回廊・・・ってなんだそれ

心をつなぐとすぐにわかった。

ああ、待っててくれていたらしい。

「久しぶりだな」

光の線が門をかたどる。

「いろいろあつたんで、まあ連絡すら取れなかったわけだが」

門の光は徐々にかすれ、奥には黒い道が見えた。

「姫？　いつたい・・・いつたい何が？」

「ああ、これは『固有精霊別導召喚』です。精霊魔道術のなかでも一番難しい技の一つなんですよ？」

えっへん。難しすぎて一般はおろか軍部の戦闘術マニュアルにも載ってない技だ。

門の扉の光が結び、暗い闇の奥から羽ばたきが響く。

「まあ、俺が昔・・・といってもほんの2年前に契約を結んだ霊気集合体、夢のある言い方をすれば精霊ですか。を呼び出したんです」

羽ばたきは刹那。

後光射す鳥の翼をたたえた固有精霊。

『相も変わらず女づれですね。姫君さん？』

そいつはいつだって優しい銀髪の。

しかし他の野生種とは一線を置く存在霊力。

「せっかく呼んだんだ。全滅でたのむよ？」

『そちらの奇麗なお嬢さんのことは教えちゃくれないのかな？』



「あとでいくらでも教えるよ」

『了解。ならそちらのお嬢さん？しばし御観覧のほどを』

ウインクを残して敵のど真ん中に舞い降りる。

「頼んだよ。小林さん？」

敵のど真ん中に舞い降りた天使はたった一言つぶやいた。

『行動を停止なさい』

いきなり姫が魔法陣を開いて、そしたら門が現れて・・・

「中から天使が現れた・・・？」

そして一言つぶやいて

野生種は一瞬で行動を止めた？

んなバカな、だ。

『お嬢さん、天使を見るのは初めてですか？』

天使はやっぱり天使なのであろうか。

「小林さん？いきなり口説かないでよ」

『そ、そんなことは言わないでください』

「と言うより名前は小林なんですか？」

『いえ、私はきちんとミカエルという名前があるんですよ』

「でも長いからね。小林さんで十分だよ」

ちよつとまて

「コバヤシサンとミカエルなら確実にミカエルの方が短くないですか？」

「漢じ『漢字にしても文字数は一緒ですね』……な、なんか響きが「いえ、ミカエルのほうがいい気がします」……なんとなくです！そうなんです！」

……相変わらず、彼には秘密が多いようです。

## 第六話：ワルツ第六楽章（後書き）

### 新キャラ紹介

ミカエルⅡ 小林さん

『みなさんこんにちは。いや、こんばんわかな？私と姫様のなれそめの話をしたいところなんですけどね。すみません。作者さんの努力不足だそうです。たぶんここがオリレポに変わることだろうと思います。私の初登場挨拶をばと思ひまして。よろしく願ひしますね？』

「いい人そうですね。姫」

「そう言えば八雲、姫って誰のことなんだ？」

「姫って言えば日野しかいないじゃないっすか！そうだろ？八雲」

「というより俺の姫ってあだ名は公式になつてんだ・・・嘘だろ？」

「あきらめた方がいいですよ。ね、みなさん」

「わ、私は姫などとは・・・だが日野がそう呼んで欲しいのなら私は・・・」

「呼んで欲しくなんかないですよ！というより小林さんどうにかしろよ！」

『私が出る場面ではないでしょう。がんばって！』

「ケラケラケラ！物わかりがいい奴じゃねーか！気に入ったぞ！」

「ああ・・・カオスなんだよなあ〜この人たち」

『それよりも姫様、作者さんより言伝を預かっていますよ』

「なになに・・・って字が小さくて俺の視力じゃ読めないや。美奈子先生よんでくださいませんか？」

「そういえば・・・ひ、ひ、ひ・・・日野は目がわるいんだっ  
たな！よし！わ、私が読んでやろう」

「センサーがどもってるうちに八雲が持つてっちゃいましたよ？」

「お読み頂いてありがとうございます、評価、感想のほうをお持ちしております。気軽に書きください・・・だそうです」

『まあこの文章を書いているのは作者さんですからね。結局は自分で言ってるようなものではないでしょうか？』

「ケラケラケラ！日野！おまえもなんか一発やってやれよ！」

「まだ僕の心に傷をつける気ですか！」

「『『『続く！』『』『』」

## 第七話：ワルツ第七楽章

一般論ではあるが、精霊魔道は限りなく専門的な学問として扱われている。

例えて言うなら大学の研究と似たようなものだ。

庶民の生活にはなんら影響はきたさないが、ひとつ線を越えると海よりも深い知識が待っている。

・・・つまり、魔法のように便利な道具でもなければ生活の中でも使われることのないものということだ。

そんな学問でもある精霊魔道には二つのタイプがある。

一つは前にも言ったが、四大精霊によってある程度固められた精霊元素をコントラクターで持つてくることで様々な事象をおこす物。

二つ目は精霊元素が自我をもち、己を見出したもの固有精霊を自らの霊力で隷従させ、コントラクターを使い使役するもの。

もちろん前者が一般的であるし、たいていの場合はこちらを精霊魔道と呼ぶ。

しかし上に立つものたちは須らく皆後者を身につけている。

その間には雲泥・・・いや、それ以上の差があると言っても過言ではない。

日本海溝とオーロラくらいの差はあるだろう。

つまり何が言いたいのかというと、今俺がやってのけたことはそれぐらいすごいことなんだってことだ。

『随分と長い自慢でしたね』

「ちゃっかり解説を入れているあたりに狡猾さを感じます」

けっ！ちよつと俺がなんか言つと速攻で各方面からバッシングだよ。

「いいから！小林さん、『言霊』はあと何分持つ？」

言霊とは文字通り言葉に霊力を込めることだ。固有精霊クラスになると、霊力の微量な野生種なんかは止まれの一言で身動きがでなくなるのだ。

その言霊を使つて、精霊を消す霊子分解っていう上級の技もあるけど、それはめつたに使えないのだ。

なぜかつて？それにはふかい理由と計算式がかかわってくるのだ。俺は知らない。

『中隊レヴェルなら下級種ですしどうにかなるんですけどね・・・大隊レヴェルの数ともなると、いくら私でも五分が限度ですよ』

まあこの数を五分でも止められるってのはかなりすごいことだし。発音もなんかネイティブだし。

「わかった。じゃあ霊力供給をストップさせるよ。霊力は安定してるよね？」

『イエス。いつでもよろしいですよ？』

「八雲さん！霊力を鉄甲から腕に供給します。手伝ってください！」

小林さんと言う天使が出てきたあたりから、なんだか、随分と現実離れなことになってきたような気がする（私もそう言う世界の住人なんだけど）。

「姫、これ以上いったい何をする気ですか？」

緊迫している空気はない。

「簡単ですよ。鉄甲に供給している霊力を一端『陰と陽』にバラして腕に絡めさせて・・・ってまあ、力を小林さんに送る感じです。」

いや、それが決して簡単じゃないことは私でもわかる。

霊力の分解に再結合だ！？そんな、専用の錬金核を使っても難しいことを簡単にできるものなの？

普通ならできない。だがこれは錬金術師としての常識だ。魔道精霊なら簡単なことなのかも・・・



「腕に靈力をシフトしたら、すぐにこの場を離れます。小林さんの邪魔になりますからね」

『危険ですからね。半径1キロ』

「残念！そんなに強い靈力はおくりませーん」

『・・・カツコつけたかっただけです』

黒髪の少年と金髪碧眼の有翼美男子・・・これが俗にいうBでLなパッション？

「さつさとむこうに戻ってよね。小林さんいるだけで靈力垂れ流してんだからさ」

『え？いやですよ。折角来たんですから。こちらの女性ともまだ・・・』

どっちかというと兄弟に近い？

小林さんに靈力を送る。

ジワリっと小林さんの六枚の羽が輝きを増す。

下の人たちに見られるのも厄介だし、ここは八雲さんの隠していた最終兵器の活躍ってことにしておきたい。

「広範囲かつ殲滅用でいいこう。相手は野生の中でも下級だから、使用霊力は1090ニフでいい?」

『派手に2000くらい行きましようよ。そっちのほうがより細かく演出できますよ?』

「いやだね。小林さんいつも俺がせっかく送った霊力をものすんごく無駄なことに使うから」

『私が? いつ?』

「はあ? アルマダでペインスをつぶしたときのあの薔薇はなんだったのさ! 俺がビームにしろつつたのにわざわざ花びら型にしてしかも散らしたりしてさ! 無意味以外のなんだってのさ!」

『あのですね、私は天使ですよ? しかも上位の。そんな私がいきなリビームなんか出したら・・・なんでしたっけ? 雅? そう、雅に欠けるでしょ?』

「姫、精霊さん、早くしてください。学園の危機を救うためにここにいるんでしょう?」

「あ、ああ、そうでしたね。じゃあ小林さん、1100でいくよ!」

『1800』

「1300!」

『1600。これ以下だと足りません』

「わかったわかった! 1500! これでいいでしょ!」

『かしこまりました。では・・・』

『天使びーーーーーっむ拡散型！』

不毛な争いが終わったかと思うと、一気に精霊の羽の輝きが増した。

1500ニンフの輝きだ。

ちなみに1ニンフとは魔道精霊の霊力単位で、私たちがつかうのは1フェア。10年前に1ニンフが10フェアで統一されている。

ちなみに500フェア、つまり50ニンフ以上の霊力保有者で錬金核を作動させることができる様になるといわれている。

1500ニンフって・・・私が測定した時の数値が700ニンフでセンサーが850ニンフだったから、軽くそれを上回っている。

大学部の錬金術専門の人でさらにその中でも特殊訓練を受けた人が1600だ。

あ、ありえない。

精霊の羽の輝きがさらに増す。どうやら供給霊力をすべて羽根に集めたようだ。

光が一瞬、パツと花咲くように舞い広がった。

ローブの長い袖から少しだけ見える右手の人差し指をずっと野生種

に伸ばし・・・

羽から肩へ、そこからは爆発的に肘を経由して人差し指へと集まった。

するとどうだ。ローブの袖はめくりあがり、漏れ出ていた光は一つの球体へと形を変化させた。

『天使びーーーーーっむ拡散型！』

光が天から舞い降りる無数の雪のようにその手の先から舞い降り、その光の雪は結晶のごとき六角形を描く。

瞬間。

野生種に向かいその数多の結晶がやりへと形を変え、目にもとまらぬまさに光速で敵へと落ちた。

野生種へと落ちたのだと判断できたのは、その光の直撃を食らった多くの野生種が一瞬で爆ぜたからだった。

夢ではありえない熱風。

そして目を焼く金の光。

その光はまるで意志をもったかのように敵へ敵へと爆発を連鎖させていた。

・  
・  
・  
・  
・  
にしても、途中の雪は必要のない演出だったのでは？

## 第七話：ワルツ第七楽章（後書き）

ヨシ「オ～リ～オンをみ～るなら！」

ナナ「こ～ゆ～くらいにしゃさんせ」

ヨシナナ「アウト？アウト？オリレッポ！」

ナナ「・・・だめね」

ヨシ「うん。だめだね」

ナナ「はあ～。っと！気分を入れ替えて！今回は主役陣に持つてかれたけど、早速始めるわよ！」

ヨシ「でもさあ、すご～く久しぶりな感じしない？私自分のキャラを忘れてきてる気が・・・」

ナナ「ヨシ？そういうこと言ってる、名前が変わってたりするわよ」

ヨシ「なにそれ怖！だめでしょそれは！」

ナナ「そうならないためにも、レポートしていくのが私たちの仕事！」

ヨシ「だね。んじゃーさっそく！フリップどん！」

ヨシ、巨大なフリップを取り出す

ナナ「久しぶりに見るわ。そのネタ」

ヨシ「いいでしょ？んじゃー早速」

ナナ「はじめますかい！」

ヨシ「今回は、主要キャラクターの名前の由来！一応、この小説の主要メンバーには、各惑星の名前がゆいてるんだって！」

ナナ「ま、よーするにRPGという顔つきのキャラってわけね」

ヨシ「そゆこと！んで、【太陽】が日乃【水星】がセンサー、【火星】がアネさんこと薰うちで、【木星】がマドカ、【地球】が会長だね！」

ナナ「あつまーい！ヨシ、そんなサーチじゃあーあ？首飛ばされんよ！いゝか？よく聞け？【土星】がアリアって女の子で、【海王星】がカトレアさんっていう人だ！」

ヨシ「うっそ！そんなとこまで調べてたん！？ナナちょー暇じゃん！」

ナナ「まあ370日あればこのくらい・・・ってんなこといわせんじゃないわよ！」

ヨシ「でも助かったよ。やっぱ私たちは二人でひとつだね！」

ナナ「私は一人でも大丈夫なのよ！」

ヨシ「んー、でもさ、水・金・地・火・木・土・天・海・冥でいうならさ、まだ出てきてないのもいるってことだよな？」

ナナ「そーよ。もしかしたら私たちが！なーんてこともあるか・・・そーいや私フルネーム出てたんだった・・・」

ヨシ「へっへーん白鳥ナナコだもんね？私はまだ下の名前しかでてないんだな」

ナナ「うるさいわね！この御羊ヨシコが！」

ヨシ「ちよつとー！何で出すのよ」

ナナ「私たちは二人でひとつ。じゃなかったの？」

ヨシ「出番のためならショーがないじゃない！」

ナナ「あんたね・・・」

作者「えっと、こんな風になってます。まだ出てないキャラがたくさんいるので、きちんと出してあげたいな、とは思ってますよ！それでは次回で！」



## 第八話：ワルツ第八楽章

果たしていくつの精霊を消したのだろうか。

敵は、蠢く野生種は、オオカミの形をした精霊達は、初めから何もなかったかのように消えていった。

「すごい・・・」

羽がようやく光を失なった時、私は思わずつぶやいていた。

花のような香りが、あたりを包み込む。現実とは思えなかった。たとえて言うなら、お話の。

それも子供向けの絵本のような光景だった。

『ふう。疲れましたね。』

「まったくだよ。また無意味な演出しやがって。なんだよ！あの雪は！」

『必要な演出でしたよ。なかなかきれいだったでしょ？』

「霊力吸い取られた側としては、腹立つことこの上ない光景だったね」

『ふう。やはりあなたは文化的ではないのですね。いや、文芸的ではない、ですかね』

「無意味な力の非効率的な活用法が文化的だっていうのなら、願い下げさ」

目の前には、銀の光を纏う天使と、赤い光を纏う少年。夢だ。

そう、夢に違いない。

最終防衛ラインは、大混乱に陥っていた。  
目の前の光景が、八雲同様に信じられなかったのだ。  
空に浮かぶ金の円盤から落ちてきた光。熱量。それにより目に見える、莫大な霊力の波。

「な、な、なんだっただ！あれは！」

「八雲の言っていた、最終、兵器」

「つつたつて霊力数値はざつと見ても四ヶタ越えだつて！」

「私にもわからん！・・・だが、昔八雲から聞いたことがある」

「なにを？」

「この学園都市の地下には、天精戦争の遺産、強大な力が隠されている。とな」

「それがこれ？」

「ああ。おそらくは。だが私は一度も見たことがなくてな」

「いったいどういうものなのか。あの時代の科学力の遺物だとすれば、このようなこと造作もないのかもしれないが・・・」

「あーやばい、なんか思い出した！」

薫が大声を上げる。

「そーいや見たことあったな！そうだ、確か・・・」

「なに！それはどういうものだったんだ？」

「あー。えっと。八雲と学校内の点検をするときに、西棟開かずの間からいけるらせん階段の一番下、22ヶタのパスワード・・・その一番奥の研究所。うん、やっぱり見たことがあった！」

必死に思い出そうとする薫。混乱して記憶があやふやになっているようだった。私も同じように混乱をしている。急かすのは逆効果だろう。

「それで、薫。それはどういうものだったんだ？」

「黄色、いや、金色の古代ルーンで埋め尽くされた、強化ガラスのドームだったな。えっとー、そう。その中に、赤い籠手？みたいな、ああ、八雲は手甲っていつてたな」

「紅手甲のことか？」

「そう、それ！ってなんだよセンサー。知ってんじゃないか」

「いや、私の知っているのは天精戦争時末期に天空軍によって開発された兵器のことだ」

「ほらやっぱそれじゃん。地下に眠る天精戦争の遺産！」

「おまえ歴史習ってないのか？・・・ってそうだったな。数学以外はおまえは赤点だったな」

「すいませんね。特務科いなかったら落第で」

「だから私はもつと勉学のほうにも力を入れると・・・ん。まあいい。それでだ。その紅手甲だが、当時のほとんどの文献、さらには世界史の教科書にもこう書かれている。“使用したものの精神を侵食し、八割の被験者を廃人に追い込んだ”さらに詳しく言うと、“それをはめたものは激しい激痛、幻惑に襲われ、耐えきった者でも、その後赤い光を見ただけで発狂した”とな。現在より遥かに発展していた天空軍が不可能だったんだ。今の私たちが扱えるはずかない」

「でもそれ天空軍の切り札だったんだろ？だったら八雲がうまいことして発動させたんじゃない」

「本当に学がないというのは、ああ、もう！私は悔しいぞ薫！いいか、その紅手甲の能力は、コントラクトを疑似的に発生させるもの

だ。つまり、精霊魔導士がないものでも精霊の力を使役できるようにするためのものだ。だから仮に八雲が発動させたとしても、基礎も知らない人間にあんな細かな演出付きの力が使えるわけないだろう」

精霊魔導。私は何度か対面したことがある。戦ったこともある。だから、わかる。あれは錬金術とは根本的に違う。体の使い方、霊力の感覚、すべてが別物だった。

「さてよ、たしかあの時、八雲の隣に誰がいなかったか？」

「あのときって、ああ、空が赤く染まって、八雲が私たちの上を通過して行った時か？」

「そう、変な金色の円盤にのって」

確かに隣に誰かいた。

「だがあれは・・・」

「姫ちゃんだったな。そーいえば」

「ハックシユン！」

「ほんとうに緊張感のない人です」

『場の空気を読めないのが、この人ですからね』

「うるさいな。まったく・・・誰か俺のこと話してんのかな」

「能天気、ここに極まれり、ですね」

『おそらく悪い噂だね』

「うるさいよ！本当に！」

って、こんなことを話している暇はない。最初から感じていた疑問。

低級な野生種が普通錬金術師のいる場所に来るはずがない。ということ。たとえ群れでも、リスクの高い場所へはふつつ避けるはずだ。

「ねえ、小林さん」

『ええ、そうですね』

「あー、やっぱり気づいてた？」

『私は精霊です。あなたより、あちらのほうに近い存在ですから？？なんのことですか？』

その疑問の答え。ここで考えられるのは一つだ。

「何者かが・・・」

『野生種を使役し、ここを襲わせたようだということです』

「そういうこと」

八雲さんが息をのむ。

「可能、なのですか？」

『精霊魔導士、そうですね。ハイナイトクラス以上ならば、可能です』

「そんな・・・どうして!？」

「理由は分かりません。ですが、放っておくわけにはいきません」

「すぐに大学のほうへ連絡をしないと!」

『あー、非常に言いにくいんですが、私を感じますに、野生種使役を行ったのはマスターナイトレベルの人間でしょう。数からしても、質からしても』

「この大学のレベルは分からないんですけど、おそらく振り返ちにあうのが関の山かと」

八雲さんの顔が、また最初に戻っていく。悲しい、ひどく悲しい目。

「では・・・もう私たちは・・・」

「俺が行きますよ」

「え？」

「俺が行って、ぶっ倒してきます」

『かつこいいですね〜このええかつこしー』

「そんな、でも！」

「八雲さんは、すぐに学校に戻って、事態の収集を。俺のことは、まあ、特務科の二人以外には秘密でお願いします」

「ちよつと待ってください。私が離れば姫は！」

『2分』

「え？」

『2分までなら、私が食いとめます』

「無理です！大学の力でも太刀打ちできないほどの敵なんですよね？それを二分だなんて！」

心配、されてるんだな。

うれしい、本当にうれしい。でも、だからこそ、

助けたい。そう思える。

「俺を、見くびらないでくださいな」

『ですよ。結構強いんですから。まあ全盛期の力さえあれば、ここ

からでも無力化は可能なんですけどね』

「悪かったね。じゃあ、ここで降ろしますよ。」

「まってください」

「ん？」

ぎゅっと、手甲のついていない方の腕を握られる。

細くて、やわらかい。あつたかくて、汗で湿ってる。

ふわっと、彼女の香りが……。

「帰って、きてください」

顔は、無表情だけど、それでも、思いは伝わる。

やっぱりうれしい。うれしくてたまらない。

答えたい。答えて見せたい。強く、強く、強く思う。

心の強さはそのまま翼になる。

大空高く、今なら、どこまでだって飛べる。

どんな敵でも、負けない自信。

「まかせてください！」

敵は、逃げている。遠くの、森の中。

一瞬で、

そう、一瞬で。

おまえをやって、安心させる。



## 第八話：ワルツ第八楽章（後書き）

ナナ「誰も楽しみにしてない。でもやっぱり小説内で活躍できない私たちに出番をくれ！ってことで始まりますオリオンレポート！」

ヨシ「ナナ、長いー」

ナナ「うつさい！今回から、各キャラクターに一言！のコーナーよ！」

ヨシ「んじゃ行ってみよー！」

ナナ「ほら！早く！こつとこつち！」

日乃「え？なにこれ！なんでこここんなに暗いんだ！？」

ヨシ「いいのよ！ここは出番のない私たちの聖域なんだから」

ナナ「質問に答えなさい。1、好きな食べ物2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、ナナの好きなところ6、ヨシの嫌いなのところの計6つよー！」

ヨシ「ちょ、何言っちゃってんの！？」

日乃「えーっと、エビチリが好きかな。嫌いっていうか、苦手なもの、んー。人の視線。趣味は料理。特技も、料理・・・でいいのかな？うん。んで、ナナさんの好きなところは、ハキハキしていて、眼鏡がよく似合って、頼りがいがあるところ。ヨシさんの嫌いなのところは、ありません。人を悪くは言いたくないんで。自分言われて

死ぬほど苦しかったし。代わりにいいところは、元気なところ。あと、以外とおっとりしているところかな。短めの髪もよく似合ってます。以上です！恥ずかしい！」

ナナヨシ「うつ・・・」

八雲・薫・美奈子・アリア・カトレア「……………プ  
チッ……………」

日乃「え？なに？え？ちょっと！やめ、ぬわっ！死ぬって！ぎゃ、ぎゃあああああああああああ」

小林『おわりまーす（ニク）』

## 第九話：ワルツ第九楽章

男達は、走っていた。

どうやら私の作り出した結界により、うまく霊力が使えないらしい。まさかあの時姫からもらった霊力を、野生種だけに使うことなどしない。

あんな低級には、演出付きの天使ビームでも、霊力半分で足りる。

相当焦っていることだろう。

自分たちの身内ですら使えるものの少ない固有精霊が現れたのだ。しかも別導召喚で。

八雲という少女は気づくはずもないだろう。

姫のつかった術は、魔道精霊たちの間では、姫が言う以上に困難なことであると。

それほどに、姫は才能に溢れている。

だからこそ、私の主足るのだから。

私達のいる精霊界は、個をもつものと持たない者がいる。

持たないものはただ、空気のようにただよい、門が開けばそこに吸い込まれていく。

しかし個をもつもの、ここでは固有精霊（つまり私なのだが）は、滅多なことでは人間界に降りることはない。

自分の中の霊力が震えた時、ただその時人間界へと降りる。相手のだれであろうと、関係はない。ただ、己の霊力にのみ忠実なもの。

それが固有精霊なのだから。

固有精霊の姿は様々だ。人間の神を真似ているものがほとんどだが、私のように人型をとっている者は意外と少ない。

自分たちは人とは違う。それが精霊たちの根っこにあるもの。つまりはプライドだからだ。

精霊界は四体の大精霊、イフリート、ウィンディ、ノーム、シルフと、精霊王オーデインによって統治されている。といっても、群れるという概念が希薄なのが固有精霊だから、普段は寝てるか興味のあることに没頭していることが多い。

私は、人という者が非常に興味があつた。彼と出会つた時も、純粋に震えていたこともあつたが、それ以上に興味を惹かれたからかもしれない。今となつてはどうでもいいことだけど。

「聞いてないぞ！なんなんだあれは！」

「し、しらねーよ！とにかく早くここ出て、本部に連絡だ！」

精霊の五感は人のそれとは格が違う。

全部聞こえている

クッククク。

逃がしませんとも。

簡単には、ね。迷路のゴールはひとつだけ。

さあ、はやくそこへと。  
導かれてしまえばいい。

残り時間、2分

現在位置、学園都市、八雲の霊力フィールド圏内離脱直前

「あんな大きな魔方陣書くから、逃げ遅れちゃったりするんだよね」  
「と、申されましたも。普通はあれほどの野生種を使役するんですから、規模が大きくなるのは当然ですよ」

「にしたってやりようがあるじゃない？ 霊紙に書いたのを使うとかさ。とにかく、こんな正直に地面に書くなんてありえないって」

霊紙とは、霊力を吸う特殊な紙だ。

「しかたがないのでは？ 地面に直接書くのが一番効率よく力が発揮できますし。ま、それ以上に舐められていたのでは？」

「まあ俺も向こう側にいた人間だけど、あんまりいい気はしないな」  
「そうですか。ええ。そうですね」

「なにその笑顔！ 腹立つ！」

「さあ、フィールドから出ますよ。ここからは、私がサポートに回ります。」

「よろしく！」

「おっと、追いつきますよ。あ、でも敵さんたち、私の霊力封鎖領域から出ちゃいましたね。どうします？」

「実力で倒すよ。というか、さては結界けっこう薄く張ってたな？」  
「残り、1分35です」

「うお！ やばい！」

足に吸いつく円盤へ、さらに霊力を送る。  
森を通り越し、いよいよ敵の姿が見えた。

白いローブ。白い帽子。黒いズボン。

シリウス学苑で何度も目にした、精霊魔道士の正装。

背中には、赤いバラと金の十字に、その周りを囲む黒いイバラの文章。

二人のうち、先に行く大きいほうの男がこっちに振り返った。

「ちくしょう！こーなりや！」来たれ炎よイフリート！火炎陣！」  
「やるしかねーか！」来たれ風よシーフ！暴風陣！」

二人の腕が光り輝く。ローブの先から放たれる魔方陣。

その中心から、靈氣を変換し、靈力へと姿を変え、さらに形を整えられた、炎と風が舞い起こる。

小さいほうが出した風により、勢いを増した炎が嵐となって足元を焦がす。

「一人は戦闘不能に。もう一人は殴り飛ばして連れて帰って吐かせる。いくよ！」

『了解です』

小林さんから力を借りて、自分の靈力を直接術に変える。

固有精霊に術を使わせても、あいつらに直接ダメージを与えられない。ここからは俺の出番ってね！

「来たれ光よ大天使！ビーム」

光速。中級クラスの炎も風も、干渉することのできない力。

ズドン。音が後から聞こえてくる。ブワッ。風がさらに後から唸る。

光の落ちた先には、二人の男が気絶していた。

小林さんが下に降り、二人の額に手をかざす。記憶を消すためだ。もちろん、もう一人のほうは完全には消さない。しゃべってもらわなくてはいけないからな。

『お見事』

「ありがとさん」

『姫、残り20秒です』

「は？えええーい！帰るよ！」

『了解』

人二人の重さは、霊力の量でカバー。

ギリギリ。残り1秒で無事に八雲さんの霊力フィールド内へ帰還しましたとき。

「八雲さん、どうでしたか？」

「よ、よく考えたらに、二分そこで片付くわけがないで、しょう。体外、れ、連金でようやく入口についた、所ですよ」

真顔でゼーハー言っている八雲さん。て、鉄面皮！

『姫は気が利きませんからね。まったく。レディーを走らせるとは』  
「すいませんでした。本当に」

「い、いいですから、そこにいる男が、あなたの言っていた魔道士です、か？」

「はい。今から吐かせようと思います。早くしないと、残りの仲間が気づいて、本部へテレポーターションされてしまいますから。そうなれば、俺たちに追うことは不可能になります」

「な、ならば学園の外にある野外演習場を使いましょう。あそこなら、今誰も来ないはずです。あまり他の人間に見せるべきものとは思いません」

「ですね。小林さん！その男をその場所へ。八雲さん、俺につかまってください」

ふわっと、空高く浮上。下を見ると、警報の解かれた学校は、互いに喜び、笑いあう生徒たちでいっぱいだった。ああ、守れた。よかった。

「そこです」

学園から少し離れた農村地帯にぽっかりと空いた空間。野球場がいくつも入りそうな広大な土地だ。本当に、この土地には違和感がない。線路の延びるのどかな農村地帯。そこにいきなり東京を切り取ったような大都会。なんじゃこは？と思わざるをえない。

地図上は群馬だが、なんだかなあ。非現実的過ぎる。これなら、前いたシリウス学苑のように、出島のように海の上に作られているほうが納得がいく。

「その監督室を使いましょう。こちらです。鍵は私が持っていますから、少し待ってください」

広大なグラウンドの端にある、まるで前線基地のような無骨な建物。中は、たとえば言うなら体育教官室のようだった。



「おい、起きろ！」

顔をたたくが、目覚める気配はない。

『私が起こしましょう。なに、ナイトメアを見せれば、造作もないことです』

すつと、手を額に差し出す。

「うう・・・うわぁう・・・あああああああああ！」

・・・どんな夢を見せたんだ？いや、言わなくていい。俺も夢に見そうだから。

「おい、なんであんなことしたんだ！？言えよ！」

「う・・・つく・・・へ、へへへっ」

さつきからずっとこの調子だ。俺は元が小心者だから、こんなことには当然慣れてない。

イライラするが、もうかなりダメージを与えてしまっている。これ以上やったら、一生しゃべれなくしてしまうかもしれない。

「姫、私に任せてください」

「え？でも・・・」

「させてください」

うーん。でもそれはどうなんだろうか。

『任せてみましょう』

「んー。そうだね。俺がやってもこいつ何にも言わないし」

八雲さんは、俺の霊力によって組み伏されている男の前に立った。

「痛いのと、すごく痛いの、どっちがいい？」

「は？そ、そりゃ、痛くないほうが」

「すごく痛いのがいいんですね。では」

すっと、八雲さんは小林さんのように、男の額に手を伸ばした。

「体外連金。夢魔」

「ああ？なにをやったって俺ははかねーぞ！」

光が男の目に入る。口に入る。耳に、鼻に、毛穴に侵入する。

「な、何をやったって・・・ああ・・・ああ・・・ああ・・・あああ  
ああ・・・」

さっきまで俺たちを睨みつけていた男は、もう叫ばない。うつろな目で口をあけ、よだれをたらし、鼻水をたらし、涙を流す。

「あああ・・・な・・・た・・・たふけて・・・」

俺は、目の前の光景に気絶しそうになった。

八雲さんはただ男の額に手をかざすだけ。それだけだ。攻めは何もしていない。ただ黙った見ている。人間じゃない瞳。それ以外は何

も変わらない。でもその瞳が、まるで彼女を別人に見せていた。男は、全身をくねらせ、まるで虫のように地面に這いつくばる。

「ああああ．．．わはった．．．しゃへる．．．わはった．．．たふけて．．．たふけて．．．たふけて．．．しゃへる．．．わはった．．．」

『催眠は、連金術でも可能．．．』

小林さんの声で、はっと、自分が戻ってくる。

「ちょっと！八雲さんなにやってんですか！？」

「錬金術流の拷問術です。普通ならこんなにひどくないはずなんです．．．天使さんの悪夢のせいで、精神的にガタがきていたのかもしれない」

「錬金術流の拷問術？なんすかそれ！」

「一種の催眠です。目に、直接霊力を注ぎこみ、相手に幻想を見せるものです」

「そいつは、いったい何を見てるんですか？」

「恐怖です。自分が、一番怖いと思うものです」

「えげつな」

『でも、精霊魔道のほうにもありますよね？そういった術は』

「あ．．．あれも相当えげつないよね。っていうか俺催眠系は嫌いなんだよ」

『昔死ぬ目に逢いましたしね』

「そーそー」

「．．．しゃへる、しゃへる」

「しゃべるのですね？しゃべるのなら、解放してあげますよ。ソレのいない場所へ。解放してあげますよ」

「しゃへる．．．おれ、たちは、この、ばしょ、ちか、きょうだい

な、ちから、しらへに、き・・・た・・・」

「この場所の、地下にある強大な力を、探しに来たと？」

「そうは・・・そほだ・・・」

『それは一体？』

「しらはい・・・おれはちは、ただ、しらへると、いわれは、だけは」

「それをどうやって調べに来たんだ？」

「れいりよくを・・・そくてい、する。こ、こんらんひ、じょうじへ、ちかに、もぐる。そして、はかる」

「なるほどね。要するに、この学園の地下に、霊力測定可能な何かがあるわけだ」

「そうだ・・・」

「もういいでしょう。八雲さん、解放してください」

「・・・こいつの、せいで・・・」

空気が、変わった。ドンっと、押しつぶされそうな、中身をえぐられるような、痛み。体が、震えた。

『いけない！姫！八雲さんを止めてください！』

小林さんの顔色が急に変わった。

「八雲さん？八雲さん！」

「・・・こいつの・・・そう、ですね。解放しましょう」

だが八雲さんは一向に手をどけようとしない。いや、それどころか光が膨らんでいく。目は光を失い、鈍く光を放っていた。

その光は、紫色。空気に解けるように広がる。

この程度の力なら、自分は過去に何度も対峙してきた。だが引つかかる。過去の、自分が。過去の。あの、悪夢。

紫の空気は男を包む。

[illegible]

男は、発狂した。エビのように体を折り、蛇のようにうねった。顔は、元の顔がわからないほどに歪み、体中の体液という体液が漏れ出し、あたりに異臭を撒き散らしていた。耳をふさぎなくなる。声。

「や、止めるんだ！八雲さん！八雲さん！小林さん！早く止めよう！」

『わ、たしにはふ、不可能です。今の彼女のその力は、私たち精霊にとって猛毒。こ、ここに立つことも、もう・・・』

ガタツ、八雲さんが両手を男へと伸ばす。

「やめるんだ！早く！早く！八雲さん！八雲さん！」  
「ええ．．．わかつてる．．．わかつてるわ．．．やめれば、いいんでしょう？」

紫。埋め尽くされる紫の光。

八雲さんの、顔が、凄絶にほほ笑んだ。

無表情が壊れていた。

小林さんが、あの小林さんが膝をついていた。

男はついに自分の体をかきむしりだした。俺の拘束は既にかき消されていた。紫の光の束に。

肩を揺さぶっても、まるで彼女の体は鉄になったかのように、動かなかった。

目は、もう何もうつしていない。口からは、「わかつたるわ・・・わかつてるわ・・・」とつぶやくだけで、力を止めようとはしなかった。

紫色に染まる彼女の腕。風が舞い、周りに置かれた家具、教卓からは、悲鳴のような軋みが響いていた。

誰だ。彼女は、誰だ？わからない。何が、いったい何が！？

「ひ、姫、力を、使ってください！彼女はもう彼女じゃない！戸惑ってはいけない！取り返しがつかなくなる前に！早く！彼女を守るためです！このままでは・・・は、はああううはあつぐあああつ早く！彼女がっ消えるまえに！早く！」

「八雲さん！八雲さん！止まって！お願いだ！」

力を、この力を、守るべき人に使うことが、俺にはできない。でも止めるには使うしかない。

なぜ、なぜ力を、使わなくてはいけないのか！

「くそつ・・・“来たれ光よ大天使！眠れ！”」

俺の伸ばした右手のから、光がまっすぐ八雲さんへ延びる。

止まれ、止まってくれ。

光が届く前に、彼女の左手がそれを握りつぶした。

「効かない、効かないわ。そんな力で、ワタシを止める？」

「そんな！」

『違います！あなたは無意識に力を抜いている！早く、か、彼女が、とりかえしのツ力ないコトニ』

「小林さん！そんな体が！消えてるよ！なんで！」

小林さんは、もううずくまっていた。羽がひどく震えている。目からは、血のような涙がほほに線を引いていた。苦しいのだ。あの小林さんが、本気で苦しがっているのだ。

男はもう動いていない。目は開ききり血走っているのに、体はピクリとも動かない。

やばい、やばい、やばいやばいやばい！

『私のことはかまいません！ハヤク！ちカラをかノじょ二！トメルのは、あなタニしかデキナイ』

俺も、呼吸が苦しくなってきた。目が、かすむ。回る。視線が定まらない。頭の中が、ぐちゃぐちゃになる。

「わかってるわ、やめればいいんでしょう？こいつの頭が壊れたら、やめるわ。ええ、そうよ。こいつの頭を壊すだけよ」

彼女が、また笑った。

人じゃない。その顔を見て、初めて彼女が彼女じゃないことを、心が理解した。

とめるだけじゃ、だめだ。彼女を、八雲さんを、取り返さす。そうしなければ、全部、全部消える・・・

「あなたは、俺の知らない、誰かだ！」

「ワタシよ。お姫様。八雲よ」

クスッ。その笑顔、その目。

彼女の体で、そんな顔をするな。そんな目をするな。そんな力を使うな！

「消えろ！出ていけ！“来たれ光よ大天使！破邪！顕正！”」

光が部屋を埋め尽くす。

紫は消え、白が膨らむ。

「あははっははっはははははは。消えない。消えてあげない。だって私が、私がヤクモ」

「消えろ！返せ！八雲さんを！返せ！」

「私が、ヤクモ。八雲はワタシ。きえ・・・な・・・い・・・  
・あ、ああ、まだ・・・きえて・・・あげ・・・」

八雲さんはもう一度、ほほ笑んだ。今度はこちらを見て。その目線。まっすぐ射抜かれた。腰が砕けそうだった。



「消えろ！消えろ！消えろ！さっさと消えろこのやろおおおおお  
おおおおおおおおおおお！」

八雲さんの体は、ようやく芯が抜け、崩れ落ちた。

慌ててそれを片手で支えながら、光に右手を突っ込む。

羽の毛が抜け落ち、うづくまり、半透明になる体。

「小林さん！今力を！」

伸ばした右手に光は収縮し、球状の形に落ち着いた。

「小林さん！さあ、はやく！」

小林さんにむかってその球を放つ。

光はそのまま小林さんを包み、淡く光って消えた。

『ああ・・・はあああああつくつ・・・』

「小林さん！大丈夫？ねえ！小林さん！」

うずくまっていた小林さんの羽に、また光が灯った。

小林さんは、ふらつきながら、ほほ笑んで立ちあがった。

『あ、ありがとう、ございます。八雲、さんと男は？』

「八雲さんはこの通り。眠ってるよ。でも、男は」

男のいた場所には、なにもなかった。流れていた血も体液も、俺の  
霊力が浄化してしまっていた。

「光が満ちる寸前に、男の体は宙に消えたよ。俺の力が、結界を破ったのかも。多分小林さんの結界が完全にゼロになったから、向こうから干渉されて、そのまま転送されたんだと思う」

『私の結界を破るほどの力を使うとは。姫は相変わらずすばらしい霊力ですね』

へたり込んだ俺は、なんとか力を振り絞って、腕の中で眠る八雲さんを抱き寄せた。

「うん。大事になる前に止めてよかった・・・」

『とりあえず帰りましょう』

「そうだね・・・でも、俺もう動けない」

『私が送りましょう。私もギリギリですがね』

「ごめん・・・ありが・・・とう」

俺の意識は消えた。

私の腕の中で眠る二人。

やさしく、八雲を抱きしめる姫。

私の、愛しの姫。

『彼女の力・・・恐らくは、死霊・・・』

そんなはずはない。私の知る限りの知識がそう告げる。  
でもあの苦しみ、痛み。  
体に残った力の残滓が、

彼女が死霊のそれだと、訴えていた。

死霊。死んだ人間の出す負の霊力。人にとっては毒だが、精霊にも  
かなりの猛毒。

でも、八雲は生き人のはず。

なぜ？

・・・いや、それは後々わかることでしょう。

むしろ、そのほうがいい。彼女が精霊のほうが、いい。

今回は、彼女の“あの力”は、私とあの男に向いていた。

だが今後、それが姫に向いたとき。

相手が精霊なら、命を賭して止めれるから。

姫を、彼女は愛し初めている。

姫を、私は愛している。

姫を愛する者は、私にとっても愛おしい。

それが、精霊の、愛。

止めれば、いや止めなければ。

人の愛は、美しい。

精霊にはない、愛。

慈悲でも、気まぐれでもない、対等な愛。

私は、愛が欲しい。

人の、愛が。

誰かを、人のように、愛したい。

愛はないけど、知ってるから。

欲してしまう。

人への興味。尽きることはない。

## 第九話：ワルツ第九楽章（後書き）

ヨシ「え？これ？んー。ボウズみたいな、まだほんの小さな子供にやあ教えられない職業さ・・・オリオンレポートって、知ってるかい？」

ナナ「あんた誰？っーかそんな不健全なコーナーにするな！」

ヨシ「へっへっへーじょーちゃんいい体シテマンナー。おっちゃんとかよつと【オリオンレポート】しない？」

ナナ「エロイ言葉隠すみたいに使ってんじゃないわよ！」

小林「というより、私を呼ばれたのはお二方ですか？」

ヨシ「あ、そうですそうです！前回から、各キャラクターから一言！ってコーナーやってて、1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃の好きなところの計5つです！さーどうぞ！」

小林「あら？前回と質問が変わってますが・・・」

ナナ「本人に自分のことどう？なんて聞けるわけないでしょ」

小林「そうですね。答え、でしたか。好きなものは愛のある人間。嫌いなものはそれ以外の人間。趣味は姫をからかうこと。特技は姫へと伸びる愛の線を、この目でしっかりと見ることができことですね。姫の好きなところは、愛を持っているところでしょうか。あ、ちなみに姫へと伸びる愛の線なんですけどね、一番ふといのは・・・

」

女全員「……プチッ」

小林「ん？おやおや。みなさんお揃いで。え？恥ずかしいからやめる？言うんじゃない？御冗談を！こんな楽しいこと止められますか！え？消す？面白いですね。この私を消す、などと……ってカトレアさま！それはいけません！そんな、そんな物語の最後のほうで出てくるような技をお使いになられては！みなさんも！コメディーだからって、死ぬ時は死ぬんですよ！……まったく。逃げるが勝ち！ですね」

日乃「感想、お待ちしておりまーす。ではまた（ペコリ）……って小林さん！こっちくんじゃねーよ！おい！来るな！来るなって！わあああああああああ！」

## 第十話：ワルツ第十楽章

「薬はもう効き始めてるはずですよ」

「すみません、ありがとうございます。もう、起こしても？」

「ええ。起こしてあげてください」

「八雲、おい八雲！起きろって！朝だぞー！？」

誰かが私を呼んでいる。八雲。それが、私の名。大地八雲。ダイチヤクモ。17歳。

そのはずだ。それで、あっている。

「八雲！目を開けないか！八雲！」

また誰かが私を呼ぶ。

八雲、と。そうだ。私が、八雲・・・。

「か、おる？・・・みなこせ、んせ」

薄く、ぼんやりと目に色が映る。

顔が二つ見える。

「八雲！起きたか！よかった！本当に、よかった・・・」

「泣くなよセンサー。もらっちまうたるお？・・・っとにこの鉄板面は心配掛けやがって！」

目を、完全に開く。そこには。  
一番信頼している人たちが、寝ている私に覆いかぶさって泣いていた。

「まったく。一人でなんでもしようとして！いつも言ってるだろう！もつと私たちを頼ってくれと！」

「ほんとだ！いつも一緒にいるくせに、こういつときだけ離れちまうなんて！心配しまくったぞこの鉄仮面！」

「ごめんな、さい」

私にも、涙が流れている。

二人と一緒に。一緒の涙。

前が見えない。

しばらく、三人。何も言わずに、何もせずに。

「日乃がおまえを連れてきてくれたんだぞ。まったく。でもこの程度でよかった」

「そうだぞ。まさかお前が夢魔程度の錬金術ミスちまうなんてな！ケラケラケラ」

夢魔をミスした？いつ？

記憶が、霞んでいた。覚えているのは、姫につかまり野外演習場へ行き、鍵を開けて・・・男の前に立ったところまでだ。

「詳しい事情は、おまえが目が覚めてから聞こうってことになってる。こっちとしてはゆっくりしてほしいんだが、事態が事態だ。悪いがすぐに生徒会室へ行かなくてはならない」

「あの、姫は？どこに・・・？」



「姫ちゃんなら、八雲を預けてからすぐにどこかに行っちゃったよ。目が覚めたら連絡してくださいってな。なんか、連れがヤバイみたいなこと言ってたけど、おまえら以外にだれがいたんだ？」

・・・大天使、ミカエル、小林さん。そこははっきりと覚えてい  
る。なんだかあやふやだ。私が私を見ているような、私がその私を  
見ているような。

なんだろう。あやふやだ。本当に、自分が自分でなくなったかのよ  
うな、疑問。

「おい、大丈夫か？ やっぱり落ち着いてからのほうがよかったか？」

先生が屈みこんで覗き込んでくる。

「いえ、大丈夫です。すぐに生徒会室へ向かいましょう。あ、でも  
最初は私たちだけでお願いします。私自身、すこし整理をしたいの  
で」

「うつし。わーった。姫ちゃんは？ 呼ぶか？」

「呼んでください。彼が深くかわっています」

「なんだって？」

「詳しくは、生徒会室で、姫と一緒に」

『起きて、ください。姫。起きてください』

瞼の上から強烈な光が照らす。

なんというか、眼を開けた瞬間に失明してしまいそうな明りの量だ  
った。

起こす気ないだろ！なんだよ！俺を襲ってるのか！

「ああ！もう！起きるから！目が焼ける！」

『あらまあ、すいません。起きていないかと、思いまして』

起きてるよ。ったく。

頭が徐々に覚醒を始める。

ここは？周りを見る。そうか、学園都市の屋上、か。

「そうだ！八雲さんは？」

『隣で寝てらっしゃいますよ。さて、どうします？』

隣で、ゆっくりと眠っている八雲さん。

こうしてみると、外傷もない。顔は、無表情に戻っている。それはどうかおもうのだが、今はよかったと安心できる。

「一旦、薫さんたちのところに届けたほうがいいかもね。僕が病院に連れて行ってもいいけど、説明するのが面倒だし」

『となると、問題は記憶でしょうかね。あのときの記憶が、果たして残っているだろうか、ですね』

「うん。どうしよう？記憶を確認するにしても、起こさないと無理っぽいね。でも今起こすのは・・・」

『面倒ですね。一旦外にまかせて、こちらでカバーストーリーを先に作っておくほうが何かといいでしょう。起きた彼女も、記憶があのやふやな状態であるならば、そうかと納得できるでしょうし』

「だよね。にしたって、記憶が残ったままだとそうはできないよね」  
『消しましょうか？』

「無理だと思う。もう八雲さんは小林さんの力を間近で感じてしまってるし」

『でしたね。抗体が出来てしまってますね』

精霊の力。人に影響を与える力。深層心理に働き掛ける力は、人に干渉してしまう。

薬と一緒に。力は体内に侵入し、効力を発揮するが、一度使われれば二度目はさらに力を強くしなくてはいけない。これが催眠系の弱点だ。

だから催眠系の術を使うものは、極力霊力を外に出さないようにしなくてはいけない。

小林さんは八雲さんに力を浴びせてしまっている。

俺に至っては直接霊力をつかってしまった。

もうこれ以上の強い力は相手の精神を破壊しかねない。

「それに八雲さんにこれ以上、霊力を使いたくない。でもどうしよう」

『簡単な術をかけて、一旦記憶をあやふやにってしまうのは？体外からの干渉でなら、不可能ではないでしょう？』

「・・・だね。それしかないかな。わかった。俺がやる」

『いいえ、私が』

「いいよ。したくないからって、それを小林さんにさせるのは間違ってる。俺が起こしてしまったことだ。俺がしっかりけじめをつけるよ」

『姫のせいではありません。それは大きな間違いです』

「いいや、俺のせいでもあるよ。考えなしだった。確かによく知らなかったからかもしれない。けど、やっぱり俺のせいでもあるんだと思う。あんな事態になったんだ。誰だって、原因を憎む気持ちはある。八雲さんはとくにそれが強かったんだ。気づくべきだった」  
『わかりました。いや本当に姫は変わらない。うれしいことです』

「変ったよ。昔と一緒ににはしてほしくない」

『いいえ。変わってません。根っこは同じです。私の霊力を震わせ  
た、愛あふれるその心』

「・・・」

『照れない、照れない。さあはやく術を。遅くなれば事態は悪化し  
てしまうかもしれません』

「わかった。八雲さん、すいません。このことは必ずあとで償いま  
す」

人が人に霊力をつかう。大切な人に、守りたい人に。

「・・・ “来たれ光よ大天使！混乱せよ！”」

これで大丈夫なはずだ。起きた瞬間は、記憶が混乱してるはず。記  
憶が正常に戻る前に、覚えているかを確認すればいい。覚えていた  
なら、そのときは相談しよう。話し合えば、わかることもあるはず  
だ。たとえ八雲さんの苦痛にしかならないとしても、あのときあい  
つは言っていた。「私が八雲」・・・二重人格？そんなレベルの話  
じゃない。中身が、変っていた。完全な別人だった。

「よし。弱めにかけていたから、目覚めたらすぐに確認しとかない  
とね」

『はやく、その薫さんたちのところへと連れて行って来てください』

「そうだね。あ・・・」

『どうされたのですか？』

「ずっと八雲さんと一緒だったから気づかなかったけど」

『けど？』

「紅手甲って、外れるの？」

試しに留め具をはずしてみる。すると案外、簡単に外れた。

でも腕には、噛みつかれたような傷跡が残っていた。

「痛い、痛いとは思ってたけど……。俺、治癒の錬金術なんて知らないよ?」

「・・・私にはその傷を治すほどの霊力は残っていません。送っていただきたいのですが・・・」

「無理だよ。どっちにしろ、もう俺には霊力が残ってない」

立つてるだけでフラフラだ。

『血は止まってますね。では隠して、八雲さんをお渡しした後に救護のほうへ行ってこられては?』

「そうする。あ、小林さんはどうする?」

『私はここで隠れていましょう。なにかあったら、霊力で知らせてください』

「わかった。全部終わったらむこうに帰すね」

長袖の服、袖が破れてるけど・・・上着は教室か。ってここはどこだっけ?

『ここはあなたの通う学園の屋上ですよ。あなたの記憶から、割り出してみました。ちなみに薫さんと美奈子女史は、この一階にいらっやいます』

「ありがとう!じゃ行ってくる!」

「薫さん、先生!」

「おお!姫ちゃんじゃねーか!おまえ避難所からフケたそうだな!

どこ行つてたんだー・・・って八雲じゃねーか！」

「なに！日乃！？八雲！どうしたんだ？なにがあつたんだ！」

二人は正面玄関前で生徒たちの誘導をしていた。

いきなり大声をあげたから、周りの生徒たちも驚いてこつちをむいている。

「すみません。詳しい事情は後にお願ひします！とにかくや雲さんを！気を失つてゐたいなんです！」

「なに！薫！すぐに保健室へ運べ！それで日乃、いったい何があつたんだ！？」

「あの、八雲さん、夢魔っていう錬金術を使おうとして、いきなり気を失つちやつたんです」

「夢魔？いつたいあんなものを何に使つたんだ！？」

「詳しいことは、後でお願いします。とにかく今は八雲さんを！俺はもう一人の連れのほうへもどります。目が覚めたら携帯に連絡を！じゃ！」

「おい、待て！日乃！日乃！」

俺はすぐに逃げ出す。幸い、誰も追つてこなかった。

ま、追える状況じゃないしね。

『私も、ずいぶんと無茶をしたものですね・・・』

固有精霊の心臓とも言える、精霊核をむこうに置いたまま、あれほどの霊力の行使をするとは。

核があればこの程度なんともないのですがね。

というか核があれば、わざわざ姫から霊力をもらうこともしなくてよいのですが……。

持つてくるべきでしたね。今更になって後悔するとは。

姫にはなんとか隠せましたし、まあよしとしておきましょう。

『ぐっ……存在が、揺らぎ始めましたか』

消える。この体が消えてしまう。

まあ、消えてもむこうの核からまた私は生まれるのですがね。

『ですがこの私が消えてしまえば……姫と契約をした、私が消えてしまうということ……』

生まれ来るであろうもう一人の私。でもそれは私だって、私ではない。

リセットされた私。

『それは……困るのですが……』

「……小林さん？」

振り返ると、呆然とした姫が。

見られる前に、そっとバラの香りとともに消える予定でしたのに……

『無理をしすぎました。どうしましょう？』

「まって！すぐにむこうへ戻すから！」

『止めてください。霊力の借金は、身を滅ぼすだけだと言ってるでしょう？』

「大丈夫だ！小林さんが俺の霊力を抑え込んで、それで俺がむこう

に帰す！それで大丈夫だよ！」

『もうよいのです』

「そんなのはだめだ！俺が勝手に呼んで、さんざん助けてもらって消えるなんて！」

『呼ばれて答えたのは私の責任でしょうに。・・・馬鹿ですね』

「ふざけないでよ！消させない！絶対にむこうに帰す！」

『むこうに核がありますから。消えても死ぬわけではありません』

「でも、契約は消えちゃうんでしょ！？」

『だから、困りましたねーと言ってるんです』

「いやだ、死なないからって、目の前で友達が消えるのを見てろって？」

『友達？』

「そんなのはいやだ！消させない！いくよ！小林さん！」

私が、友達？

それはちよつと友達少なすぎやしませんか？姫。

いよいよ力が抜けていく・・・。  
消える瞬間。



「いや、まさか本当にいるだなんてねー。君、精霊かい？」

感動の瞬間に、邪魔ものですか……。

「誰！？」

「誰って、研究者ですよ。この大学の」

「大学の研究者？」

「ええ。ここの大学院のほうに研究所を構えてるものです。分野はね、精霊と錬金核の研究なんだけどね」

その人は、男だか女だかよくわからない人だった。

男にしては声が高いし、女のような肉のつき方をしている。でも、女にしては身長が高いし、手足も長く、骨格が男に近い。なにより顔だ。男のように鋭い目つきを女のように緩めている。

笑顔は繊細で美しい。でもどこか野生的な、情熱に駆られているような、そんな雰囲気を出している。

服はスーツの上から、白衣を着ている。胸があるように見える、けど……。

「それが？俺になんの用？」

「いやね、研究所のリーダーで、野生種の霊力の波長を追ってたら、いやに大きな霊力を感知してね。一発で気づいたよ。固有精霊だって。だからずっと追ってたんだ。で、ここ止まったから、あわてて追ってきたってわけ」

この人、固有精霊を知っている！？

「君といっしょさ。日乃紅姫クン。私は元、魔道精霊士だった人間だ」

「えっ・・・」

『ほう。よく、知っていらっしゃる。で？この感動のシーンに水を差して、何が目的なんですか？』

「目的？そうだね。今私は興奮しているんだ。やっと、実験対象が・・・おっと。いけない。君たちを助けようと思ってね」

「助けるって・・・小林さんが助かるの!？」

「おいおいおい。よくその精霊を見たまえ。存在の揺らぎが止まってるだろう?」

『あなたの右手の中のもののおかげですか』

「よく気づいたね。そう、これさ」

研究者と名乗る人の手には、小さなペンダントが握られていた。

「これは研究が初めて成功したときに作ったものでね。記念に一部をペンダントにしたものなんだけど、なかには人工の精霊核が入っているんだ」

人工の精霊核だと!？

「そんな・・・馬鹿なことか!」

『いいえ、姫。あれは紛れもない精霊核です』

「うそだ!どうやって!」

「君の持っている紅手甲の技術の一部さ。最終的には、それと同じものを作るのが私の研究目標でね。この人工精霊核は、その過程で生まれたものだ。まあ、実用性には欠けるけど、これを錬金核に応用できないかと思っててね」

「なんでそのことを！」

「私がずっとその紅手甲がどうしてもほしくてね。ずっと、ずっと目に見えるように監視し続けていた。そしたら君たちが持つて行くじゃないか。いや、焦ったよ。でもさらに驚かされたのは、君がその紅手甲を使いこなしたことさ！」

「そんな、馬鹿な・・・」

「どうだい？この精霊核があれば、その精霊さんは助かるよ」

『・・・いつたい、何が目的ですか？』

「目的ってほどじゃない。ただ、紅手甲をはめたときの君を少し調べさせてもらえればいいのさ。あと、その精霊さんのこともね」

『先ほどあなたは、私を追ってきたとおっしゃいましたね。ですが本当は姫の紅手甲が狙いだ、とも言った。でもそのどちらでもない。どちらもどうでもいいと思っているはずだ。この時点であなはうそをついている。いや、それだけじゃない。あなたはペンダントを、記念に作ったと言っていた。でもその中の精霊核は、できてまだ時間がたっていない！うそが二つ。あなたは信用できません。あなたに頼り姫を渡すくらいなら・・・消えたほうがマシですね』

「私があなたの霊力を追ってここまで来たのは真実だよ。それに、研究はさつき完成した、とすれば？興奮して言っていることの前後が、ひっくり返ったとしてもおかしくないんじゃない？」

『それも、うそです。あなたは興奮などしていない。気づいていないようですから言いますが、あなたの目が、さっきから姫をとらえて離さないのですよ。まるで久しぶりにあったかのような目、そして値踏みする目。本当のことを言いなさい。本当の、ことを』

「いやいや。本当このことね。そうでだね。いいよ。紅手甲の研究。それだけだ」

『この期におよんでまだ・・・』

「もういいよ！小林さん！助けてもらおうよ。この人のおかげで、いま小林さんは消えずに済んでるんでしょう？なら、俺はそれを信じるよ。助けてくれるんだよね？」

「ええ。助けますとも。絶対ではないけども、この大きさの精霊核で揺らぎを止められたのであれば、成功する確率は極めて高いと思われるよ？」

信じよう。それしか小林さんを消させない道はない。

『姫、こいつは信用できません！私など、消えてもよいのですから！おやめください！』

「小林さん。僕が主だ。僕の従ってもらうよ」

「ありがとう。ならばこちらへ。私の研究所は、歩いてみすぐの場所だ」

そついつて、研究者はぺこりと頭を下げる。

信じるしかない。

## 第十話：ワルツ第十楽章（後書き）

ナナ「うー、ドキドキするなー。オリオンレポート、今回のゲストは、なんとあの方！」

ヨシ「緊張するよ」。で、では、ゲストの方、どうぞ！」

八雲「・・・くらいですね」

ナナ「ああ、こっちです会長！ここに座ってくださいね」

ヨシ「あ、あの！会長には、今から質問に答えていただきます！」

ナナ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃くんの気に入ってる所です！」

八雲「好きなものは、パンと学校。嫌いなものは粗野粗暴な人、趣味は裁縫、特技は情報収集、姫の気に入っているところは・・・」

ナナ・ヨシ「ゴクッ」「」

八雲「はて、どこでしょうか？」

ナナ「そこでボケるんかい！」

ヨシ「ちよっ！会長になにしちゃってんのよー！」

ナナ「はっ！つい！」

八雲「はて・・・どこでしょう・・・」

ナナ「会長が思考の海に潜ってる間に！」

ヨシ「感想、評価お待ちしております！では、また次回！」

## 第十一話：ワルツ第十一楽章

「会長！会長！起きてください会長！」

「おい慎吾、会長はまだ起きなさらないのか」

「今起こそうとしてるんですが、こんなときまで、まったく！」

「御前は？あの人を呼んで来るんだ。一発だろ？」

「申し訳ありません、アドルフ。御前は本部会へ確認を取りにいます」

「もう俺が手筈を整えてる。あとは会長を起こして出発するだけだ」

「仕方がない。起きてください！会長！………静香御前がお怒りですよ」

ガバツ

「お静！俺が悪かった！」

「会長、大変です！」

「お静！すまん！何をしたのかはしらんが、すまん！お静！……んあ？つてなんだよなんだよ！まだ4時じゃねーか！外真つ暗な時に俺起こすんじゃないよ！昨日野生種いくら殺ったと思ってんだよ寝させる」

「慎吾！会長が起きたとほかの者たちへ。出発の準備を手配。会長、緊急連絡が入りました」

「緊急連絡？なんだ？」

「学園に野生種が襲撃しました！数は昨日俺たちが倒したのと同じ数です」

「な、なんだと！？」

「野生種が、学園に侵入しました！」

「！……すぐに、学園本部へ連絡！大学に残した奴らとの連絡は

？とれたか！？状況は！？」

「本部へは御前が。残った者たちはみな初等部から本部へつながる西地区の防衛へまわってるそうです」

「南から東へのオリオンパイプは！？」

「あそこは高等部と待機部隊に守ってもらうしかないかと・・・」  
「無理だ。くっ！すぐに学園へ戻るぞ！準備は済ませてあるだろうな？」

「はい。会長の分は御前が」

「わかった。すぐに飛行錬金核に乗るよう指示を出せ。10分後に発信するぞ！」

「了解。もう出してます」

「全員スクランブル！連金核のリリースを許可する！行くぞ！」

「・・・野生種の同時多発か？ありえん。百年に何度あるか・・・まさか」

「名前を覚えてくれない？」

人の戻り始めた商店街を抜け、大学の研究所の集まる区画へとはいつていく。

小林さんは、不可視の状態に入っている。精霊核のかけらでここまでする力は戻るんだ。きつとうまくいく。

にしても目の前の研究者風の人間について行っているが、正直本当にこいつは胡散臭い。

まず街に溶け込み切れていない。浮いている。研究者も多いこの学



園都市だ。白衣は多く見かける。だが目の前を歩くこいつは浮いている。存在が、じゃない。こいつのいる空間がもう浮いているのだ。

黒い色の中に、濃い藍色があるような、光の加減ではまったく変わらなくなるような、そんな感じた。でも後ろから光を当てれば、青だけがはつきりと目につくような、なんというのだろうか。これは

「おや？興味を持ってくれたのか。いやうれしいものだね」

『興味というより、初対面で名乗らないあなたの常識を疑っているだけです』

「私はツキコ。ツキコだ」

「あー、苗字は？」

「ないね。ツキコ。ただのツキコだ」

「つてことは女性？」

「そうだね。よく言われるよ。男っぽいとね」

女性、女性・・・ああ、言われると女性にしか見えない。男っぽいところもあるが、今は女の部分が“浮いて見える”。

「ここだ。私の自慢の研究所さ」

「えっと、ここアパートじゃ？」

「・・・地下、さ」

なんか前もこんなのがあったな。地下好きなのか？錬金術師ってのは

「ここ？」

「ああ、ここだ」

「ずいぶんと、なんていうか、その、えーっと」

『見かけ、だけ、は一流なんですね』

「まあね。さ、精霊クン、その銀色の台に座ってくれ」

研究所だ。診察室なんて期待できない。あるのは椅子と机。あとは電子機器の山。一際大きな机は、会議用のものなのだろう。

『座りましたが。それにしても、他に人間がいませんね？』

「ここは私だけの研究所だね。個人の研究施設にはなかなか豪華だろう？」

「豪華っていうか、なんていうか、でかいよね」

『いけません、姫。華美な装飾は、無駄以外の何物でもありません。質素堅実です』

「それ、小林さんが言っちゃだめ」

「いいから、早く始めよう。これが、人工精霊錬金核だ」

「錬金核？なんでそんなものが？精霊核じゃ・・・」

「錬金核の技術を応用して作ったんだよ。精霊の霊力波長は実はすごく単純だね。人のそれとほぼ変わらないんだ。違うところ、それは根っこが精霊特有の霊力か人間の霊力かってことだけで、そこさえ説明できればすぐにでも製作可能ではあったんだ」

いや、それは簡単じゃない。簡単だったら、今頃世界は精霊だらけだ。

「でも私は、これを以降に精霊核は作らないよ」

「え？なんで？」

「私は、完成品は一つしか作らないことにしてるんだ。量産する気がなくてね。というか、情熱が冷めるとなんでこうなったかがわからなくなってしまうんだ」

「と、とにかく！その精霊核を小林さんに！」

「少し待つてほしい。この精霊核は、あくまでも人工の紛いものだ。本物と比べれば、月とすっぽん。ゴミと思ってもらった方がいい。それに頼るってことは、小精霊である力を削ることを意味する」

「人になるってこと？」

『そうですね。人と同じように、霊力を空気のように補給する必要が出てきてしまいます。力はいつもと同じように送ってもらえれば、大きな術を使うことは可能です。しかし、昔のようには、うまく術を使えなくなるでしょう。元の霊力が削れるわけですから』

精霊としての霊力の制限。人ではない肉体。きっと、これはとんでもないことだ。

「でも、それでも、消えるよりは百倍増しだ！消えるなんて、許さない」

「わがままなんだね。君は。そして強情。見かけとは大違いだ」

フツと、ツキコさんは笑った。普通なら、気に障るのだろうけど、なぜか少しも嫌にならない。懐かしい。初めて会ったはずなのに。初めて見た、顔のはずなのに。

『勝手気ままなのは認めましょう。それより、早くすませましょう。八雲さんが目覚める時間です』

「八雲・・・大地、八雲かい？」

ボソッと、つぶやく。驚き、そして何かはわからない感情。声に震えがまじっていた。

「え、ええ。知り合いですけど？あ、ツキコ・・・さん？も知り合いな、ですか？」

「そう警戒したような態度でいられるときみしいね。彼女とはちょ

つとした縁があるだけさ」

「さ、始めよう。無駄話が過ぎたようだ。じゃあ、この錬金核を持つてくれるかい？」

よくよく見ると、精霊核は丸い水晶のようなものだった。中心に、鈍く青く光るモヤが透けて見える。

「君たちがどうそれを使うかまでは知らなくてね。さ、初めてくれるかな？」

『姫、霊力を少し、分けていただきますか？この陽の霊気だけでは、向こう・・・精霊界の半分もありませんから』

小林さんは、丸い精霊核を額にくっつけ、目をつむる。体が鈍く青く光り始める。

「送るよ」

「いいデータがとれそうだ」

結果を言おう。

成功だった。

でもそれは、俺の中の、ツキコさんという存在への、言いようのない違和感を強めていった。

彼女は果たしてどういう存在なのか。  
錬金側の研究者でありながら、元魔道精霊士。そしてその知識は天  
空人時代並みだ。

でもそれでも、友達を助けてくれた。

「ありがとう。ツキコさん」

「……………あ、ああ。そう、ね。フツ。どうい  
たしまして」

よかった。本当に、よかった。

<ヴーーーーー>

『姫、携帯が』

「ああ、えっと……あ！薫さんからだ！」

『では、戻りましょう』

「うん。あの、このお礼は必ず！必ずしますから！すみません！今  
は時間が無くなって……」

「いつていいよ。私は、今とれたデータを早く解析したくてたまら  
ないんだ」

「もう、本当にありがとうございました。行こう！小林さん！」  
『待ってください。今の私は、歩くだけでも精一杯で』

「大きく、育つものなんだよね。人っていいというのは。分かってはい  
たんだ。それでも、昔と、変わらない笑顔・・・」

思い出す、あの日々。

見守る。それが。

それが、私の、私の立ち位置。それでいい。

せめて、せめてもう一度。

あの笑顔を、見たい。

## 第十一話：ワルツ第十一楽章（後書き）

ナナ「ハ―イ！今日は、テンションあげて、行っちゃうわよ！」

ヨシ「オツケイオツケイ！さー、今日のゲストは――――」

ナナ「この方！姐さんこと、火崎 薫！」

薫「スポットライトか！眩しいけど気持ちいいじゃねーの」

ヨシ「さあ、我らがクラスの仕切り役！姐さんにさっそく五つの質問！」

薫「うっし。どんと来い！」

ナナ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃くの気に入ってる所です！」

薫「あー、好きなものは『おため』のA定食とB定食と日替わり定食、嫌いなもんは根性のない奴、趣味は体を鍛えることで、特技は車の運転かな。あ、言ってなかったかもしんないけど、あたし一回ダブってっから18なんだよね。ま、後からその話は出るだろーけど。姐ちゃんの気に入ってることは、んー。かわいいところか」

ナナ「流石、姐さん。言い難いことでもかまわず言っちゃうのね」  
ヨシ「憧れるよねー」

八雲「でもああなっては、女としてどなのかと」

美奈子「まったくだ。薫はもつと女としての慎みと恥じらいというもののだな」

薫「なんだ？まるであたしが女っぽくないみてーじゃねーか」

美奈子以外全員「え？気づいてなかったの？」

薫「てめーら！そこに直れ！あ、こら！逃げんな！てめーら全員鉄拳制裁だ！」

美奈子「まったく、騒がしい奴らだな。あ、評価、感想お待ちしております。では、続く！」

第十二話：ウルツ第十二楽章

携帯電話片手に、もと来た道を一目散！……つていきたいとこだ  
けど、それは小林さんの無理、つてわけで、ゆっくり急いで移動  
中。

< R R R R R . . . R R R ガチャツ >

「あ、もし、薰さんですか？」

「おう、  
姫ちゃん」

「すいません、さっきは手が離せなくて」

「いいって。それより、八雲が目、覚ましたぞ」

「そうですか！よかった・・・八雲さん、大丈夫ですか？」

「ま、一応はな。でも靈力の過度な使用で、ちょっと靈力にノイズが入っちゃってるから、最低一週間は靈力の使用禁止だけだよ」

「でも、それぐらいで済んでよかった！もつと大変なことになってないかって・・・」

「ったく。 姫ちゃん は心配性 すぎんだよ。 あんな慌てた顔してきたから、 てつきりあたしらもひどいことになってんじゃないかって、 余計な心配しちまったんだからな！ センセーなんて大泣きしたんだぜ？ あの年で……って痛いっ！」

ドゴツと後ろで鈍い音。薫さんたちの様子からして、本当に大事なさそうだ。霊力ノイズなんて、訓練してれば何度か体験するものだ。本当によかった。

「ってーな。センサーガチで殴っただろ！……え？変われ？へいへい。んじゃ姫ちゃん、センサーに変わるぞ」

「の前に、なんで薫さんまで俺のこと姫って呼んでるんですか？」

「え？なんでって、そんなのかわいからただけ？」



「・・・もういいです。先生と変わってください」

「ケラケラケラ！ほらセンサー、後よろしく」

しばらく話し声がボソボソと聞こえて、ガタツという音と一緒に相手の声が変わった。さっきとは打って変わって凜とした声。

「もしもし？」

「あ、先生」

「ああ。日乃か？私は大泣きなどしてないぞ「してたじゃねーかよ」うるさい薰！こんどは本気でやるぞ！・・・ああ、それでだ。どうだ？そっちの用事は済んだか？」

「はい。もう大丈夫です。で、どうします？」

「生徒会室を使おうかとも思ったんだが、後片付けやらなんやらでな。学園内には職員が大勢いる。ここで話し込むのは少し無理があるかもしれない」

「あー、じゃあ、どうします？」

「そうだな。人が寄り付かないところがいいが、だが八雲もまだふらついている状態だから、できればベッドのあるところで休ませながらじゃないと辛いだろう」

「寮は？八雲さんの部屋とかなら・・・」

「それは考えなくてもなかった。だが寮は宴会騒ぎになってるらしい。職員宿舎もじきに同じ状態になる。となると場所がないんだ」

確かに、あんな緊張状態から解放されたんだ。一気に糸が切れて弾けてるんだろう。クラスメイトの顔を思い出すと・・・乱痴気騒ぎだな。

こっちの気もしらずに、とは思わなくてもない。だがあと仕事まで当事者が。尻拭いをほかの人間にさせる気なんて毛頭ないし、なにより事態が特殊すぎる。不可能だ。

「俺の部屋は？ほかに住人はほとんどいませんし、たぶんその人たちもほかの場所へ行つてると思います」

「いいのか？おまえがいいなら、こつちも文句はないんだが」

「大丈夫ですよ。狭いですけど、モノがほとんどありませんから、四、五人くらいなら余裕です」

「わかった。確かオリオンハイツだったよな？」

「はい。今俺がいる場所家に近いんで、先言つて準備します」  
「すまん」

それっきり、電話は終わり。

さ、ベッドやらなんやら準備しなくちゃな。

『男の一人部屋に複数の女性を……。いやはや、それが愛、ですか』

「そんなんじゃないし、愛は関係ないでしょ」

『それより、私はどうしましょうか。隠れておくにも、今は不可視にはなれませんからね』

「なにいつてんの？説明するよ」

『はい？』

「いや、説明するつて。つていうか、小林さんは現段階でむこうに帰れない、精霊の力を使えない、つてなつたらほとんど人間じゃんだつたらとりあえずは居場所作つとかないと。もしかしたらむこうに帰れないかもしれないんだよ？」

むこうに精霊核があるのにこつちで精霊核を持ってしまう、なんて前例がない。何が起こつても不思議じゃない。

『確かに、一理ありますね。ですがいきなり精霊だと明かすんです

か？」

「うん。俺のことも含めて、全部、説明する」

『姫……』

「もう八雲さんには言っちゃったしね。なんか一人に話したら、すつきりしてさ。変えられないんだ。過去なんて。だったらもうしょうがないじゃない？」

『ですが、問題は山積みですよ。すべて話したとして、それ以外の全員に話すわけにはいかないでしょう。当事者だけにとどめておくべきです』

「カバーストーリーが必要だって事？」

『それも、なんの矛盾点もない、完璧なストーリーが』

「問題山積みだね」

『そう言っただでしょう？』

「ま、最初は隠れててよ」

『どこに？』

「押し入れ」

「さ、八雲、ここに横になれ」

「すいません。姫、借りますね」

「いえいえ。じゃ、あー、すいません先生、薫さん。少し席をはずしてもらいませんか？」

「おいおい！ここまできてそれはないだろうよ」

薫さんがムツとした顔で言った。でも今は一番確認しなくてはいけないことがある。

「大丈夫です。えっと、八雲さんと情報を一度整理したくって」「それなら私たちがいてもよくはないか？」

確かにそうだ。どうしよう、あのこと、二人が知っているかどうかもわからないのに、むやみに話すべきことじゃない。

「お願いします。どうしても、確認しなくてはいけないことがあるんです」

すると薫さんの表情が変わった。

「姫ちゃん。ちょっと外でよう」

「え？」

「いいから、日乃。外へ出るぞ」

「先生、八雲は？」

「大丈夫だろう。霊力は使えないし、なにより今の状態じゃ一人では動けまい」

「あの、なんで外に出たんですか？部屋に戻らせてくれませんか？」

「・・・それは、八雲の笑顔のことか？姫ちゃん」

え・・・？

「お前も見たのだな？日乃」

二人は、あの事を知っている？あの壊れた笑顔を見たことがあるのか？

「見ちまったんだな。・・・安心しろ。姫ちゃんが心配してることは大丈夫だ。その時の記憶は八雲には残ってない」

ってことは、当事者は全く知らないってことが。

「私たちも一度みたことがある」

「その時はなぜ？」

「昔、北関東で錬金術師を狙った傷害事件が多発してな。その事件の犯人の精霊魔道士を、調査を依頼された私たちのチームが、犯人の仕掛けた罠に嵌まって追いつめられたんだ。そのときだった」

「あの野郎、今でも許せねえ。でもよ、あの時の八雲は人間じゃなかった。すぐに先生と私、学生会の先輩で抑え込んだからよかったんだけどよ。あのまま行つてれば相手は廃人になってた」

あの時、違和感を感じた時に先生たちは止めたのだろう。俺らがのんきに感心してるときに。クソッ！あの時止めてれば、八雲さんは今より苦しむことなんてなかったからかもしれないのに。

「まさかまたなっちまったなんてな・・・」

薫さんは、うつむいて、首を振った。

「理由は私らにもわからない。調べてはいるんだが、前例のどれに

も当てはまらない。本人に聞くのは、それを自覚させることになってしまう。教えたほうがいい、そして対策を立てればいい、そう思ったんだがな。・・・勇気がなかった」

ふたたび起こってしまったこと、その理由は自分にあるという後悔。

「・・・俺にも、話す勇氣はありません。八雲さんを知ってる人ほど、繋がりを追っている人ほど、話すことなんてできないのかもしれない」

本人のことを思うほど、話せなくなる。でも思っているからこそ、話さなくてはならないと、そうやって板挟みにあって動けなくなってしまう。

「今は、今は話すべきではないと、そう思います。でも近いうちに話さないといけません」

二人の目を見て言う。逃げじゃない。ただ、今はそのタイミングではないのだ。

お互いに、心の整理をしなくてはいけない。だがそのままズルズルといっっては今と同じことが必ずもう一度おこる。

「そーだな。覚悟、決めないとな」

「ああ。今はまだやることが残っている。それを片づけて、タイミングを見て、みんなで話そう」

八雲さんのことがひと段落して、今やること。それは後始末だ。

「部屋に戻りましょうか」

「そうだな。先に行っとけ。こういうときは、茶で一服と相場は決まっている」

「お？センサーのおごり？ならあたしゴルゴンの紅茶のミルクティー！」

「ふっ。日乃は？」

え？おごつてくれんの？

「コ、コーヒーの、ブラック」

「ブラックか。わかった。八雲は、おーいお茶さん、でよかったよな？」

「そぞ。ホットで」

「よし。売店・・・は近くにないな。自販機は？」

「あ、その角の所にあります」

「じゃ、行ってくる」

頼りになる人たちだ。

「行こうぜ。八雲が待ってる」

本当に。

「姫ちゃん、センサーが何買ってくるか当ててやろうか？」

「え？わかるんですか？」

「絶対ストレートティーを買ってくるんだけどな、それはカバーだ。いっつもいちごミルクを買ってたんだよ」

「え？なんていうか、想像つきませんね」

「あの人甘いもの好きだからな。お礼は甘いもんがいいぞ」

「そうします。薫さんは？」

「は？」

「薫さんは何が好きなんですか？」

「あたし？あたしは・・・酒かな？」

「え！」

「まってるからなー」

現在、上空10000メートル。

超高速航空機、飛行錬金核「星雲」内。

「会長！本部から連絡が」

「なんだ？まさか・・・」

壊滅、の二文字が頭に浮かぶ。

「いえ、そうでもないようです。まずはこれを」

渡された、メモ用紙。それに書かれた一文。

「な、なんだと！」

「啓太さま、いったい何が？」

「学園の野生獣の群れが、一瞬で消え去った、らしい」

周りの目が変わった。



「会長、詳しいことはこちらで。吉美！このメモリの中のデータをこっちに送ってくれ」

「りよ、了解。ちよっとまっってくださいね。会長、送ります」

俺の鍊金核から、大きなウィンドウが展開される。

「いったいどういうことだ？・・・静香、慎吾もこっちへ。アドルフ、機内無線を機関部へつなげ」

「すぐに。はい、いいですよ」

「機関部！おい清彦！聞こえるか？今から鍊金核のコアの調整は任するぞ。飛行機落とすような真似だけはするなよ」

『ガガツ・・・あいあい。でも、この飛行鍊金核のコアって調整難いんすよねー』

「真琴、サポートは任せたぞ」

『了解・・・清彦、あんた少しは緊張感もって動けないのかしら？』

『え？緊張ならしてるよ。今だって・・・』

「通信を切ります。吉美、データを表示」

目の前に浮かぶ映像は、おそらく学園都市周辺の略図だ。

「この映像は、むこうの話を聞きながら、私がまとめてみたものです。かなり簡単ですけど、一応この赤い円が野生種の勢力範囲です。相変わらず、この男、アドルフの仕事の腕は異常だ。」

「野生獣が、学園都市の防御システムを突破していきます。そして、最終防衛ラインに突入」

円が学園と触れるか触れないかのぎりぎりで止まっている。

「防御システムがこうもあっさりと・・・」

学園の警備は慎吾の管轄だ。責任を感じているんだろう。だがそれを言うなら俺の、俺たち学生会全員の責任だ。

「そして、約10分後」

学園を囲みこもつとする赤い円が、パツと消えた。

「意味がわからん。アドルフ、どういうことだ!？」

「それがわからないんです。ただ、消える直線に空の色が変わり、強大な霊力を高等部のほうから感知したということ、そして突如振った光の雪、閃光、連鎖して爆発した野生種の姿・・・むこうもかなり興奮していたので、聞き出せた範囲ではこれが全てです」

ますます意味がわからん。

「おそらく、魔道精霊ではないでしょうか」

全員の沈黙を破ったのは、吉美。

「吉美の言うとおり、そうとしか考えられません。しかしだとすると、なぜそれが学園内から？」

「それだけじゃあねえ。学園を囲むほどの野生種がいた。それほど数は、最大発生数クラスの数だ。その数が学園を囲んだってことは、野生種がほとんど損害なしに防御システムを破ったことになる。

新記録更新、ってならわからないけどよ、今まで、過去何百年もの記録を、そうそう破れるとも思わねえ。加えて、同時多発だ。同時多発なんて、過去何度記録されてる？どう考えてもおかしい。俺はそっちのほうはどうにも気にかかる」

わからないことが多すぎる。だが、ずっと、頭の奥でちらつく一つの仮説。

「静香、おまえはどう見る？」

「啓太さまの考えと一緒にと思います」

「アドルフ、おまえは？」

「私も会長のお考えで間違いないかと」

「慎吾」

「おそろくは・・・考えたくもありませんが」

「吉美」

「い、いっしょです」

やはり・・・間違いなく、

「シリウス学苑からの、攻撃ってことか」

## 第十二話：ワルツ第十二楽章（後書き）

ナナ「二年！」

ヨシ「C組！」

ナナヨシ「美奈子センサー！わー」

水原「金八先生か。わたしの尊敬する教員の一人だ」

ヨシ「やっぱ教師もののドラマとか超見てるんだろうね」

ナナ「だろうな。熱血だし」

水原「うるさい。で？なんだ？この暗い部屋は」

ヨシ「ここは私たちの出番のためだけに作った、特別仕様なのです」

水原「おいおい。不健康すぎないか？あまり感心しないな」

ナナ「いかに先生といえども、ここは私たちの戦場です。やめるわけにはいきません」

水原「白鳥……。そうか。ならばもう何も言うまい」

ナナ「いえ、先生には質問に答えてもらいます」

水原「……」

ヨシ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃くんの気に入ってる所です！」

水原「まったく。好きなものは動物。嫌いなものは虫だ。趣味は映画観賞、特技は数学だ。数学教師だしな。日乃の好きなところは、素直なところだな。あとは素質がある。過去云々を抜きにしても、かなりのレベルだ。将来が楽しみだよ」

全員「つまんねー」

水原「な！おまえら！」

全員「おもしろみねー」

水原「お、おまえら！言わせといてそういう態度は許せないな。鉄拳制裁だ！」

全員「シールド展開！」

日乃「え？なんですか？押さないで下さいよ。もー」

全員「君の犠牲は無駄にしない……逃げろ！」

日乃「なに逃げてんですか！」

水原「ほお。おまえが代表で制裁を受けると」

日乃「さ、最後に一言いわせてください！」

水原「許・可・し・よ・う」

日乃「あ、あの、感想、ひ、評価お待ちしております、よ、読んでくださってありがとうございます、たああああああああああ」

ああああああああああああああああああああ

水原「逃がさん！」

### 第十三話：ワルツ第十三楽章

「みんな、出て行ってしまいましたね」

記憶がまだあやふやになってる。頭がスキツとしない。体も動かない。

何があったのか。記憶にはいった亀裂。

何か、あったのは分かる。

よくないことがあった。

違和感。強い違和感、重い。鈍痛。

変化した雰囲気。

いや、なにかをされていた訳じゃない。

「私の知らない、私・・・」

やめよう。こんな状態で考え込んでも、いいことは浮かばない。暗い気持が回るだけ。

でも頭には残っている。反芻している。なにか、気を引けるもの。

「そういえば、このベッドは姫の・・・」

なんだか恥ずかしくなってきた。

「姫の・・・ベッド」

ああ、意識しだしたら止まらない。

どうしよう、身動きが取れなくなった。

いや、そんなことだ。たかが、そんなこと。

・・・なんて、そんな、流せることではない！

ああ、今度は変な方向に頭が回りだしてしまった！

『愛ですねえ。愛を感じます』

！

「こ、小林さん？」

『まさか、この私が押し入れから出てこなくてはいけないとは』

小林さんが、のそのそと押し入れから出てきているところだった。  
え？なんで？

『いやいや、力を失ってしましましてね。姫が門を開けなくなってしまうって、精霊核からの霊力供給がストップしてしまったんです』

門が閉じた？精霊の門が？

「いえ、その、なんでそんなことに？」

『いかに姫と言いましても、慣れないものを長時間使えばそうなります。いま、姫の霊力は底をついてますよ』

外見が大きく変わっている。

長い金髪に、真っ白なローブの容姿なのは変わらない。違うのだ。

羽がない。それに、あの圧倒的を通り越して、暴力的とも言える存在感が消えている。  
体中から溢れる光が消えている。

天使が人になったような、そんな非現実的な雰囲気だ。

『まあ、雑で急ごしらえですがね。なんとかこの世界にとどまっているような状態です』

「あの・・・それでなんで押し入れに？」

『それは聞かないお約束』

到着してみれば、学園内は平和そのもの。

残留しているはずの、野生種の霊力すら感じない。正にいつも通りの光景。

「信じられん。本当に野生種の襲撃があつたのか？」

見回す限りお祭り騒ぎだ。

「それは間違いありません。リーダーの記録を見る限り、確かに野生種はここを襲撃しています」

「ますます、意味がわからんが・・・。アドルフ！とりあえず、学生会幹部を集める。本部に戻って状況を整理する」



「了解」

「状況を、とにかく整理しなくては、無事だったと安心することも  
できん」

「そうですね。啓太様、お体は大丈夫ですか？昨日あれほど戦いになつたのに、あまり寝ていないんじゃないや・・・」

「御静。大丈夫だ。それに今はそんなことにかまつてる場合じゃない。だろ？」

「それはそうですけど、疲れた状態では、満足な判断ができるかどうかもわかりませんし、それに、」

「そんなときやお前がいるだろう？それに慎吾もアドルフもいるんだ。とにかく、はやく状況整理だ」

「・・・はい。ですが決してお無理はなさらないでくださいね？」

「大丈夫だ。大丈夫」

今は、状況を把握したい。

なにがあつたのか。

クソッ。後手に回りすぎてる。

「ん、おじゃましまーす」

薫さんからまさかこの言葉が聞けるとは。何も言わずに入っていくかと思つていたよ。

「にしても狭いよなー」

ま、それでも遠慮は知らないんだけどね。

ずんずん廊下を歩いていく。玄関入って廊下。まっすぐドアのほうへ行けばリビングキッチンだ。

廊下の途中にはトイレと風呂。一応別だけど、洗面所と脱衣所は一緒に、全部かなり狭い。洗濯機は寮の一階にあるので共同だ。二層式の年代物で、色んな洗剤のにおいが染み付いてるけど、コインランドリーで金払うよりはましだ。ま、使うときは掛けられてる表に名前書かなきゃいけないんだけどね。使いすぎると家賃プラスだし、書かずに使つと、ばれたら最悪退寮って話だ。

家賃はかなり安い。けど、ここは寮のくせに飯が出ない。なんでも部屋にキッチンが付いてるからいいだろうという、先代の寮監からの習わしだ。

にしても、風呂、かなり狭い。というか、風呂には浴槽しかないといっても過言ではない。シャワーでためないといけないし。とうか、風呂ためたら体洗えないじゃん！と当初はおもったが、まず温まってから体を洗う、というスタンスならどうにかなる。ま、一人のときしかできないけど。

ガチャ

「おう八雲！寝てないとだめじゃねーか・・・って誰だお前！」  
は？

『すいませーん、姫、狭くて暑苦しいので出ちやいました』

何やってんだよ小林さん・・・。

「で？こいつが、姫ちゃんの言ってた連れか？」

「はい。俺が契約した固有精霊の、小林さんです」

「こゆうせいれい？は？なんだ？それって、魔道精霊師が使うもの  
だろ？え？意味わかんねえ」

「あの、それは、えっと。ちよつと待ってくださいね、俺も、説明  
する順番を考えてたもんで、えーつと・・・」

『姫は突発的なことには本当に弱いですよね』

「小林さんが言っつなよ！小林さんが！」

「おじゃまします。戻ったぞ。いや、あの自販機は結構品ぞろえが  
良くてなー・・・って誰だお前！」

ああ、事態は悪化する一方なのね。

「この際、お前たちのことは不問にする。とにかく、何が起った  
のかを俺にきちんと説明しろ。混乱してるのは分かるが、俺たちは  
何も知らないんだ。なにをどうすれないのか、全くわからん」

目の前にいる学生会のメンバー十一人全員が、落ち着きなく目配せ  
をしあっている。混乱してるんだ。俺もそうだ。だが、このままで  
は埒が明かない。

「さっさと言え！俺だって訳わかってないんだ！説明しろ！不問に  
するって言っつてんだろっが！」

一斉にビクッ。そんなビビらんでも・・・。

「会長、あの、えーっと、その・・・」

「ケネス、落ち着け。まずはー、そうだな。野生種がいつどうやって発生したか、からだ。そこから順を追って、ゆっくりでいい。焦らないで、一つずつ教えてくれ」

ケネス・シエン。学生会整備委員長。19歳で最年少。オリオン学園の各校舎の管理、や全体の用具の整備を行っている。おどおどしているが、責任感と正義感は慎吾並みだ。

「ケイちゃん、そこはあたしが説明する。リーダーに野生種が感知されたのは7・00時。それから大学の部隊を派遣したんだけど、止められなかったの。そして10・30時に第一防衛ライン突入。あたしたちもすぐに現場に向かったんだけど、その時はもう第三防衛ラインまであと少してところだったのよ。すぐに学園に緊急警報を出して、そのまま討伐部隊を編成、学生たちを誘導しつつ、応戦体制を敷いたわ。それが10・47時」

桐沢 大輝。学生会厚生委員長。22歳。商店街や学園内の寮の管理を行っている。俺がスカウトした、体は男だが、心は女という。いわゆるオカマだ。アマリリスというのが、大輝の今の名前らしいが。

「俺たちに連絡入れたのは、時差的に考えて、そのぐらいの時間だな。対象が第三防衛ライン侵入時に警報発令。マニュアル通りだな。だがなぜもっと早く俺たちに連絡を入れなかった！」

「それは、会長たちも野生種との戦闘中である可能性があったからだ。そちらの状況を把握できずに、無暗に連絡を入れるのはどうか、

ということもあつた。何より野生種がこの学園の霊力を感じて、避けていったり、防衛ラインに阻まれ逃げるといったことも否定できなかった。・・・今は言い訳にしか聞こえないが、な」

新堂 楓。学生会風紀委員。21歳。学園内の風紀を守る、学園内で最も恐れられている存在だ。堅物で古風だが、人情味のある気持ちのいい女でもある。

「・・・そうだな。普通はそう考えるし、普通なら、そうなっていたはずだ。お前らの判断は間違えてはいないだろう。・・・今はそういうことを言っている場合ではないな。それで？最終防衛まで侵攻された訳だな」

「はい。第四防衛ラインを突破されたあたりから、野生種は侵攻のスピードをうんとあげてきました。えっと、10分かつらずに、最終防衛ライン寸前まで突破されました」

小町 春香。学生会文化委員長。20歳。学園の各図書館と管理、文化部の総括、文化祭の指揮がおもな仕事だ。小柄で、実年齢よりかなり幼い容姿と甘ったるい声をしており、人見知りする性格だが、芯は強く、やるときはやる奴だと評価している。

「早いな。ということは、恐らくこのあたりから人為的に突破された訳だな。防衛網は？しっかりと組んだはずだろう？」

「組んだコトは組んだが、大学部の隊員以外はほとんどハジメテの対精霊戦だ。必然的に、主要ブロックの防衛に主力を置くことにナル。しかも増殖した。・・・絶望的だった」

サリー・サンジェル。学生会体育委員長21歳。グラウンドの整理、

体育系の部活動の総括、体育祭の指揮を行う。まだ言葉に異国のなまりがあが、かなり上達したほうだ。普段は陽気だが、理性的になったり、かなり複雑な性格をしている。

「増殖は、野生種なら頻繁に行うことだ。・・・経験不足だった、な。そしてここからだ。何があった。増殖までした野生種が、なぜ爆発し、なぜ霊力も残さず消えた！」

「あたしらで、他の奴らの証言まとめてみたんだけど、共通しているのは空が赤く染まったこと、光の雪が降ったこと、そしてその雪が光の槍に変わって、野生種たちに降りそそいだこと。以上よ。でもね、高等部にいた子達が言っただけで、その光が出るほんの少し前に、八雲ちゃんの放送が聞こえたんだって。高等部の回線だから聞こえなかったんだけど、『最終兵器を使うから、下がっている』って言うてたみたいよ。しかも、そのうちの一人が、光の輪に乗って飛んでいく血まみれの男と八雲ちゃんを見たって」

高等部に最終兵器？そんなものはあるはずがない。管轄以外にも、学園内の点検管理も学生会が行っている。特に俺の代になってからは力を入れてきた。それこそ学園内のすべてを。

「八雲って、あの？美奈子さんの生徒で、無愛想な・・・。だったよな？御静」

「ええ。たしか・・・そのはずだったと・・・でも啓太様、あの子はそんな、最終兵器をわざわざ前置きまでしてまで人前で使うなんてこと、しない子だったと」

静香と一緒になんだかあったことがある。美奈子さんは俺たちの先輩だし、なにより大学に入ったら学生会に入れようと思っていた候補の一人だ。冗談言ってもクスリともしなかったよな、確か。隣に

いた薫はゲラゲラ笑っていたが・・・。

「どう考えても、おかしいな。性格からして、こっちに連絡しているはずだ。そんな物騒なものならなおさらだ」

「あの、お二方の言葉から察するに、その八雲さんは最終兵器の存在を、周囲に隠していたかもしれないということですか？」

アドルフの言ったことが一番可能性が高いだろう。が、どうもそれはないような気がする。命を預けあう仲間に、武器の存在隠す意味がない。なにより効率的でない。あいつは人の上に立つということをよく理解していた。有事の際に己しか使えないなんて、不確定なものに頼ることになってありえないはずだ。

「もしくは、ギリギリのタイミングで、なにかとんでもない方法を考えていたのか、ですね」

慎吾のつぶやいた一言。！・・・そういえば、高等部に転校生がいなかったか？たしか、付属女子に初めての男子生徒。あいつ確か、

「たしか、その男の子はシリウスから来たって、記録を読んだ気がします」

「吉美！そうなんだな！？」

「え？あ、はい。ね？真琴ちゃん」

「見たわ。珍しいわねって、話した記憶があるわね」

地下・・・。

ある。いや、これしかない！不確定事項が山ほどあるし、なにより奇跡的な偶然が重ならなくてはならないことだ。だが、今考えうる中で一番しっくりくる仮説だ。これしかない！そう思える。普段なら笑って流すようなことだ。でも今はそれしか考えられない。あまりにありえない答え……。

「アドルフ！すぐにツキコ博士を呼べ！確認したいことがある。それと、八雲、薫、美奈子さん、それからその転校生の男子もだ！」

ようやく、事態を把握できたぞ！



### 第十三話：ワルツ第十三楽章（後書き）

ナナ「はーい。みなさんオリレポの時間ですよー」

ヨシ「でーすよー」

ナナ「今日のゲストは？」

ヨシ「ゲストは？」

ナナ「木葉 円だー！」

ヨシ「マドカだー！」

円「ずいぶんと手抜きな始まりかたね」

ナナ「ビッグゲスト続きだったからねー。マドカくらいならこんぐらいでいいでしょ」

ヨシ「出番も私らとあんまし変わんないしね」

円「はあゝ。ま、いいわ。あんな濃いメンツに混じるだなんて、私には無理なもの」

ナナ「でしょ？濃すぎると思うのよ！ね？」

ヨシ「そうそう。消えちゃうって。私ら消えちゃうって！」

円「で？そんな話なら教室でいいでしょ？なによここ。暗くて狭くて」

ナナ「フッフッフ。ここは尋問する場所。取り調べる部屋よ！」

ヨシ「監査官なのさね！」

円「ゝ。わかった。じゃ早く終わらせましょ。昼休み終わっちゃう」  
ナナ「そういうところ好きよ。じゃあヨシよろしく！」

ヨシ「1、好きなもの2、嫌いなもの3、趣味4、特技5、日乃くんの気に入ってる所です！いつてみよう！」

円「好きなものはお漬物。奈良漬がとくに。嫌いなものは身の程知らず、かな。趣味は読書。休みの日は一日読んでもあるわね。あとは弓道。特技は・・・弓道でいいかな？一応部長だし。コウキくんの好きなところはーって、こんなことまで言わなきゃなんないわけ？」

ナナヨシ「ぜひに」

円「・・・意外と男らしいところ」

ナナ「え？聞こえなかったわよ？」

ヨシ「もつと大声で！」

円「い・や・よ。もう本当に間に合わなくなっちゃう。帰るわよ」

ナナヨシ「えー！」

円「次、担任のセンサー様よ」

ナナヨシ「すぐ、帰りましょ」

円「・・・まったく。ん？なにかしらこの紙？」

ナナ「やばいわ。宿題全部答え出し切ってないのよね」

ヨシ「あたしぜんっぜんやってないよー！」

円「なになに・・・ここまで読んでいただき、ありがとうございまして？ってこれなんか危ない文章じゃない。えっと、感想、評価、お待ちしております？ほんと何これ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8097d/>

---

学園精霊      勇者の時間

2010年10月10日19時33分発行